

S  
o  
n  
a  
r  
e  
 $\left( \begin{array}{c} 1 \end{array} \right)$

## 1

6 時間超えの移動時間と 3 時間の時差は、偏<sup>ひなえ</sup>にカティスの所<sup>せ</sup>為であると言いついていいに違いない。

久しぶりの懐かしいマンハッタンの摩天楼の麓、真昼の時間帯を過ぎてなお薄<sup>うす</sup>らと汗で貼り付く緋色の髪を掻き上げながら、少々不本意なこの案件への苛立ちを転嫁するように、オスカーは脳裏に浮かべたあの金髪の男の姿へ毒付いた。

いくら夏が蒸し暑かろうが、いくら冬が長く凍えようが、上流階級<sup>ハイソサエティ</sup>から路上生活者<sup>ホームレス</sup>までを抱え込んでどれだけ混沌<sup>混沌</sup>としていようが、ロングアイランド育ちのオスカーにとって馴染みの街といえば、間違<sup>まちが</sup>いなくこのニューヨークだった。世界中のあらゆる取引が集中し、弁護士としてどんな案件でも手掛けることができる街。大学こそアメフトを優先させて U<sup>カリフォルニア大学ロサンゼルス校</sup> C L A に通学したもの、将来的にはニューヨークで弁護士として働くことになる自分を疑わず、だからこそわざわざ法科大学院<sup>ロースクール</sup>はニューヨークに程近いペンシルベニアを選んだというのに。

「ロサンゼルスに支部を立ち上げることになってな。俺は来年からそっちに行くから。俺に付いてくるか、こつちの事務所の別の独立<sup>バトナ</sup>弁護士に乗り替えるか、お前も考えておけよ。紹介はしてやる。」

1 年目からインターンでもサマーアソシエイトでも散々通い倒した挙句、ニューヨーク「リモージュ & カルタヘナ法律事務所」の独立<sup>バトナ</sup>弁護士であるカティスにオスカーがそう告げられたのは、大学院

のJ<sup>法務博士</sup>D<sup>士</sup>課程の3年目、卒業する年度にも入ってからだった。法律事務所としては大型に入り、数多のパートナーを抱えるL&C法律事務所の弁護士たちのうち、ことさらにカティスがロサンゼルスへ行くことになった理由はといえば、程々のベテランかつ程々の若手ということと、何よりもニューヨーク州弁護士資格に加えてカリフォルニア州弁護士資格を持っていたからに他ならなかった。アメリカ合衆国では州ごとに弁護士資格が異なる。

気心の知れたこの陽気な先輩弁護士に、この時ばかりは思う存分まで罵倒を浴びせた後、オスカーは諦めとともに、カリフォルニア州弁護士資格を取得することとロサンゼルスへ付いていくことを決めた。いくらオスカーが学内で上位層常連の優秀さを誇ったとて、卒後すぐ独立<sup>バト</sup>弁護士として独力で条件の良い大型案件を取り扱えるわけもなく、他の大多數の新人弁護士と同様、数年間はいずれかのパートナーの下で雇われ<sup>アソシエイト</sup>弁護士として年限を積む必要があった。哀れなる哉。

いわば子飼であるアソシエイトたちを、パートナーが奴隷のように昼夜の別なく酷使するのがいったって普通のこの業界にあつて、カティスは弁護士としての手腕もさることながら、案件の捌き方、アソシエイトや他の協力弁護士への業務配分と権限委任とに極めて卓越していた。何よりもからりとしたその陽性の氣質が、オスカーのそれと合った。当然のことながらカティスの側も、早々に優秀なパートナーへと昇格して共に辣腕を振るうことになるであろうオスカーの才覚を見込んだ。勤務地の問題だけで縁切りとなるには互いに惜しい相手だったため、渋々ながらオスカーも当面の方針変更を受け入れることにしたのだった。

ちなみにオスカーは法科大学院の卒業時、当然のようにニューヨーク州弁護士資格も受験して取得した。合衆国内では何かと有利となる定番の二重取得は、他に例が稀なわけでも、あながち予め考えていなかったわけでもなく、またオスカーにできないわけでもなかったが、試験まで1年を切つてのことで相応に大変な思いはした。

そういう経緯からして、十数日前に上がった急遽の話とはいえ、このニューヨークで弁護士として活動できる数少ない機会は本来であれば歓迎すべきことのはずだったが、今回の案件ばかりはオスカーも話を超越したカティスへと早々に不満を顕にした。

「ライブレコーディングの出版契約？　なんでお前のところにそんなお門違いの話が来ているんだ、カティス。」

話の途中でゼニア生地のスーツのサイドポケットに両手をつ込み、オスカーは目を<sup>すが</sup>めてカティスに圧を掛ける。

「正確には演奏会の出演契約に引き続いての追加の出版契約だな。従前の出演契約については、基本的にリモートで俺のところで済ませてある。」

「どっちにしろエンターテイメントは専門外だろう。しかもニューヨークの。どうしてお前の案件になっているのかと聞いている。」

「俺にしか扱えない案件だったからだよ。」

個々のパートナーに割り当てられた個室<sup>クオース</sup>の中で、机の前に立ち不満たらたらの様子のオスカーからカティスは目を逸らさないまま、一度きしりとアローンチエアの背凭れのネットに深く沈み込み、徐<sup>おもむろ</sup>に立ち上がりながらそのローポニーテールを揺らして『まあ座れ』というように応接ソファへひらりと手を振った。話が長くなる、という意味だ。オスカーは顔を<sup>しか</sup>めながらもソファに掛けて足を組み、カティスは壁際のNespressoにカプセルをセットして二人分のドリンクを作り始めた。

「[l'unière]」

背を向けたままのカティスの言葉に、オスカーはぴくりと片眉を跳ねる。

「…って、聞いたことあるか？」

「…………あー…」

機器の操作の合間、振り返りつつ薄く笑みを浮かべて問うカティスに、眉を寄せて記憶を手繰るオスカーが心当たりのある風に答えた。その文脈で、ほんの微かに聞き覚えがあった。フランス系ではまあある名前だが、その噂とともに聞いた名の、響きが妙に耳に残ったので記憶している。

「やたらと大仰な噂のあれか？ 何だったっけか、『幻のピアニスト』だとか。」

返すオスカーの声音が嘲笑混じりになるのは避け難かった。いかにも商業的な煽り文句として利用されていそうなその手の実を伴わない表現に、オスカーはことさら嫌悪感を抱く。オスカー自身がヴァイオリンを幼少期から多少齧っていたために尚のことであつた。優秀なピアニストなどその辺りにごろごろしていて、皆が皆、掃いて捨てられないために必死で努力していることをよく見聞きしている。実力のある出演者が欲しいというのなら、わざわざ欧州から空路で調達せずとも、ジュリアードで石でも投げて当たった奴をコンサートホールまで転がしていけばいい。

「まあ、あながち『幻』も出鱈目ってわけじゃない。今回も俺と偶然とが仲良くダンスしてなけりや、多分実現はしていなかっただろうな。」

L & Cのニューヨーク事務所所属の弁護士に、その知人であるカーネギーホールの評議員が愚痴つたのだそう。『幻のピアニスト』。欧州の音楽仲間から伝え聞く、数少ない実演の評価の途方もない高さからして、その実力は疑いない。一度はホールの主催公演に招聘してみたいと、同様の複数の評議員から話が挙がっているのだが、如何やっても何処からも、伝手を辿れないのだと。

「リュミエールの父親と知り合いでね。俺が。」

2杯のエスプレッソを手に、カティスがソファへ戻ってきてカップを置き、オスカーの向かいに腰掛けてその一方を持ち上げ口にした。胡散臭そうな顔付きを隠しもしないオスカーが、もう一方のカップを引き寄せて手に取る。

画家であるその父親の版權を、かつてカティスが合衆国内の担当弁護士として何度か取り扱って以来、知人と言える程度には親しくなった。つまり、最近になって『幻のピアニスト』として名の知れ始めた存在が、何かの別件での話の流れだったとはいえ、自分の息子であるとカティスに伝える程度には。

そこまでの詳細は聞き及んでいないものの、『幻』とカティスとに繋がりと知っていた、やはり音楽を多少嗜むニューヨーク側の弁護士がそう評議員に伝えたところ、即座に評議員からカティスへ直接電話があつて、是非にと、何としてでもと、切々と滔々と熱望されたのだという。

「それで俺が担当弁護士になつて、リュミエールと遣り取りし、カーネギーホールの主催公演への出演契約を結んだのが何か月前だ。その時点ではまだ未定だったんだが、公演のライブレコーディングを出版する件についてレーベルと概要が纏まったのがつい最近でね。本番まで間がないもんだから、そっちの方の追加契約については、来米の際に契約事項を直接説明してサインを貰う方が早い、ってことになつた。」

エスプレッソを一口飲んだオスカーは顰め面のままカップを持つてソファから立ち上がり、部屋の隅の小さな冷蔵庫フリジへ向かう。そこに牛乳が常備されているのは知っていた。断りもせず冷蔵庫から牛乳を出し、カップへ注ぐ。

「カーネギーに聴きに行くつて言つてたのはそれか。それで、なんで俺が代理で行く必要があるつていうんだ？」

音高く冷蔵庫を閉め、そのまま壁際に寄り掛かつて微温ぬるいカフェラテもどきに口を付ける。問題はそこだった。上がつてきたデューデリジェンスのチェック、クライアントとの打ち合わせ、何十頁にも亘る契約書のドラフトの作成。いくらでもやらなければならないことは山積しているし、監督者であるカティスがそれを知らないわけでもないだろうに、何故。

「俺が自分で前乗りするつもりだったんだが、別件で急遽呼び出しを食らってな。瀕死のミミズみたいにのたくってた和解案の調整が急に進展したらしい。法廷<sup>コर्ट</sup>には逆らえない、ってやつさ。」

州内で活動する以上、州裁判所の裁判官とはそれぞれ別個の案件で二度三度と顔を合わせることも稀ではない。州裁判所は連邦裁判所よりも裁判官個人の意向が強く反映されるのは周知の事実で、心証はできるだけ悪くしたくなかった。

「演奏会前日の夕方からしかニューヨーク入りできなくなった。契約には遅すぎるし、その日は当人はリハーサルだ。だからお前を前乗り<sup>フロンローダー</sup>に指名した。」

「だから、の前後が全く繋がっていない。」

飲み終わったカップを冷蔵庫の上に置き、オスカーはゆっくりとした足取りでソファのカティスへと近寄った。薄く笑んだまま続きを待つ様子のカティスに言葉を重ねる。

「普段から伝えているだろう、どうせ扱うなら大きい案件がいいと。そうでありさえすれば、寝る間もないほどドキュメントやらクライアアントやらに埋もれるのだって一切構わない。が、こんな程度のも些細な件を振られるのは不本意だ。」

「そうだな。知ってるよ。…だから、って言うてんだろ。」

不意にカティスが気配を強くして、悪戯鬼のように楽しげに片頬を吊り上げて笑い、オスカーは内心でひやりとした。こういう時、カティスは流石に百戦錬磨の剛腕の片鱗を覗かせる。

「もともとこの案件を将来的に譲るなら、引き継ぎ先はお前に、と思っていた。本来ならもっと後にと考えていたがな。」

「だから何でだ、と聞いている。」

「まだ未知数だったことは否定しない。が、」

カティスはその一度口を閉じ、オスカーから視線を外し、表情を改めて、数瞬、言葉を探した。

「あいつが弾けば、世界が動く。そういう存在になる可能性がある。だからこれは、お前の案件だ。」  
「はん」

大袈裟なと両断するには、カティスの表情にも語調にも否定し難い何かがあったが、オスカーはとりあえず鼻で笑っておいた。

どちらにせよ、アソシエイトにはパートナーの業務指示に対する真つ当な拒否権など存在しない。自分自身で確かめればいい話だ。オスカーはそう了承した。たかだか一音楽家オスカーが自分の判断を動かす、そんな可能性など微塵もないように思えはしたが。

つまりロサンゼルスで朝5時から動き始めたとしても、マンハッタンへの到着は今この時間の15時過ぎで、早々に相手方のところへ向かわないと夜に掛かるおそれがあった。だからといって夜間から移動を開始すると、到着はニューヨーク時間の早朝で、契約それ自体は短時間で手続きが済む見込みだったためにその案も却下した。要するにさつさと契約を済ませてしまい、こんな茶番じみた案件からは自由の身になって本来の業務を捌いていくのだとオスカーは決めていた。

L & Cのニューヨーク事務所に顔を出し、インターンの頃から既に顔馴染みの所長に軽く挨拶をして、共用スペースの一部を間借りし荷物を置かせてもらう。手配されてあるスタジオの住所を改めて確認するとロックフェラーセンターの程近くで、ウェスト34thストリート沿いのこの事務所からは少し距離があったが、目まぐるしく移り変わるニューヨークの変化を自分の目で確認しようと、スタジオまでは歩いていくことにした。

「オスカー！」

歩き始めてすぐ、昼の営業時間を過ぎて撤収作業をしていたフードトラックから、ヒスパニック系の女性がオスカーへ向かって飛び出してきた。サマーアソシエイトで毎日事務所に通っていた頃、よ



く利用していて知り合いになった店員だ。

「こっちに戻ってきたの？　すぐ今の彼氏と別れてあなたと付き合うから、連絡入れる間ちよつとこで待つてて。」

「恐いほど可愛いお嬢ちゃんだな。残念ながら、まだロサンゼルスでね。今日は出張だ。」

片手で軽く首元を引き寄せて頬にキスをする。向こうからのペックキスは流石に顎を捉えて止め、額にもう一度キスをして手をひらめかせ立ち去った。背後から女<sup>レディキラ</sup>たらしを囁し立てる複数の男女の声が投げ掛けられる。

西海岸のロサンゼルスよりも遥かに高い湿度で、相変わらずマンハッタンの高層ビルの間は蒸し暑かったが、それでも歩いている途中の幾度か、時折秋の気配が微かに感じられた。

目的地に着く直前の通りすがりのディスプレイウィンドウで姿容を確認してから、ゴシックリヴァイヴアル風の白いアーチと木製の扉のエントランスを潜<sup>くぐ</sup>った。内部の造りは外観で想像したよりもモダンで、カーペット敷きの廊下と滑らかに作動するエレベーターを通り抜け、低層階の廊下の先、重厚そうな木製ドアのルームプレートを確認する。

扉越しに漏れ聞こえるピアノの音は微かだが、メロディとハーモニーから言つて f f f ほどの音量ではあると思え、よほど防音性がいいのだと理解して、強めに3回ドアをノックした。ピアノの音はすぐに止み、「どうぞ入って」に類する言葉が来るかと待ち構えていたオスカーの予想に反し、人の気配が近付いてくる。

閉ざされていた扉は、その重厚さに相応しくゆっくりと廊下側へ開かれ、扉の向こうに溢れる光とその人物とをオスカーの目に映した。

「……」

不覚にも発することのできなかった第一声の間を、しかしすぐさま無かったこととするかのように

オスカーが挨拶する。

「…初めまして。カティスから話は聞いているな？ 弁護士のオスカー・ロックウェルだ。オスカーと呼んでくれ。握手に抵抗は？」

「問題ありません、大丈夫です。初めまして。リュミエールと申します。どうぞよろしくお願いいたします、ミスタ、………オスカー。」

分厚いドアを押さえる手をオスカーがリュミエールに代わり、互いに儀礼的な笑顔を浮かべながら握手を交わした。身を返しながら「どうぞ」と入室を促すリュミエールに続き、オスカーも室内へ足を踏み入れる。普段なら『ムッシュ』としか言い慣れていない、言われ慣れていないのだろうか、とオスカーは思った。

入ったスタジオは角部屋で壁の2面は広くガラス張りになっており、外壁の柱の間からマンハッタンのビル群がよく見晴らせ、その2面の壁際に沿って作り付けのカラフルなソファが長く伸びている。ちよつとした内輪の演奏会の用途としても想定されているのだろう。ソファに寄せて小さなガラストップの丸テーブルが数脚と、対角線側の廊下寄りの部屋の隅には幾つかの譜面台、それから撮影などの際に使いそうなスタンドライトが数基。室内の目立つ備品はその程度で、天井はやや高く、部屋全体としてシンプルな造作をしていた。そして、部屋の中央に天板を開いたグランドピアノ。クラシック音楽に触れる機会があまりない人間でも、普通のグランドピアノよりさらに一回り大きいのがわかるだろうか。

「なるほど、そういえば。『インペリアル』か。」

断りを入れてソファの上に荷物を置きつつ、オスカーがピアノに視線を遣って確認する。

「よくご存知ですね」

リュミエールが少しだけ表情を緩めて微笑んだ。クラシックの素養が全くない相手ではないことに、

多少ながら気が楽になったらしかった。

「その黒い白鍵を見れば、まあな。」

一部の例外を除き、ピアノニストは自分の楽器を持ち運ばず現地で用意されるものを弾くのが普通で、練習場所のこのピアノも本番のホールで用意される同一モデルのそれも、主催者側が手配したものはずだった。ベーゼンドルファーのモデル290、"インペリアル"。一般的な通常のピアノの88鍵に加え、低音側に9鍵が追加されている97鍵のモデルで、追加された分の白鍵はミスタッチを防ぐために黒く塗装されているのが特徴だった。

単なる物好きの道楽ではなく、今度の演奏会でその音域を必要とする曲がある。

「バルトークのピアノ協奏曲の、」

「第2番です。…契約廻りを細かく見てくださっているんですね。ありがとうございます。」

律儀にリュミエールが礼を告げた。

オスカーの見たところ、リュミエールの側は英語でのコミュニケーションに支障はなさそうで、雑多な出自の入り混じる合衆国内においてはよほど綺麗な発音のイギリス英語クイーンズイングリッシュであり、そうと知らされなければパリ在住のフランス人であるとは気付かれないに違いなかった。

「じゃあ、さっそく出版の契約の説明と手続きをしようか。…あっちでいいか？」

「はい。」

室内を軽く見渡し、これといった机のようなものがないために、窓際の中程、小さな丸テーブル近くのソファへ並んで掛ける旨を指し示す。オスカーが端のソファでブリーフケースを開いて準備をしている間、リュミエールは先に移動して綺麗な姿勢でソファへ腰掛けた。ブリーフケースから取り出したタブレットを手に、オスカーがそちらへ歩み寄る。

長らく紙束の山から逃れられず、契約といえど分厚い書類を何箱分も箱詰めにして泥臭く引き摺り

回さざるを得なかった法曹界だが、最近ようやく新規の契約については電子的な書類と署名とで済ませられることが多くなってきた。

タブレットを丸テーブルの上に置き、そこに表示した書類の1ページ目を二人並んで覗き込む。「予めそちらに送っておいた追加の契約書だ。もう読んだか？…そうか。なら、それぞれの項目については既に承知していると思うが、特に重要な箇所については念のため俺の方からもう一度説明させてくれ。不明点があればいつでも俺の発言を止めてくれていい。」

そうして説明に入る。今回のようなエンターテイメント領域の契約はオスカーもカティスと同じく専門外で、普段見慣れない条項が多々あるものの、同様の同意手続きは何度もしたことがあるもので、タブレットのページを少しずつスライドさせながら途切れることなく重要項目についての説明を続ける。

(だが、)

オスカーの説明に耳を傾けるリュミエールを横目で伺い、オスカーからやや見下ろす位置の、視線をタブレットに落としたままの静かなその横顔を、オスカーは密かにタブレットから目を離し、瞬ぎもせずに見詰めた。

(それにしても、これは……)

扉を開けて一目、思わず言葉を失った、その清廉な美貌。

男性だとは判るが線は細くどこまでも中性的で、緩やかな弧を描く整った眉と長い睫毛、通った鼻筋、端正な唇と細い顎がその印象をより深くする。何よりも、幾重の睫毛の翳の下、深海色の瞳から投げ掛けられる眼差しがただただ綺麗だと、何度見返してもそう感じざるを得ない。

ボトムスこそごく普通の、やや幅広なダークグレーージュのストラックスであるものの、白いシャツは首元にギャザーの寄ったストレートなハイネックとロングカフスとで、どこか貴族じみたそのスタイ

ルは、だが恐ろしく似合っている。

肩から流れ落ち、視界を遮ったらしい艶やかな長い髪を片手で掬い耳に掛ける、優雅で品のある仕草はそれ自体が芸術のようですらあった。

(……………)

オスカーの指の動きに従って、文書の最後尾でタブレットがスクロールを止めた。密かに視線を戻す。

「……説明は以上だが、何か不明点は？」

「特にありません。ありがとうございます。」

「そうか。じゃあ、」

契約書の末尾、二者分のサインを記入する箇所があり、一方には既にレーベル側の代表者のサインが記入済みとなっている。タブレットのサイドエッジに吸着していたペンをオスカーが手に取り、そちらへと自然な動きで伸びてくるしなやかな指先を横目でちらりと一瞥すると、オスカーはふいとペンを持った手首を翻し、近づく指先からペンを遠ざけた。

視線をオスカーの方へ動かし、目を見合わせたリュミエールの深海色の瞳が軽く見開かれ、はたりと一度瞬いた。そのまま僅かに首を傾げ、その動きに伴って長い髪が流れる。

「噂は聞いたぞ。『幻のピアニスト』だってな？」

「……私が自分で自称しているわけではありませんが……」

オスカーは自分の見せ方というものを自分でよく承知している。人に嫌悪感を抱かせない、人好きのする、ように見える薄い笑みを浮かべながらそう言えば、リュミエールはペンへと寄せかけた手をゆっくり下ろしつつ、一応は淡い苦笑を作ってみせ、それでも『一体何を』と訝る気配を薄らと漂わせた。

「本当にお前が、その『幻のピアニスト』とやらなのか？」

「……………」

リュミエールは一度ごく軽く眉根を寄せてから、ふと表情を改め、水のような穏やかでありながらどこか清冽な気配を緩やかに纏わせて、僅かに見上げる方向のオスカーへ、目を逸らさず正面から見返す。

（お。）

と、オスカーが内心、小さく感嘆した。

思った以上に強い意識を内に湛え、その瞳の奥で揺蕩う深い色彩から、目が逸らせない。

こと対人関係では一度も下位に屈したことのないオスカーには、それが屈辱のようでもあり、そして初めて覚える歓喜のようでもあった。

「物分かりのいいことで。これが初めてというわけじゃないらしいな。とっておきのアメリカンジョークだったが、笑ってはもらえなさそうだ。」

「ご謙遜なさらず。胸中で密かに貴方と同じように思ったであろう方々は珍しくありませんでしたが、これほどはつきり物怖じもせず直截に私に仰ったのは、貴方が初めてですから。残念ながら、笑ってはさしあげられませんが。」

いっそ凄絶と言えるほどの綺麗な微笑みを浮かべながら、少しも躊躇わずにリュミエールが応える。『面白くはないので。』という、あえて省略したはずの言葉すらもが、幻聴のように後を追って聴こえてきそうだった。

「恐縮だ。何分にも俺自身が契約に係わる以上、うっかりと何の保証もないまま黙って通してしまうのは、俺の信条にそぐわなくてな。流石に『幻』なだけあって、<sup>すがたがたち</sup>姿形で確認できるわけでもなし。何よりも、」

そう言つてオスカーは、手に取ったペンを丸テーブルの上に置き、空いた<sup>てのひら</sup>掌を軽く広げ、目を逸らせないままの端麗な佳人のその頬に、微かに触れた。

目尻に掛かる髪を指先で掻き上げ、顫顫<sup>こめかみ</sup>を通つて梳き、後頭部へと流す。

「これほどの凄まじい美人だとは、思つていなかったからな。」

頸になつた表情へ、返す手をそのまま、人差し指だけをリュミエールの細い顎下にそつと添えた。

微笑をゆつくり消したリュミエールが、すう、と、僅かに目を細める。

「……顔で判断されたくない、などと、子供のようない儘を言うつもりはありませんが。面と向かつて容姿のことを言われるのは、正直言つてあまり好きではありません。貴方のような方が面白がるというのなら、尚のこと。」

「驚いたんだよ。純粹に。褒めているつもりだ、これでも。『幻のピアニスト』殿。」

「……………」

そんな氣は微塵もなかったのに、思わず手を伸ばし、触れてしまった程度には。

黙つて視線を合わせたままだった二人の、ふとオスカーの指先が離れたのと、リュミエールが視線を逸らして目を伏せふると緩く首を振つたのとは、ほぼ同時だった。

「……でしたら、貴方の衷心<sup>ちゆうしん</sup>からの信任を頂戴できるよう、一曲捧げればよろしいですか？」

ソファから徐<sup>おもむろ</sup>に立ち上がり、オスカーに背を向けてピアノへと向かいながら、ふと振り返つて問う仄かな微笑みに、

「是非ともに。」

オスカーは心底樂しげな笑いを返した。立ち上がつてやはりピアノの方へと歩み寄る。

開けたままにしていたピアノの蓋の縁に指を滑らせ、ベンチ型の椅子に腰掛けたリュミエールが、手慣れた様子で鍵盤の上に片手を添えながら軽く座り直してピアノとの位置感を微調整した。静かに

ハンカチを手を取ってするりと両掌を一撫ですると、再びピアノの高音部のフレームの上へと手を伸ばして置く。

「リクエストなどありましたら、何なりと。」

「そうだな、童謡とかか？」

ピアノの高音部の側へ回り込んだオスカーが、行儀悪く側板の縁に軽く肘を付きながら、僅かに上体を倒してリュミエールの表情を伺いつつ答えた。

「……………」

伏せたままだった視線を上げてオスカーを見返したリュミエールの、その顔色に一切の動揺がないのを、オスカーはもはや流石だ、と思うようになっていた。『そのまま天板に挟まれる』など万一にもリュミエールが考えているのなら、なお楽しいのだが。

戯れのようにそう思っていたら、ふとリュミエールがその表情を鮮やかな微笑みに切り替えた。

「では、きつと貴方方には子守唄に等しく魂に刻み込まれているであらう、この曲を。」

しなやかな両手を緩やかに宙へ浮かせながら、深海色の眼差しをオスカーへ直と合わせたリュミエールの、その瞳の深淵から心の奥底を覗き込まれた気がした。

「貴方のために。」

直後、軽快でありながら百の管楽にも等しい重厚な音の奔流の中へ叩き込まれ、オスカーの背筋が一気に鳥肌立った。

合衆国にいれば当たり前のように幾度も繰り返し耳に慣れ親しんだはずの2分の2拍子の旋律が、未だ嘗て覚えのない圧倒的な存在感を伴ってオスカーの脳髓を捉え通り過ぎてゆく、それを生み出しているのが目の前のいかにも細く流麗な指で、優美に翻る手首で、少しも力みのないすらりとした腕なのだと、理解が後から追いついてくる。



『星条旗よ永遠なれ』。

それも多分、ホロヴィッツ編曲版の。

あらゆる吹奏楽器、あらゆる打楽器が一斉に、幾重にも鳴り響かせる輝かしい煌きを、一台のピアノ、一人のピアニストに凝縮するため、稀代の天才が飽くなきまでにその腕を奮った。ピアニストの腕は2本しかないというのに、録音から復元された楽譜は多くの部分が三段譜で成っており、低音域の多重奏、高音域の対旋律、そして中音域の主旋律を奏するため、右手も左手も絶え間なく幾オクターブ以上を飛び越えて行き来し続ける。

(いや、)

超絶技巧曲とは知っている。そして職業ピアニストであれば、弾きこなすピアニストは稀ではないということも。だが比較的緩やかな中間部の旋律の、時に囁くような一音一音すらもが、その輪郭を彩り、これほどまで際立って部屋中に遍く響き渡るのを、かつて聴いたことがあつただろうか。

白昼夢でも見ているのだろうか、と思ひかけて、鍵盤の上で舞い続ける手からふと視線を上げ、

「……………」

瞬間、オスカーはぞつと悪寒すらを覚えた。

リュミエールが、ずっとこちらを見続けている。その深海色の瞳で。

鍵盤と鍵盤の間の遙かな距離を、息も吐かせず飛び続ける己の手元など、一瞥もせず。ただひたすら、オスカーへと。

視線が合い、そうしてリュミエールは、心の底から嬉しそうにふわりと凄烈な笑みを浮かべ、それから一瞬のちらりと悪戯げな瞳を覗かせると、終盤の華麗極まる高音域のオブリガートの、その一楽節を左手で弾き鳴らした。

何重もの和音が終曲を燦然と輝かせ、そして鍵盤は緩やかに動きを止め、残響は刹那で、そして永

遠であつた。

リュミエールの目線は、深い青の揺らめきを湛え、真つ直ぐとオスカーから離れないまま。

「……余所見はいいのか？ 『幻』殿。」

オスカーの抑揚のない言葉に、リュミエールはふ、と柔らかに笑つて、ようやくゆるりと目線を下げた。落ち掛かる長い髪を、緩やかな動きで耳へと掛ける。

「余所見、など。逆でしょう。」

伏せた目で瞬きをする、漸うと傾き始めた陽に睫毛が瞳へ翳を落とした。

「念のため申し上げておきますが、私はこれでも、曲の全ての一音たりともを疎かにしたつもりはありません。…私の演奏が、音を損なつたように聴こえましたか？」

「…いや。」

リュミエールは椅子から立ち上がりながら、再びオスカーへと真つ直ぐに視線を向けた。

その静かな表情は、オスカーの目の前のように、手の届かない遥かな遠くのように。

「鍵盤など、見ずとも弾けます。それよりも。

何のために弾くのか。

それは偏に、その一音一音を受け取るべき方へと、過たずに届けること。それこそが。」

そこまで言う、リュミエールはオスカーと視線を合わせたまま、ゆつくりと微笑つた。慈雨のよう。

「私の音は、貴方へと届きましたか？ オスカー。」

そうしてオスカーは、強い眩暈を自覚した。

「……ああ。」

息をも吐かせぬ数瞬の間があり、オスカーは短く小さく息を吸うと、ゆつくり深く吐き出した。

それから疎<sup>まは</sup>らだが力強い拍手を、短く贈る。

「素晴らしかった。」

そこまでを聞き届けると、リュミエールはふいと視線を逸らし、

「……では、契約の続きをお願いいたします。」

それだけを言つて、ソファの方へと歩き始めた。『興味がなくなった』と言わんばかりのあからさまな態度を、隠しめせずに。

(まあ、)

仕方ないか、とオスカーは思った。いくら弁護士といえども結局はただの仲介人に過ぎない己の、立場を承知していながらあえて失礼極まる態度を最初に取つたのはこちらだ。

共にソファへと歩み寄り、丸テーブルの前へ再び並んで座ると、オスカーは黙つてリュミエールへペンを差し出し、同じく黙つてペンを受け取つたリュミエールが、無言のまま、凪いだ水面のような穏やかな筆致のサインをタブレットへ記入した。

「そういえば」

これで最後になるかもしれず、当初から疑問に思つていたことをオスカーは口に出した。リュミエールは顔を上げ、静かな表情で緩く首を傾け、一応はといった様子で言葉の続きを待つ。

「今日から数えて、リハーサルが明々<sup>あさ</sup>後日<sup>あさ</sup>、本番がその翌日だろう？ 普通ソリストは本番前日のリハーサルから現地入りするはずだが、どうしてこんなに早く来米したんだ？」

「ニューヨーク<sup>ニューヨーク</sup>の方で、是非にと前々から要望を頂いていた児童福祉施設がありましたから。渡米はあまり機会がありませんし、この際にと調整した結果です。明日はそちらでボランティアで演奏します。」

開いた口が塞がらなかった。文字通り。

「聞いてない。」

「言ってませんか。」

リュミエールが不思議そうにオスカーの様子を訝<sup>いぶか</sup>り、傾けた首の角度を少しだけ深くする。

(いや、)

なぜそんな、不思議そうな顔をしているのかと。全くもって不可解なのはむしろこちらの方だ、オスカーはそう思った。

その存在を自らは明らかにしようとせず、世界最高峰のコンサートホールの主催公演にすら八方手を尽くして迎えられるおきながら、それと一介に過ぎないであろう福祉施設でのボランティアとを同列に据える。これが不可解でなくして何だというのか。

その超絶技巧の演奏で、理解したと感じたはずの相手は、あつという間にまた幻のように、この手をすり抜けようと、

「オスカー？」

その稀有な、深海色の瞳が数度、瞬き、柔らかな声音がオスカーへと向けられる。目を見合わせ、改めて、その存在へ。オスカーは深く、意識を向けた。

これで終わりとするには、あまりにも――。

「……じゃあ、明後日は一日、予定がないのか。」

不意に視線を宙へ向けて、オスカーが呟く。

「？　そうですね、日程の都合で一日フリーです。とはいえ、ここのスタジオを引き続きお借りしていますし、予定がないと言ってもとりあえず練習するだけですけれども。」

「練習とはいえ、プログラム以外の曲も弾くんだらう。」

「それはそうですね。練習曲<sup>エチュード</sup>や、たまには気晴らしに、別の曲も。」

すい、と、オスカーがリュミエールへ視線を戻した。

「気晴らしに。できれば一曲、この機会に相手願えないかな。」  
はたりと一度瞬いたリュミエールが、軽く目を見開く。

「何か楽器を？」

「ヴァイオリンを、きちんと学んだのは3歳から高校卒業まで。演奏家の道は選ばなかったが、そこそこ研鑽はしたつもりだ。」

「そうですか。」

心なしか、リュミエールの声が少し和らいだようだった。

「わかりました。何かご希望の曲などがありますか？」

「そうだな……」

今度ばかりは真面目に考える、ような素振りを見せた。

とはいえ、さして悩まずに心に決める。

フランクのピアノとヴァイオリンのためのソナタ イ長調。第2楽章で。  
「Franck, Sonata Pour Piano et Violon en La majeur. Le Seconde Mouvement.」

「……」

オスカーのフランス語による曲名を聞いたリュミエールが、表情を変えないまま、ゆるりと水のような柔らかな気配を纏わせた気がした。

「できるか？」

そう言つてリュミエールを見遣るオスカーに、リュミエールは緩やかな苦笑を返す。

『最もフランス的』と称される奏鳴曲<sup>ソナタ</sup>を、フランス系ピアニストが弾けないなんて言ったら叱られます。もちろん大丈夫です。」

「楽譜は」

「なくてよいです。暗譜しています。」

「そうか。じゃあ」

「はい」

タブレットの手に取ってソファから立ち上がり、オスカーは帰り支度を始めた。さほど時間も掛からず荷物を纏め終え、扉へと向かい始めれば、またもや律儀にリュミエールが見送りのためにと付いてくる気配がする。

相変わらずの分厚く重い扉を開き、背で扉を押さえながら振り返れば、すぐ近くにリュミエールの立ち姿がある。

何かを言おうとし、オスカーは部屋を開けての第一声の時と同じように言葉に詰まった、その間隙を縫うようにして。

「……楽しみにしています。」

どこか戸惑ったように、それでも何かに導かれたように、そう言葉を紡ぐリュミエールへ、  
「……俺もだ。またな。」

応えて、扉を閉じた。

部屋を後に廊下を歩き始めて、ふとオスカーは片手で前髪を掻き上げ、長い溜息を吐く。  
もう少し格好付けた言葉を何故咄嗟に返せなかったのかと、盛大に後悔しながら。

そういえば時間の約束をしていなかったと後から気付いて、けれどおそらく契約の日の時と同じ、昼過ぎの深め頃の時間帯かとリュミエールは当たりを付けた。何らの根拠もないはずだったが、誤ってはいないだろうという不思議な確証があった。何故だか。

残響が完全に消えてから、リュミエールは両手を鍵盤から離して解放し、軽く息を吐いて、意識を曲の奥深くから現実の室内に戻した。あの日から中一日しか経っていないのに、窓の外に映る高い青空とビルの谷間の空気の景色はより一層秋の気配を深めたように見えて、傾き始めた日も心なしか幾分早く翳りを帯び始めているように思える。

疲れは感じない。昨日の施設での演奏も、幾つもリクエストを受けながら弾いてみれば子供たちにも職員にもとても喜んでもらえたようで。もっとももっとねだられては弾いたり、教えたり、連弾のようなことをしてみたり。移動と休息に支障のない程度の時間に気遣われて歓送されたリュミエールは、夜になる前にマンハッタンのホテルへ戻り、充分に寝込んでから、今日は再度このスタジオですと朝から独りで弾き続けていた。少し前までは何かと忙しく、満足にピアノに触ることもままならない日も珍しくなかったから、こうやって休憩も必要と感じずに思う存分ピアノと対話し続けられる現在の環境は極めて贅沢だと思える。

意識を解いて視線を宙へと泳がせたリュミエールの、空いた手はこの後で重奏する予定になっ

る樂章の *molto dolce* 部分を自然と弾き始め、緩やかな分散和音の3連符が調を揺れ動きながら上昇と下降を繰り返した。そこに重なり、異なる楽器で演奏されるべき音符は全て理解していたが、今日これからそれを奏でるはずの人の、その音色を未だ知らない。

不思議な人だな、と思う。

父の仲介で過去一度だけ直接に顔を合わせていたカティスも、飛び抜けて人好きがして頼り甲斐のある体の好人物だったが、そのカティスのアソシエイトだという、今回初めて係わることになったあの人は、ロサンゼルスといつてもいつそハリウッドから来たと言われた方がよほどリュミエールには納得できる気がした。端正で男らしい顔立ちもだが、それよりもむしろ、その圧倒的な存在感が。

燃え立つような緋色の髪、目を逸らし難い氷青色の瞳、よく通る低い声と快い抑揚のある話し方。

そしてあの、決して嫌味ではなくそれがごく自然なことであるかのように自信に溢れた態度。それらが一体となつて、余すところなくその存在感を他者へと植え付ける。自分などよりよほど表現者に向いているのではないかとさえ思った。本人は当然そんなことなど望んではいないのだろうけれど。

一昨日の件についても、言い方や遣り方はともかくとして、契約に責任を持つ弁護士として通すべきところを通そうとしただけに過ぎない。それが理解できたからこそリュミエールも応じ、きちんと認めてもらえるだけの返戻はしたはずだったし、実際に実演後はそれなりの納得が寄越された感触も間違いなくあった。

彼もカティスと同じく、本来の専門は企業を相手とした事業買収・売却、特許その他の知的財産権の取扱い、訴訟案件や仲裁案件といった企業法務だというし、当初の彼から垣間見えた態度を鑑みても、今回のようなたかだか1アーティストの、些細でかつ専門外の案件など、ただひたすら単純にこちらへ前乗りできなくなったカティスの単なる代理として渋々来ただけなのであることは容易に想像が付いた。本番当日の演奏会を聴きに来るどころか、契約が済み次第ロサンゼルスにとんぼ返りす



らしても何ら可笑しくはないだろうと思った。それが。

『Sonata Pour Piano et Violon en La majeur.』

意識を普段とは切り替えて英語へと向けている時に、急にフランス語の発音を聴くとどきりとする。別れ際、扉を開けてから振り返った、どこか一瞬戸惑ったようなその様子は、自分だけでなく相手でも。そんな表情をすることがあるような人だとはとても思えないのに。不意を突かれ、思わず口にしていた。『楽しみにしています。』と。

そうして扉が閉まる直前、最後に彼が見せた笑顔は、初めに挑まれた時のように再び自信に溢れながらも、気の所為か、ほんの少しだけ柔らかく。あれは、いわばこちらを認めてくれたが故の信頼のようなもの、なのだろうか。

であれば、この身に降りたその信頼を、僅かたりとも損なうわけにはいかない。

徒然の手遊びを止め、軽く座り直して改めてピアノにしっかりと向き合い直ると、今日幾度目かの楽章を再び頭から浚い始めた。

来訪の時間は概ね予想通りで、曲を一通り最後まで通した後、さほど間を措かず<sup>おさ</sup>に木製のドアをノックする音が室内へと響く。リュミエールが椅子から立ち上がってそちらへ向かい始めたのと同時に、扉が静かに開かれて廊下側のその姿が薄く室内を伺った。

「いいか？」

リュミエールは一瞬足を止め、少しだけ微笑って、再びそちらへと歩み寄りながら

「どうぞ。」

と返事をした。重い扉は長身の腕によって苦もなく大きく開かれ、使い込まれたヴァイオリンケースを手にオスカーが室内へと入ってくる。

ノックの後の在室者の返事を待たずしての開扉は、礼を失するつもりでしたわけではなく、重量のある扉を本番近くのピアノリストの手が開かなくていいようにと氣遣われたのではないかと。リュミエールは何となくだがそう察した。思えば一昨日の、入室時や退室の時の振舞いからして、既に。

オスカーの出で立ちは一昨日のスーツと違って、白いカットソーに軽く袖を折ったジャケットとスラックス。ブリーフケースも今日は持つておらず、ヴァイオリンケースの他にはごく薄いサブバッグを肩に掛けていただけだった。

「ロサンゼルスから？」

外壁側の窓際へと向かうオスカーと並んで歩きながら、その手にあるヴァイオリンケースにさらりと目を遣ったリュミエールが、隣のオスカーの顔に目線を上げつつ訊ねた。慣れた様子で大きな手にしっくりとその持ち手を握った、多くの小疵が多少の色褪せとともにすっかり馴染み切ったケースは、どう見てもこちらでの急遽の借り物という雰囲気ではなかった。

「もしやと思つて、あちらを發つ時から念のため持つてきておいた。まさか本当に使うことになるのは、全くもつて露ほども思つていなかったが。何が起こるかわからないな。」

オスカーは愉快そうにリュミエールへ笑い返ししながら、壁沿いのソファの背のさらに外壁側、出窓の張出し構造部にヴァイオリンケースを置いた。サブバッグはソファへ、続けてジャケットも脱ぎ、簡単に畳んで同じくソファへ。ただ単に開くのにも意外とそれなりの空間を必要とするため、弦楽器のケースを置く場所に困るのは割とよくあることだった。それから一度ドアの方に向かって戻り、部屋の隅に置かれていた譜面台を一台手に取つてくると、ピアノの右手側の高音域に程近い位置へとセツトする。

「暗譜は当時もしていたが、流石に譜面の詳細は忘れてしまつていたから、楽譜だけは昨日こつちで買い直したかな。」

そう言うのと、窓際に戻ってヴァイオリンケースを開いたオスカーは、楽器を取り出して肩当てのセッティングを始めた。経験的に最も楽器の響きを妨げない位置へと丁寧に調整する。そのまま顎下に挟み楽器を構えて感触を確かめると、弓を取り出して張り具合を調整しながら、サブバッグに入っていた楽譜を抜き出して手に持ち、ピアノの脇の譜面台へと歩いていった。リュミエールも後を追うようにしてピアノへ向かい、椅子に掛け、目線をオスカーへと遣る。オスカーは譜面台に楽譜を置きはしたものの、そのまま表紙を繰る様子はなく、既に見直しは終えてあるのだろうとリュミエールは思った。

短いパッセージを一奏して弓の調子を確認し、すいとオスカーがリュミエールを見て、意味を理解できたリュミエールが中央A<sup>ラ</sup>の鍵盤を弾く。ピアノの音に重なってヴァイオリンのA線のチューニングの音が静かに鳴り始め、オスカーが僅かにペグを回すと、ぴたりとピアノとヴァイオリンの開放弦の音とが合い、共鳴時に特有の豊かな音が室内に鳴り響いた。一息入れて、オスカーが四弦のチューニングを始める。

隣り合う弦同士が完全五度で調弦されていく弦楽器ならではの響きを、リュミエールはオスカーに目を遣ったまま黙って聴いていた。チューニング程度の音量でも、かなり本格的に習っていたのだらうとわかる弓遣いの、ヴァイオリンの躯体を隅々まで鳴らし切る響きには艶を帯びた張りがあり、とても綺麗だと思った。途中でもう一度オスカーから視線を超越され、リュミエールはD-F-Aの和音で返す。

「一応G3も貰っておいていいか。」

足元を見て軽く立ち位置を直していたオスカーが、顔を上げ、楽器を構えながらリュミエールの方を向いて言った。ヴァイオリンは五度調弦を基本とするピタゴラス音律、ピアノはオクターブを基本とし全移調に対応するための平均律で調律されており、基準のAから離れた音は互いに音程のずれが

広がっていく傾向にある。そのずれを軽減するためのオスカーの発言であり、ヴァイオリンだけで調弦したG線の高さをピアノに合わせて微修正する、という。

「そこまで丁寧に合わせていただかなくても。ある程度はこちらで対応しますから。」

当初の印象ではもっと我道<sup>わがみち</sup>を通す演奏をする人かと思っていたのに、意外にも随分と精緻<sup>せいじ</sup>なことだと、リュミエールは僅かに苦笑して、一応はと求められた音を弾いて返しながら返事をした。濁りやすい重なりの音はピアノ側で音量を抜くなど、遣り様<sup>よう</sup>はいくらでもある。それよりも。

「それよりも、貴方本来の響きが聴きたいです。」

オスカーを真っ直ぐ見返ししながらリュミエールが告げると、ピアノから寄越された音に合わせてG線を弾きながら調整していたオスカーがぴくりと動きを止め、その態勢のまま、氷青色の視線だけをリュミエールの方へ流し遣り、

「…そうか。」

と短く応えた。

それからほんの少しだけ、オスカーは確認で音を重ねると、ネックを持って一度ヴァイオリンから顎を離し、軽く首を振ってから、再び楽器を肩と顎とで支え直す。

ヴァイオリンの演奏は14小節目からで、それまではピアノの独奏があるのみだった。弓を心持ち下げて構えたオスカーが、笑みの消えた目線をリュミエールへと遣る。仄かに天を向く弓先は剣の切っ先のように、その姿は女王を護る騎士をどこか彷彿とさせて。

リュミエールはピアノへ向き、一度目を閉じ、軽く息を吸うと、開いた目を伏せて静かに演奏を始めた。細かな螺旋を繰り返し描く短調の和音の重なりの中から、波濤のように主題の情熱的なメロディが湧き上がってくる。後を追って、ヴァイオリンが同じ主題を低く鋭く奏でるのだと知っていた。

「……………」

知っていた、なのにオスカーが僅かな息継ぎの後で奏で始めたそれを聴いた瞬間、リュミエールの首筋が炎を吹き込まれたように熱くなる。

その音の立ち上がりは、リュミエールが想像していたよりもほんの一瞬だけ早い。差し出した手を予想より一瞬だけ早く受け取り、その一瞬で引き返しようないほどの遠く果てまで、この身を攫い去るかのように。

目線をオスカーへと遣れば、同時にオスカーがリュミエールを見返した。ヴァイオリンの弦の伸びやかでありながら次々と移ろいゆくAllegroのパスセージは、変わらずほんの一瞬の早い出だしで相手を誘いながら、だが決してテンポを崩さずに、ピアノの響きから一音たりと逸れることなく。

ふとした瞬間の長調の甘い語らいのメロディは、すぐに新たな短調の情熱の中へと掻き消される。p pから始まる高音の囁きも、少しもぶれることなく正確に刻まれる3連4分音符も、とても美しくて。

かなりの研鑽を積んだのだろうとわかるオスカーの演奏技術だったが、とりわけてテンポが正確で、メロディに引き摺られるような無駄な間延びが一切ないのと、音程が極めて安定しており、ヴァイオリンらしい絢爛な音と時にピアノに寄り添う美しいハーモニーとを奏で分けるのが際立っていた。指導者に長年よほど厳しく指導されたのだろうと見て取れるのに、ほんの少しだけ想定を超えて踏み込んでくる重奏の音色は、言い様のない色艶を湛えて。

音の遣り取りによる語らいは、体の芯へ直接訴え掛け、とても本能的でわかりやすい。リュミエールはオスカーを見た。オスカーはリュミエールを視線で捉え、絶え間なく音色とその氷青色の視線と、意識してなのか無意識になのか、僅かな唇の動きとでリュミエールの音色を煽る。情熱的に、

“dolce”、“dolcissimo”。

リタルダントを挟んでピアノが3連符を紡ぎ始めれば、その細波の上をヴァイオリンが時に甘く、

時に誘い、時に憂うように寄り添う。ピアノの両手での重厚な和音の問い掛けには、緩やかにヴァイオリンから応えが返り、再び緊張感を孕んだ主題が顕れてきた後には、時にトリルで互いを追い。

ヴァイオリンの低い囁きはやがて秘めたトレモロの情熱を顕にしてゆき、応えるピアノは次第に高音へと共に駆り立てられ、長調へと転調して、歓喜と祝福の和音とともに曲は幕を閉じた。

余韻が部屋から消え、オスカーは下げ弓で弾き切つて構えたままだった弓を持つ腕を下ろした。

楽器越しの視線の向こう、同じく鍵盤から指を離し、膝上に両手を戻して、終曲からそのまま、こちらを見続けるリュミエールがいる。

「…感想を頂いてもいいかな、『幻のピアニスト』殿？」

オスカーが楽器から顎を離して左手に下ろし、笑つて戯れるようにそう言えば、対照的に表情を消した切りのリュミエールが、僅かに唇を開き、躊躇つて、そして再び唇を閉じると、ゆるりと柔らかい微笑みを見せた。

「とても魅力的でした。とても。」

「光栄だ。『幻』殿から頂くには過分な評価という気もするが。」

「とんでもありません。……初めてでした。こんな合奏<sup>アンサンブル</sup>は。」

賛辞の後、少しの躊躇いを挟んでからそう続けるリュミエールに、『こんな』とはどんな、とオスカーが問うより前、リュミエールが心の底から嬉しそうに微笑つてオスカーへと問い掛ける。

「わざわざ練習してきてくださったのですか？」

オスカーは苦笑した。流石にばれる。

「それなりに。」

実際は、それなりに、どころではなく、一昨日の申し出のその日の夜には楽譜を調達し、仕事上は

昨日今日分と最低限の義務デューティのみを超特急でこなすと、残りの時間全てを使い果たして昨日の朝から今日の昼まで1日半、ひたすら猛練習してきたのだった。昨日にはこちらで習っていた頃のクイーンズ区の師匠に、急遽連絡を取って指導をすら頼み。

『すっかり鈍なまくらになりやがって』などと散々罵られ、当時から相変わらずの鬼のような指導を再び受けつつも、なんだかんだと急な指導依頼に朝から晩まで付き合ってくれ。その日の夜には『やつぱりお前の才能は勿体なかった』と言われたから、師匠が許容する合格ラインには何とか達したのだろうと思う。

『何だ、また口説き落としたい相手が出てきたのか。』

『そういうのじゃありません。俺はいつだって真剣に真面目にやっています。』

『今度俺にも紹介しろよ。』

『勘弁してください。』

オスカーがこの曲を、仮にもプロピアニストと対等に重奏できるほど熟達していたのには訳がある。高校の最終学年、UCLAに進学することが決まり、この教室を離れることになるかわかっていた最後の発表会前の選曲の際、教室付きのピアノの伴奏者アカンパニストに、親しくなりたいフランス系アメリカ人の女性がいたのだった。意図は当たり、UCLAに行くまでの期間限定とわかっていたにも拘らず、随分といい目を見させてもらった。

急遽重奏する予定になったようだと伺われる相手の正体に興味津々の師匠には、相手が『幻のピアニスト』であると絶対に悟られる訳にはいかなかった。カーネギーホール公演一覧に『Lumière』の名が掲載された時から既に、音楽関係者でなくともニューヨーク市民の中では相当の話題になっていた。まず間違いないかわせる俺にもアンサンブルさせろと強引に押し切られるだろうことは目に見えていたし、そんな場で件くだんの楽曲に関するオスカーのエピソードを開陳されでもしたら目も当てられ

ない。リュミエールには絶対にこの話を聞かせる訳にはいかなかった。そう考えることの真つ当な理由など、何一つ存在しないはずではあったが。

「もし良かったら、他の曲も少しお願いできませんか？」

どこか浮き立つように軽やかに微笑み、オスカーには意外すぎる申し出をしてきたリュミエールは、おそらくそんなオスカーの内心を欠片ほども知りはいない。驚きと焦りと苦笑とが同時にオスカーの中で沸き起こる。

「難しいな。プロレベルと何とか渡り合える程度にまで取り組んだことがあるのはこれだけだ。」

「そこを何とか、是非。職業音楽家としての音色が欲しいわけではないですから。他の楽章などはどうですか。」

椅子から立ち上がって近付いてきたリュミエールが、オスカーのすぐ脇から譜面台の楽譜を覗き込んで繰り始め、その髪がオスカーの頬を僅かに掠めて、ぞくりとオスカーの背中が栗立った。オスカーの側も先程の演奏で散々身体の芯から煽られている。夢の中のように自分を捉えて離さない深海色の瞳に、甘く訴え掛けてくるピアノの囁きに、奔流のような情熱の音色に。反射的にその身体を抱き寄せて深々とキスしそうになる本能を脳内の理性で引き剥がす。違う、女性じゃない、といちいち我に返って確認しないと、あつさり理性を放棄しかねない衝動がある。

「そうだな。第4楽章なら、辛うじて。」

内心の動揺を捻じ伏せながら冷静を装って答えれば、リュミエールはオスカーを見上げて子供のように嬉しそうに笑い、ゆったりと身体を翻して、オスカーの肩口へその匂いを微かに残しつつ、ピアノの方へと戻っていった。

「こんな遅い時間まで引き留めてしまつて。すみませんでした。」



「こちらこそ。満足いただけのなら光栄だが。」

「それはもう。ありがとうございます。」

陽はすっかり暮れ落ちて、あちこちに大型スクリーンの灯ったマンハッタンの、途切れることのない夜景の中を二人で歩いている。

「寒くないか？」

オスカーは今日着用してきたジャケットを着ているが、リュミエールの上衣は薄手のシャツのみだった。

「夜は思ったより冷えますね。気が付いたらもう、夏の終わりです。明日からは気を付けて、何か持ち歩くようにします。」

「そうしてくれ。帰るまでジャケットを貸そうか？」

リュミエールは隣のオスカーの顔を見上げ、小さく声を立てて笑った。

「じきにホテルに着くので大丈夫です。ありがとうございます。」

「そうか。」

オスカーはリュミエールへ笑い返し、しばらく二人とも無言で歩いた。

「貴方はさぞかし、眩いばかりの綺羅やかな恋愛を、数え切れないくらい幾つも繰り返してきたのでしょうね。」

唐突に齎もたらされたリュミエールの発言に、オスカーは絶句してリュミエールを見遣った。リュミエールがオスカーを見上げ、深海色の揺らめく視線を合わせてくる。

「すみません、急に立ち入ったことを。」

「……いや。」

無表情のオスカーが何と返事すべきか判断しかねているうちに、リュミエールが少し首を傾げて目

を合わせたまま、ゆっくりと歩みを進めつつ、自らの言葉を継いだ。

「もちろん技術的には、プロのソリストに及ばないところもあると思いますが、貴方の演奏と音色とは、それを覆って余りあるほどに、魅力的で蠱惑的な色艶に溢れていて。きつとそうなのだろうなと。」

肯定するのも否定するのも何故かオスカーには躊躇われて、視線だけでリュミエールの言葉の続きを待つ。

「貴方の音色に誘われて、問い掛けられて、導かれて。今日一日だけで、とてもたくさんのことを学びました。思考でなく、感覚で。」

そう言うのと、リュミエールは少しだけ悪戯げな表情をその顔に浮かべた。

「何人かの方に演奏の指導をしていただいていて、もちろん日々絶えず精励していますし、純粋な賛辞を頂くこともありますけれど。特に年齢を重ねた、比較的高齢の指導者には、口を揃えたようによく言われるんです。『恋をしたことがないね。』って。」

どこか憂うようにリュミエールが首を傾ければ、動きに合わせて髪が流れ、目際を覆い隠す。

「見透かされていますね。……今まで、一度もそんな気持ちになれたことがなくて。」

パリなら、街中でもキスする人たちの方が普通なのに。これまでキスひとつすらしたことがないなんて、とてもじゃないですけど言えなくて。」

リタルダンドのように、二人の歩みが止まり。

だから、と、オスカーを見詰めたまま、リュミエールが言葉を紡ぐ。

「今日、貴方を知って。」

貴方のような人に、導かれてみたい。貴方に導かれて、高みへと至ってみたい。と。  
そう、思ってたんです。」

オスカーの脳髓は痺れ切つて、身動きすらできずに。

「もし、望んだら。また、導いてくれますか？」

……密かに、オスカーは息を吐いて。

リュミエールへと手を伸ばし、目際の髪を掻き上げ、顫顫を梳いて、後頭部へ流し。

「…お前が望むなら、いつでも。」

その頬に指を添え、柔らかに笑つてみせた。

目を細め、頬に触れるオスカーの片手に両手を重ね、顔を綻ばせてリュミエールが微笑う、オスカーの目の前のそこには、無限と永遠とこの世界の全てとが、確かに存在していて。

そうしてリュミエールの手が離れ、オスカーの指も離れた。

「ありがとうございます。嬉しいです。…本番には来てくれますか？」

「もちろん。関係者席を貰っている。」

「レコーディングでも演奏会でも、聴いてくれる全ての人に音を届けたい、と、いつも思っているんですけど、」

一息空けて、言葉が続く。

「今度の演奏会は、誰よりも、貴方に。音を届けたいです。」

ありがとうございました、おやすみなさい、と。目の前まで辿り着いていた、ホテルのロビーの中へと姿が消えていく。

長くその姿を見送った。背後のマンハッタンの喧騒は、まだ止まない。

(眩いばかりの綺羅やかな恋愛を、数え切れないくらい幾つも)

肯定か否定かといえば、考えるまでもなく肯定だった。

だが、本当の恋をしたことがあるのかと問われれば。

「……………」

ジャケットの左襟を掴み、握り締めた。胸が痛い。

それから長く溜息を吐き、緩く頭を振って、冷えたマンハッタンの夜の空気の中へ感情を振り落とした。

クライアントだった。それも同性の。望まれたのは音色であって、存在ではない。

(また、導いてくれますか?)

無理だろうな、と思った。

今日と同じ誘いをされたら、欲望の暴走するまま、その存在を芯から徹底的にぐちやぐちやにしてしまいそうな自信が確かにあった。

朝から夜まで演奏し続け、身体は快い疲労感で満たされているのに、意識はなかなか夜半の夢の中へと落ちようとはしなかった。明日はリハーサル、明後日は本番なのだから、眠らないといけないのに。

リュミエールは薄く瞬き、肌触りの良い羽根枕のシートに俯せた頬を擦り付ける。

何度かうとうとと無意識の世界へ潜りかけて、その度に脳裏に湧き上がり意識を呼び覚ますのは、目に焼け付くような緋色の髪、氷青色の視線。ほんの一瞬早い立ち上がりの、誘い攪う深く低い音色。

甘く語らうE線の囁き。

情熱的に  
"passionato"。

唇の動きを目にただけで、その発語を直接聞いたわけではないのに、あの低い声で再生される言葉。

「……………」

なるほどこういうものなのか、と、今日初めて腑に落ちた気がした。年嵩としかみの指導者たちからこれまでに、重ねて聞いていたこと。

(眩いばかりの綺羅やかな恋愛を、数え切れないくらい幾つも繰り返して)  
きた人の音色というのは。

その音色に誘われて、煽られて、導かれて、聴いたことのない音を自分の指が綴って応える。初めて得たその感覚を手放すのが惜しくて、他の曲もと我儘を言った。あの第2楽章の他はほとんど浚っていなかっただろうに、苦笑しながら付き合ってくれた。優しい人だ。もちろん参考になったところは第2楽章に劣らず多々あった。

自分は一応プロのピアニスト、彼は非プロとはいえ、そういう方面に関しては彼の方に一日いちじつどころではない長がある。

(それがまた)

音色だけではなく、現実世界での行動でもエスコートに手を抜かないのだから。枕に顔を伏せたまま、自然と唇が緩む。

本番前の身体を気遣ってくれているとはいえ、女性ではないというのに、ドアの開け締めひとつ、体調への顧慮ひとつからして。あまりにそう振る舞うことに慣れすぎているのだろうか、その態度は至って自然で。

つい気が緩み、あれこれと甘えてしまい、自分のことについても何かと話しすぎてしまったような気がする。こればかりは無理したところで如何どうし様ようもないことだからと、普段は考えないようにしていたが、実は密かに気に病んでいたのかもしれない。気を許した人に、ついいろいろ話してしまった程度には。

『一度もそんな気持ちになれたことがなくて。』

彼は黙って聞いてくれていたが、内心ではさぞかし呆れたことだろう。彼のような人にとっては、恋をすることこそが自然で当たり前のことなのだろうから。

『キスひとつすらしたことがないなんて、言えなくて。』

あ、と思つて、枕から顔を上げた。言つてゐる。

軽い羞恥で頬が熱くなる。

流石にそれは話しぎだろうと。すみません、と再び枕に顔を埋めながら、暗闇の中で呟いた。余計な話を彼に押し付けてしまった。

あまりに気にすると本当に寝れなくなる。努めて眠ろうとして、もう一度胸の中でオスカーに詫びてから、意識を発散させ、しばらくあつてからようやくとろとろと再び微睡む。

(貴方のような人に、導かれてみたいと。)

…告げたそれは、紛れもない自分の本音で。

『お前が望むなら、いつでも。』

夢現の意識の中、自分の髪を梳いて、頬に手を添えたオスカーは。自分に顔を寄せ、優しいキスをくれて。

「……………」

馥郁とした心地良い微睡みを幾分か引き摺った後、リュミエールはベッドの上で俯せの状態から飛び起きた。

今になって初めて気付いた。話の流れからして、自分の言葉がそういう意味で捉えられかねないことを。

「違います、そういうつもりじゃなかったんです。ごめんなさい。」

身体の芯から沸き起こる羞恥で全身を熱くしながら、目を閉じ虚空に向かって人差し指を左右に打

ち消し振る。自分が伝えたかったのはあくまでも音楽的なことで、これからもその音色と合奏する機会が欲しいと、そういうことを言いたかったのであつて。

大丈夫、彼はきつとわかつてくれている。そうでなければ、

『お前が望むなら、いつでも。』

あれほど平静に、そんな返事をしたりしていない。

柔らかい笑み。彼は最後まで優しくかつた。

なら自分が、自分の意識の中へ投影したものは。

「……………」

本当にそんなつもりではなかったのだが、もはや彼の尊厳を密かに汚したも同然だった。自己嫌惡に陥りながら深く溜息を吐いて、ゆっくりと再び身を横たえ枕へ俯せる。

到底眠れそうにない気がする、と考えて、そこでまた浮かぶのは脳裏の彼の仮の声で。

『氣にするな。体に障る、早く寝ろ。』

きつと彼なら本当にそう言ってくれる、あの自信に満ちた態度で、笑いながら。けれどそれがどれだけ間違いないとも、そのことを言い訳にして許されようとするのは、あまりに自分に都合が良すぎる。そう断言できる。何より、そもそも自分を許せない。

……自分に対して甘くなるつもりはない。けれど今は本番を控え、つくづくと反省して、侘びと自己嫌惡は本番の後へ山のように積み上げておくことにし、今回だけは脳裏の彼の言葉に甘えることにした。

「……寝ますね。本当にごめんなさい。」

眩き、強いて意識を無明の闇の中へと溶こうとする。

起きていての微睡みなのか、寝ていての夢なのか、判然としない領域をうつらうつらと行き来しつつ。

繰り返しオスカーは現れて、笑い、手を差し伸べ、髪を梳き、頬に触れて、氷青色の瞳で見詰め、あの音色を奏でて、誘われ、導かれ。

音は続いているのに、気付けばいつの間にか、自分の身体はその腕の中に攫われていて。

早朝に目覚めてほとんど眠った気がせず、スタジオに足を向けてそれからひたすら怒濤のように練習し、疲れ果てて昼前に一度ホテルに戻り泥のように眠ってから、ようやく多少すっきりして午後からのリハーサル会場へと向かった。



## 幕間

「オスカー！」

この摩天楼にいるはずのない、しかし真昼の高層ビル街の雑踏の中でも見間違えようなのではないほどに極めて目立つ緋色の姿を遠くから見掛け、ジュリアスは片手と声とを上げた。立場上、人目に付きすぎる行動は無闇と行わないよう普段から心掛けてはいるが、それでも今あえて大きく声を投げ掛けたのは、そうでもして強く意識を引かないとそのまま通り過ぎそうな雰囲気とその男が漂わせていたからだ。いつ何時でも余裕を持って周囲への注意を不斷に欠かさないような人間が、珍しく。

振り返って視線を超越し歩みを止めた緋色の長身が、踵<sup>きびす</sup>を返してジュリアスの方へと寄ってくる。振り返って視線を超越し歩みを止めた緋色の長身が、踵<sup>きびす</sup>を返してジュリアスの方へと寄ってくる。

「ご無沙汰しています、ラドフォード代議士。よく俺のことを覚えていてくれましたね。」

「ジュリアスでいい。それだけ目立つ形<sup>かたち</sup>をしておいて、忘れろというのはかなりの無理難題だな。久しぶりだ、オスカー。ニューヨークで会うとは思わなかったが。」

互いに力強く握手を交わしながら会話を続ける。ジュリアスの傍らには秘書らしき人物が一人付いていたが、彼の立場を考えればボディガードの一人もいないのが逆に恐ろしくすらあった。

「あなたこそ、こちらにいるとは思いませんでした。明日のカーネギーはフィラデルフィア管弦<sup>管弦</sup>楽<sup>楽</sup>団<sup>団</sup>だったはずですが。ああ、そういう昨日がボストン交響<sup>交響</sup>楽<sup>楽</sup>団<sup>団</sup>でしたか。」

「心外だな、そういういつも遊んでいるわけでもない。まあ、確かに昨日のBSOの公演もしっかり聴き

はしたが。きちんと仕事はしている、こちらへの視察のついでだ。今日中にはボストンに戻る。」

「もちろんあなたの八面六臂の活躍振りは存じておりますよ。演奏会の鑑賞も、地元の文化振興と楽団愛故ゆえでしょう。先日の予備選も、御祝申し上げます。」

「皆の支援があつてこそだ。今後何かの機会があれば、カティスにもお前にもよろしく頼む。」  
ジュリアスとオスカの縁故も、カティスのかつての紹介によるものだった。

若きカリスマ、との名声をその姿で体现するが如く、アングロサクソン系の金髪碧眼の威風堂々たる姿は相変わらずだったが、民主党基盤のマサチューセッツ州において僅か28歳のジュリアスが既に連邦下院議員2期目にもなるほどの絶大な支持を得ているのは、その政治的名門の出自の故でも豪華な形貌の故でもなく、人種、貧富、貴賤の一切の別なく市民に寄り添う徹底した政治姿勢からだった。

高ハイスクール校在学中から市民運動の旗手として既に頭角を現し、25歳になってすぐの9月の予備選を広い得票で、特に若手層からの圧倒的支持をもつて勝ち抜けた。以来2期の連邦下院議員を務め、つい先日

の予備選も危なげなく現職議員として勝利し、11月の中間選挙での3期目再選は確実視されている。  
出身一族の実業家の親族からすら時に煙たがられるほどの市民派として振る舞う以上、大企業との軋轢は長期的に見て避けられ得ず、企業法務を主戦場とするカティスやオスカとの相性は必ずしも良いとは言えない関係性だったが、だからこそ互いに容易には得難い相手であり、繋がりを保つておきたいという双方一致の思惑があった。

「それにしても、よくカーネギーホールの公演予定など把握しているな。お前がこの分野にそれほど熱心だった覚えはないが。」

「明日のカーネギーの公演の件で、カティスが一枚噛んでいまして。俺が今回ニューヨークに来てい

るのも、その補助ヘルプです。」  
「なるほど？ ああ、そういうことか。」

話の流れにふと心当たり、どこか納得した様子のジュリアスに、オスカーがやや訝いぶかるような視線を向けるが、ジュリアスはひとまず当の共通の知人の件について言葉を継いだ。

「あいとも相変わらず顔の広い男だな。カティス自身はこちらへは来ないのか？」

「今はちょうど機内ですかね。今日の夕方頃にはこの辺まで着く予定になっています。」

「そうか、私とは入れ違いになるな。残念だが、よろしく伝えておいてくれ。」

「承知しました。」

ジュリアスの視線の届かない背後で、秘書がちらりと腕時計に目を向けた。次の予定までそう時間はないようだった。

「ところで、お前は補助だというのが、演奏会ひとつがそれほどの難題だったのか？ 随分と酷い姿をしている。」

「そうですか？ それは失礼を、」

オスカーがやや慌てて自分のスーツを見下ろし、鏡代わりに少し遠くのディスプレイウィンドウで自分の姿を確認するが、これといって普段の自分の見た目と変わりない、ように見えた。ジュリアスの秘書にオスカーが目を向ければ、同じ意見だったらしい秘書が肩を竦めながら首を振る。

「ああ、いや、外見のことではない。何というか、内面の存在が酷く傷んでいる。そういう印象を受けた。」

さらにと告げたジュリアスの言葉に、オスカーが言葉を失い、やがてゆっくり苦笑した。

「そういうところが流石ですね。名門の七光りだと、あなたのことを何も知らずに吹聴する連中に聞かせてやりたいです。」

「それは褒め言葉として受け取ってよいのかな？」

「もちろん。あなたには参ります。」

ジュリアスが市民の絶大な支持を得ているのには、種々の数限りない理由があつたが、直接ジュリアスと接した相手がことごとく驚かされ虜にさせられるのが、ジュリアスの人に対する驚異的なほどのこの洞察力の深さだった。さながら奇術か幻想のようだと思われるそれで、真意を掬い取り、人の別なく助け手を延べ、仲間を集い、鼓舞し、スピーチを行い、利害団体と対峙する。天性の指導者といえる目の若き政治家に、改めてオスカーは感嘆した。

「不甲斐ないです。公演の話とは、あまり関係がなくて。これは俺自身の問題です。」

どこか喉を詰まらせたようにそう語って、自身を偽らず強くあろうとし、弱さを認めようとするようなその姿に、珍しい表情をするものだと思ふジュリアスは考えた。

「そうか。無理はするな。また今度、ゆっくりできる機会を楽しみにしている。」

ジュリアスは軽くオスカーの肩を叩き、互いに挨拶を交わして別れを告げる。

本来の方向へと両者が再び歩き出してから、ジュリアスは一度だけ振り返り、その後ろ姿を一瞥した。

「仰らなくて良かったですか？　これから向かう先がまさにその、明日の公演のリハーサルだと。『あまり』関係がないとオスカーは言っていただろう。何かしらの関連はあるということだ。自身の問題だと本人が言う以上、余計な口出しはしない方が良いと判断した。」

もうすぐの近場とはいえ、待ち合わせの時間までそれほど余裕はなく、早足に目的地へと歩きながら、秘書の問い掛けにジュリアスが答えた。

地元の文化振興と自身のたまの息抜きとを兼ね、BSOの公演は可能な限り聴きにいくようにしていた過程で、カーネギーホールの評議員と懇意になった。BSO以外の演奏会も時折推薦されていたが、珍しくも興奮した様子では非にと推されたのが当の明日の公演で、地元との活動の都合上どうしても前日にはニューヨークを離れることになる旨を伝えたら、「ではせめて」との言葉とともに、リ

ハーサル会場での見学の同行を勧められたのだった。

「まあ、『幻のピアノリスト』などと、どうにも胡散臭い眉唾ものの案件に係わっては、オスカーが疲労困憊するのも無理はないだろうが。」

だからこそ、カティスが当の公演の関係者、あるいは当事者だと聞いて、ジュリアスは深く納得したのだった。

「全く、食えない男だな、あいつも。」

ジュリアスですら、時に手玉に取られているような感覚を覚えることがある、飄々とした金髪の男。

これからわざわざリハーサル会場にまで呼び出されることになったジュリアスも、ある意味カティスに巻き込まれた側の人間だと言って差し支えなさそうだった。

「ピアノというのならば、」

『幻のピアノリスト』などという大仰で怪しげな存在を持ち上げずとも、むしろ。

「カティスにもオスカーにも、先日ピアノの方をこそ聴かせてやりたいものだ。」

「？ 昨日のBSOは、マーラーの交響曲第6番でしたか？」

マーラーの第6番にピアノの編成はない。

「ああ、いや。」

一昨日の視察には同行しなかった秘書に、ジュリアスは詳細を語らず簡単に否定し、その一昨日の出来事を緩やかに脳裏で振り返った。

「お久しぶり、ジュリアス。こんなところにまで貴方呼び立てて、ごめんなさいね。ちようどこちらに来る予定があると聞いたものだから。」

「どうかそんなことを仰らず。貴女からお声掛けを頂戴したのなら、理由の如何を問わず、何時でも

何処へでも参上いたします。」

ソファに座るその姿の傍らにジュリアスは跪き、片手を手に取って甲に口付ける。

「それはそれで困るわね。私が誤った行動をした時に、注意をしてくれるのは貴方くらいでしようから。」

常に目深にヴェールを被っている彼女は、その年齢すら判然としないが、溢れる威厳と気品と、ジュリアスが捧げる敬愛の念とは少しも損なわれることはない。王を擁さない合衆国において、時に冗談じみて王室に喻えられるのがジュリアスの一族だったが、無辜の民衆の戯れからではなく、真にそう喻えられるに相応しい彼女は、その存在を知るべく少数の者たちから『Her Majesty』と囁かれていた。

世界中にネットワークを張り巡らせ、あらゆるコネクションを自在に操り、人々を愛し慈しみ、平和を心から望み、しかしながら自身の力の及ばぬ埒外で、未だ各地での争いが絶えないことを常に憂い。

その所縁を初めて得た時から、己が率いともに進むべき市井の人々に抱く誇りと等しく、己の一生を通じて敬愛を捧げるべき存在だとジュリアスは思い定めた。

どうぞ掛けて、と語る穏やかな声に従い、彼女の斜向かいの一人掛けのソファに座り、用意された紅茶への札を言って口を付ける。場所柄、決して高級といえる茶葉ではないようだったが、基本に手を抜かず丁寧に淹れられたであろう素直な優しい香りがあつた。

「それにしても、今日は」

ジュリアスからすれば、『こんなところまで』と言った彼女の発言も、あながち判らないでもなかった。彼女が直接あるいは間接的に、数多の福祉財団やNPOの運営・助成を手掛けているのは知っていたが、この児童福祉施設は特段規模が大きいわけでもなく、あえて言うならばブルックリン区に

位置していてマンハッタンに程近く、ジュリアスのような立場の人間が視察に来やすいというくらいが特徴といえれば特徴だと言える程度であった。彼女が運営に係わるだけあって、施設長に案内をしてもらい、参考にすべきところは幾つもありはしたが。

そういえば、とジュリアスはその時、ふと思った。案内中の『今日は他にも客人が』との施設長の言葉。彼女のことかと思っていたが、運営に携わる彼女を施設長が『客人』と呼ぶのも、考えれば不自然であった。となれば。

先程から遠く聴こえていたピアノの音。子供と大人が交互に戯れながら弾き交わすような、賑やかな。拙い演奏が調子を外して子供たちの楽しげな笑い声が湧くと、もうひとつの手がそこから鮮やかな音律を織り成し、子供のみならず大人の歓声すらもが聞こえてくる。

言葉を続けようとしたジュリアスへ、ヴェールの内から視線を投げ掛け、彼女は唇の前に指を立てた。

「そろそろ、終了時間と聞いていますから。」

やがてピアノの音が止んだ。会話のざわめきが少し延びてからそれも止み、詳細までは聞き取れないが、これから演奏する最後の曲の紹介をしているらしい甘やかなテノールの声音が聞こえる。

ジュリアスはティーカップを音立てず置き、膝の上で両の指を組んだ。

少しの静寂の後、彼我の距離感を一切感じさせずに辺り一帯を覆い尽くした荘厳な音色に、ジュリアスの全身が総毛立った。促されるまでもなく一言も声を発せず、身動きすらできず、ただその音色に包まれて衝撃を受けることしかできない。

天から降り注ぐ光の梯子を在り在りと想起させる、重厚な和音の響き。

やがて細かく華やかな音階に美しいメロディが乗るに至り、ようやくジュリアスは傍らで笑む彼女に視線を遣り、口を開いた。

「サン＝サーンスの『オルガン付き』、第2楽章の第2部。」

「私も好きだわ。子供たちに聴かせるには、特に。とても希望に満ちていて。人というものは、これほどの音を創り出せるのだと。」

「……ここにはコンサートグランドピアノがあるのですか？ 連弾、」

「ではないし、ピアノもごく普通のアップライトピアノね。あの子が来ると聞いて、調律だけは事前にしつかり行<sup>おこな</sup>つてもらいましたけど。」

どこに行こうとも、どんなピアノだろうと、楽器がどう鳴らしてほしがっているかを、あの子はよく知っているのです。」

いつの間にあんなピアノ編曲版を作ったのかしらね、と、彼女は軽やかに笑った。

しばらくそのまま二人ともが黙って魅入り続け、オープニングに匹敵する華麗なファンファーレの音色と共に曲が幕を閉じると、割れんばかりの大喝采と子供大人入り混じる大きな歓声とが響いた。

大勢の興奮冷めやらぬ気配すらもがこちらまで届く中、人の動く様子があつて、ややあつてから部屋の前まで歩いてきた人物が、扉を穏やかにノックする。

どうぞ、との彼女の声に応え、ドアが開いてその姿が顕になった。

「失礼いたします。お久しぶりです。この度はお招きいただき、ありがとうございます。」

「礼を言うのはこちらだわ。元気にしています？ Bisous<sup>デュークキス</sup>はまだ禁止？ 残念ね。」

「貴女の身を、無闇に危険に晒すわけにはいきませんから。これでご容赦を。」

先客のジュリアスに目礼を送りつつ、ジュリアスの逆側からソファに座る彼女の傍らへ寄り、跪いた姿はジュリアスと同じく彼女の片手を取ってその甲に口付けた。長い髪がさらりと両肩から流れ落ちる。

「長時間の演奏で疲れているでしょうに、来てくれてありがとう。是非、お互いに紹介しておきたい」



て。」

そう彼女の声を聞くと、その姿はにこりと、深海色の眼差しをジュリアスに向け微笑い掛けた。中性的に際立った美貌の長い髪の青年。シンプルな白いシャツに黒く細いリボンタイ、スラックスを纏った身体は細身で、そのしなやかな指があれだけの迫力に満ちた音色を生み出していたとはにわかに信じ難いほどだった。ソファから立ち上がったジュリアスの方へと青年が歩み寄り、握手しながら挨拶と名前、軽い自己紹介を互いに交わす。

「ああ、それは。お父上と直接にお会いしたことはないが、何度も話には聞いている。機会があれば是非、厚誼を得たいと思っていた。」

「恐縮です。どうぞ今後ともお見知り置きを、ラドフォード代議士。」

「ジュリアスと呼んでくれ。……なるほど、」

二人を見遣り、静かな笑みを湛<sup>たた</sup>える彼女へと、ジュリアスは振り返った。

「私も、貴女と同意見ですね。申し分<sup>ぶん</sup>ない。」

この音色は、いずれ世界を変える可能性がある。」

彼女は笑みを一層深くして、黙ったまま、だがその沈黙は否定ではなく。

ジュリアスが再び青年の方を見遣ると、深海色の瞳が柔らかに細められて、ジュリアスの碧眼の視線へと応じた。

「若輩で、未だそのような評価を頂くには充分値するとは思っておりませんが、光栄に存じます。こうやって演奏を披露する機会に恵まれ、適うならば真にそうあらうと、より高みを目指して、倦まず弛まず今後も努力を欠かさなつもりです。」

人を愛し、人の幸せを願い、世界の素晴らしさを信じ、世界をよりよい方向へと導き。

ジュリアスとは立場も分野<sup>フィールド</sup>も大幅に違えど、青年は確かに同じ方向を向いてともに歩む同志だっ

た。

「貴方なら大丈夫よ。でもできれば、『皆』だけでなく、『誰か』への恋心を覚える巡り逢わせがあると、もっと素敵なことになると思うわ。」

「貴女もそう仰るんですね。流石、と申し上げるべきかどうか。」

やや苦笑気味に、青年は小さく首を傾げて酷く綺麗に微笑った。

限られた時間の中で歓談し、近いうちの再会を期してから別れを告げた。

正直言つて、今日これからの『幻のピアニスト』とやらの演奏が、一昨日のあの衝撃を超えるとは到底考えられそうにない。

「撮影禁止だそうなので、ご留意ください。」

「そうか。まあ、する気もないが。」

秘書の注意喚起に、やや呆れの増した声でジュリアスが応じる。

「本番の演奏会も当然撮影禁止ですが、オーケストラのメンバーを含めた関係者間での撮影も禁止、メディアによるピアニストの事前および事後の取材も一切なしだとか。カーネギーホールサイの公演一覧では、いつもの独奏者リストのスナッフショットの代わりに、当のピアニストの署名サインが掲載されているだけでしたね。」

「随分と徹底していることだ。」

そうまでして『幻』としての話題を作りたいのだろうか。あのカティスがやったことにしても、いくら何でも度が過ぎる、とジュリアスは感想を抱いた。

「『L'unière』リニエール、といったか？」

「ええ。」

ちょうどそのタイミングで、ジュリアスたちは待ち合わせ場所のリハーサル会場のエントランスで評議員と合流し、その後は興奮気味に早口で捲し立てる評議員の発言を一方的に聞くだけにならざるを得なかった。とにかく行く早う早く行く早う、少し前から始まっていたが、ここまで漏れ聴こえてくる音だけでも桁が違う、等々。

ちょうど演奏が途切れ、楽章中の表現を擦り合わせているらしい指揮者の声が聞こえる最中、リハーサルスタジオのドアを勢いよく開けて評議員が待ち切れないように入室していった。戻りかけるドアを秘書が押さえ、やや間が開いてからジュリアスが入室する。

入ったのはリハーサルスタジオの後方にあたるドアで、椅子に座る楽団員たちの背中がこちらを向いており、離れた前方側に指揮台とピアノとの配置が見えた。興奮を抑え切れずに高らかな声で指揮者に声を掛ける評議員へ、同様にそれ以上に高揚を隠さない指揮者の側も大きく応え、ハグを交わして矢継ぎ早に演奏の手応えを話し合っている。指揮者はモントリオール出身のカナダ人で、評議員との会話は時折早口のフランス語が入り混じるようになり、途中からジュリアスには聞き取れなくなつた。

そうしてジュリアスは気付く。スタジオに満ちる独特の、その瞬間特有の雰囲気。ジュリアスとて伊達に年間何十もの演奏会を視聴してはいない。その現場に立ち会った時の、確実に、覚えがあった。

オーケストラ団員も撮影禁止だのという、通常はあり得ない面倒な条件を押し付けられ、さぞ気分を害しているかと思いきや、百人近い彼ら彼女らが今この瞬間に帯びている熱気。

それは揺るぎない実力に裏打ちされたオーケストラの楽団が、稀代の指揮者に、あるいは独奏者に出会い、導かれて、これまで当然と思っていた演奏の世界の枠を超え、遙か遠くへ、長く語り継がれる伝説の名演と呼ばれるものが生まれ出る瞬間の熱気だった。

指揮者はこのオーケストラの常任指揮者で、では。

指揮者と評議員とに一同の注目が集まる中、ふとピアニストへ視線を遣ったジュリアスは、ただ一人だけスタジオ後方の薄暗いこちらを振り向いた、長い髪のパニストと目が合った。ライトに照らされたその深海色の瞳は、意外な驚きに軽く見開かれたように見えて。

白いシンプルなシャツに、今日はループタイの、その姿は見間違えようもなく。

「ル…」

小首を傾げ、ジュリアスをその深海色の視線で捉えたまま、他の誰にも気付かれない目礼と、ほんの軽く内向きに上げた右手とで応じたピアニストは、緩く笑みを描く自身の唇の前で、すい、と、その右手の親指と人差し指を左右から閉じ合わせた。

(内密に。)

仕草はジュリアスただ一人にだけ向けて、明確に、その意を表していて。

言葉もなくジュリアスがその姿を見詰めていれば、そのまま、視線の先の唇が動いて無音の言葉を綴った。四語分の。

数瞬の後、ジュリアスは軽く頷いて片手を上げ返し、ピアニストとの遣り取りに気付かなかったがために不思議そうな顔をする秘書とともに、近くの余っていた椅子へと掛けた。評議員は語り足りない様子ながら指揮者に挨拶を残して後方へと移動を始め、その途中でコンサートマスターと『幻のピアニスト』には、軽い敬礼と数語の、おそらくは『また後ほど改めて』といったような言葉を掛けていた。興奮<sup>しき</sup>頻りが冷めやらぬが故に、演奏中の奏者への握手は流石に避けたらしい。

スタジオの最後方のジュリアスの隣まで戻ってきて同じく余った椅子に掛けた評議員は、再びハ―サルの進行へと戻るオーケストラを見ながら、小声でジュリアスへと話し掛けた。

「君の紹介を先にした方が良かったらどうか。」

「いいや。あなたにも判るだろう、これ以上演奏の妨害をすると、団員たちに呪い殺されそうだ。」早く弾かせろ、吹かせろ、演奏させろ、この瞬間を逃したくないのだと。自らたちの枠を解かれ、体験したことのない領域へと到達する、伝説的な演奏が生まれる瞬間というのはそういうものだった。「リュミエール、か。」

第3楽章の冒頭、鼓膜を揺るがすグラン<sup>太</sup>カッサ<sup>鼓</sup>の打撃を端に、低音から高音まで力強く駆け抜けるピアノの音階の、変わらぬ衝撃的なその音色を聴きながら、ジュリアスは呟いた。

できることならばもつと自由に活動したいのだから、『幻のピアノリスト』として在らざるを得ない理由も、今なら理解できる。そう考えれば、カティスに関しても。単に食わせ者が面白半分<sup>面白半分</sup>に仕組んだのかと思いきや、あれはあれなりに、クライアントの最善を考慮して手配していたのだと。

送られた無音の四語のメッセージは、おそらく。

『for the time being』

(であれば、)

最初からそうと伝えておいてくれれば。水臭いことだ、とジュリアスは思った。表立たずともそうでなくとも、助力を惜しむつもりはないのに。再会の期がこれほど早く訪れるとは、互いに少しも思っていないかったとはいえ。

幾百幾千の音の綴りと重なるの、熱狂の渦に包まれてゆく空間の快い高揚とともに堪能しながら、再度こちらへすらりと視線を寄越し、片目を閉じた深海色の瞳に、ジュリアスは碧眼のその視線で笑んで応えた。

## 3

怒濤の勢いでクラウドストレージに更新されてゆく今日分のファイルの数と分量からして、ある程度は予想していたことだったが、現場の様相は予定通り夕刻に到着したカティスの事前の想像を遥かに超えていた。

「で今晚、リハーサルを終了後にリュミエールと会って二人でディナーに行く予定になってるんだがな。オスカー、お前はどする？ 来るってんなら予約の人数を変更しておくが。」

L&Cのニューヨーク事務所の共用スペースの一角、開放的で整然とした事務所内の光景の中、そこだけ本と書類とが乱雑に積み上げられた狭間で、深くデスクに沈んで行儀悪く頬杖を突きながら書類を読んでいた長身の氷青色の視線が、その時になってようやくデスク越しの正面に立つカティスの方を向いた。重苦しい沈黙の数瞬が重なる。

「…別に義務じゃねえよ。人ひとりそこらへんで殺してきたような顔をすんなっての。」

無言のまま鋭い視線だけをこちらへ遣り続けるオスカーへ、呆れたようにカティスが応えた。

「わかった、俺とリュミエールとだけで行ってくる。どうせ肉食のお前がさほど食指の動きそうになり肉食だよ。」

ところで、明日の本番は聴きに来るのか？」

「…ああ。」

書類へ目線を戻し、地を這うように低い声音でその一語だけを答えたオスカーへ、カティスはもはや何をも言わず片手を上げるだけで了承し、所長たちへの挨拶のためにその場を離れた。

数日前のオスカーが発ったその日、根本的には極めて優秀な人間であるからして、契約に差し支えを生じさせるようなことはないだろうと考えてはいたものの、よほど不本意な様子だったオスカーがリュミエールとの契約手続きをどう進めたものかとカティスがロサンゼルスで思案していたら、当日の夜にはソリスト署名済みの電子書類がひらりと事務所の共有ストレージにアップロードされ。

そこまでは予想通りで、どうも様子が妙だとカティスが気付いたのはその後からだ。深夜帯、早朝帯に凄まじい速度でオスカーの業務が更新されてゆき、何事かと思っていればその後でぴたりと更新が止まり、それが続けて2日間。時折Sick<sup>業務チャット</sup>には反応があるものの、日中何をしているのかは全く掴めない。

その日に捌くべきオスカー担当分の義務<sup>デューティ</sup>はきっちり済ませているがために、カティスの側<sup>がわ</sup>に文句があるわけでも迷惑を被<sup>こうむ</sup>っているわけでもなかったが、3日目の今日まで同じ調子が続くようであれば流石に何があつたのかを本人に確認しなければと思っていいたら、昨日の深夜から再度始まったこれまで以上の怒濤の勢いの業務の更新は、今日の早朝の時間帯を超えて日中に至っても留まるところを知らずに。見ればわかるかと思つてカティス自身もロサンゼルスから移動しニューヨークのオフィスマで着いてみれば、そこにいたのはプリントアウトした大量の書類と書庫<sup>ライブラリ</sup>から持つてきて積み上げた本の山とに埋もれ、借り物のワイドモニターの前でノートPCのキーボードをひたすら打ち続けている書類を無造作に掴んで睨み付ける、殺人犯系弁護士オスカー・ロックウェルだったというわけだ。見ても何一つわからなかった。ただひたすらに鬼気迫っているなと思うだけで。

所長に挨拶ついでに軽く話を聞けば、一昨日、昨日はオスカーは事務所に立ち寄っておらず、本日早朝から再度顔を出していると思つたらその時点から既にあの様子だったらしく、そういうタイプの

そういう業務スタイルかと思っていた、という。そんなことはない。そもそもあの殺人犯面など、凶悪すぎて弁護士事務所においておけない。

オフィスの見た目を荒らす様相の狼藉を本人に代わって詫び、できればあのまま引き続き放っておいてやってほしい旨をカティスが頼めば、所長は大して気にした様子もなく鷹揚に応諾した。

どんな時であろうと自信と余裕のある態度を崩すことなく、周囲への配慮も欠かさないオスカーが、それすらも丸ごと忘れ去った様子でこれほど陰阻になるとは。こちらに来てから、一体いつの時点で何があったのか。

何が、といつても、十中八九、

(リュミエール)

絡みなのだろうが。

ただ、リュミエールと正面衝突したことが原因でオスカーがこれほど荒れるまでの一大トラブルが生じていたのであれば、リュミエールの方にも演奏会に支障が出るレベルの多大な影響が出ているはずで、そうであれば否が応でもカティスのところまで情報が来るはずだが、特段そういうこともなく。今日も当初の予定通りリハーサルが進められていると聞くし、そもそもカティスが今日の夜の会食の予定のリマインドを今朝リュミエールへと送った際、『どうぞよろしくお願いしますね。』と何の変哲もなく異変も察せられない返信を直接受け取っている。

となると、リュミエールを誂からおうとしたオスカーが、逆にリュミエールに徹底的にやり込められた、などといった辺りか。

だがそうならそうで、いずれにせよリュミエールとの契約手続きが完了した時点でカティスの代理としての役目は終わっているオスカーは、本番を待たずしてさつさとロサンゼルスへ帰っても何ら問題はないはずだったし、カティスも一応オスカー分の公演のチケットを融通したとはいえ、特段それ



を止めているわけでもなかった。なのに、あれほど荒れた様子を見せていながら、なぜ本番の演奏会まで残ろうとするのか。

契約の日と、空白の2日間。

何があつたのか、たとえカティスは直接尋ねたところで、あの様子のオスカーが頑として答えようとしないうことは目に見えていた。かといって、契約時に何かしらのイレギュラーがあつた可能性を考えると、その場合の当事者であるはずのリュミエールに尋ねてみるのも気が引ける。

「オリヴィエがいればなあ。」

カティスに実害はないといえはなのだが、このまま放置するのも後々問題になりそうな予感がし、カティスは宙を仰いで嘆息した。

ニューヨークにはオスカーの高校時代からの親友がいて、ニューヨーク事務所の頃に法科大学院在学中のオスカーを介してカティスとも知己になり、たびたび三人で顔を合わせる仲になっていた。が、現在は俳優として自由人の名も高くあちらこちらで気ままに活動し、今もニューヨークを離れていると聞いている。

オスカーが気を許す数少ない相手であるあの美貌の自由人がいたなら、嬉々としてオスカーの様子を面白がり、追手<sup>おうちからめ</sup>搦手で瞬く間にオスカーから情報を引き出すだろうに。

「まあ、」

いずれにせよ、リュミエールと約束した待ち合わせとディナーの時間もそう遠くはない。表立ってリュミエールに問わずとも、話の流れで何かがわかるだろうか。

「……………」

カティスが立ち去り、再び一人残されたオスカーがふと自分の手元を見遣れば、下半分がオスカー

の右掌に握り潰された書類の1枚があった。そういえば先程、カティスの口が『リュミエール』と綴ったタイミングで、ぐしやりと何かの音がした気がする。

どう足掻いてもそのページが修復不可能であることを確認すると、オスカーは溜息を吐いて再出力のために当該のファイルをPC上で開き直し、両面1枚分の印刷データを事務所内の複合機へと送った。

カティスは勝手に解釈して勝手にさっさと去っていったが、オスカーは別にあのタイミングでリュミエールとのディナーを断ったつもりはない。何ならむしろ真剣に、真剣すぎるほどに悩んでいた。行くべきか行かざるべきか。

だがカティスがオスカーの返事を待ったとして、自分は果たして何と答えただろうか。

出力紙を取りに行くために立ち上がり、窓の外、ビルの隙間から高く天へと伸びる、誰しもの頭上を等しく覆う空の色を見れば、否が応にも思い出す。

深海色の眼差しを自分へと投げ掛け、綺麗に微笑う、長い髪のある姿。自分の名を柔らかに呼ぶ、あの声。指の間を流れ落ちる髪。触れた頬の、重ねられた手の、暖かさ。

(……………)

会いたい、と。

思わず目を閉じる。

あの存在を思い起こすだけで、ほんの一瞬すら迷う隙も疑うべくもなく、会いたい、と思うが、胸は痛み、想いは切実すぎて、これをただ単に会いたいという言葉で表現していいのかどうかすらわからない。

もう会わなければいい、そう結論付けてしまうのなら簡単なことだった。自分とあの存在とが交わるべき場面は既に全て終わっている。本番の公演を待つまでもなく自分はロサンゼルスへ、相手はや

がてパリへと帰つてしまえば、その後の顔を合わせる機会など作ろうとする方が逆に困難だった。  
だ。

(誰よりも、貴方に。音を届けたい。)

そう言われて綴られるあの音色を聴かずに、この全身に浴びずして帰つてしまう選択肢など一分たりと有り得もしなければ、

(貴方に、導かれてみたい、と。)

いつか改めてそう願われた時には、歪んだ欲望の激しさ故にたとえ演奏には応じられなくとも、何らかの形で、自分の適う限りのあらゆる手段で応えてやりたいと。そう願う自分の心を否定することもできない。

なら逆に、いつでも会えるように手に入れてしまえと、そう決断するつもりなら、その実行もオスカーには容易なことだった。これまで男性相手に付き合つたことはないが、交際に至るまでの告白して口説くという手順に男女の別など特段あるわけもない。そして実際に行動に移したのならば、全て自分の思い通りに事を進める自信さえ、いくらでも。本当に欲しいとオスカーが望みさえすれば、性別も、互いの居住地間の距離も、何ならば相手の当初の意向すらも、ものの障害ではないと。

だがどうしても、繰り返し追いついてられるように幾度も頭の中で想像してみても、その枠の中にリユミエールがどうしても当て嵌まらなかった。

恋というものを何一つ知らない、そしておそらくオスカーのこんな考えを欠片も想像していないであらう存在を、捕らえ、嘯うそぐいて、変容させ、自分の手の内へ収めようとする、その全ての行動がオスカー自身を自分で到底許せそうになかった。

すらりとしたあの立ち居振舞いを脳裏に浮かべる。髪を靡なびかせ、その細身でピアノを奏で、並んで歩き、投げ掛けられる深い眼差し。

こちらへと向けられるあの綺麗な微笑を、綺麗なまま、ほんの少したりとも自分の手で歪めたくはなかった。

そして思考は繰り返し、元へと戻る。

会いたい。痛いほどに。

だが会うべきなのか、会うべきでないのか。

そして行動も元に戻る。

何もかもを忘れるために、今は本来の仕事に没頭すると。

「……………」

もし、何かがあれば。

あの存在に望まれて、自分の手が必要とされることがあれば、いつでも駆け付けてやりたいと、今のうちに業務を捌けるだけ捌いておこうとする、その意図を否定することもできないが。

本格的に業務の続きに立ち返る前、もう一度だけあの姿を思い浮かべた。湧き上がる思いは打ち消しようがない。

遠くからでいい。今はその方がいい。

会いたい。あの存在に。

「ニューヨークまで来ておいてフランス料理もどうかと思ったんで、和食にしたが、良かったか？」  
「こちらの和食は美味しいと聞いているので、嬉しいです。フルコースは私には重すぎることも多くて。」

「だと思ったよ。ペアリングは酒じゃなくて茶にしておいたが、やっぱり飲むってんなら用意してもらうが。」

「いえ、流石にそれは遠慮しておきます。貴方との折角の機会なので、飲みたいのはやまやまなんです。ありがとうございます。」

微笑んで答えたリュミエールが、各自の席に用意された先付を前に、いただきます、と目を伏せて両手を合わせる。伝え聞いた程度の作法をなぞったのだろうが、綺麗な所作だな、とカティスは思った。

カティスもフォークを手に取り——リュミエールともども、流石に箸は使えない——器の上で繊細に飾られた料理に手を付けた。

それにしても、とカティスはやや訝しくさえ思う。目の前のピアニストは、これほどまでに綺麗だったのだろうか。

彼の父親に紹介されての初対面の時から以降、今回こうやって機会があり、リモートとはいえ事前に打ち合わせを重ねて、確かにだいぶ以前より打ち解けたとはいえ。そしてカティスがリュミエールを迎えに行った際のリハーサル会場の、通りすぎるオーケストラ団員たちから解散後にも拘らず感じる、溢れるほどの、期待以上に順調に進んでいるらしい音合わせの高揚感の。それらがあつたとしても、リュミエールのこの内側から輝くような存在感と微笑みは。

機嫌も随分といいうだし、契約手続きの際に粗相に遭わせた可能性はどうやら消えたようだったが、それならそれで、オスカーのあの荒れ様との対比が一層際立つ。

疑問を抱きつつも、カティスはひとまずオスカーのことは措いておき、リュミエールとの会話を続けた。

「リハーサルは随分順調だったみたいだな。」

「貴方のお陰です、カティス。素晴らしいオーケストラと指揮者ですね。音が明確で美しくて。ドイツ音楽のような重たさをあまり感じさせずに演奏してくださるのが、今回の選曲にもとても合ってい

ると思います。」

折敷の上に飯碗、汁椀、向付、それから木製のスプーンが載せて運ばれてくる間に、リュミエールが言葉を継ぐ。

「全員と共演できるのが協奏曲だけなのが勿体ないくらいです。パートの独奏者たちとの共演も、もちろん素晴らしいんですけれど。」

今回の公演のプログラムはやや変則的で、ピアノ独奏の組曲が一組、休憩を挟んで七重奏曲が一組、オーケストラとのピアノ協奏曲が一組という構成だった。七重奏曲のソリストはオーケストラの各パートの首席奏者たちで構成している。

「リハーサルといえば。リハーサルの休憩中に、ラドフォード代議士と軽くご挨拶しました。夕方にはニューヨークを発つとのことで、貴方によろしくと言付けましたよ。」

「ジュリアスと？ それはまた。」

ボストン在住のあの政治家の豪華な金髪碧眼を思い出し、カティスはやや意外な人物の登場に軽く驚愕した。

「お前とは知り合いだったのか？」

「実は一昨日に、たまたま『彼女』のところで紹介に与あずかっていました。」

「ああ、そうだったか。そっちの施設の方で演奏ほうしてきていたんだな。その時に。」

出された茶を飲んでいた最中、ふと気付き、カティスは盛大に眉を顰ひそめた。

「大丈夫だったか？ 『彼女』のところでは先に会って、それから今日のこっちのリハーサルで再会したんだろう？ 言ってなかったんじゃないのか？」

リュミエールは柔らかく、カティスを安心させるように静かに微笑った。

「私もすごく驚いたんですが、流石に察しのいい方かたでした。すぐに理解してくださって、何食わぬ顔

で挨拶していただきましたよ。」

「そうか、それなら良かった。」

カティスは安堵し、次の料理のやや大振りの煮物碗の蓋を開いた。リュミエールもそれに倣う。

ジュリアスとは旧い友人で、最近でこそだいぶん世間に揉まれて随分と柔軟にはなったものの、まだ時折ふとした場面で融通の効かない一面を見せることがあるが、幸いにも今回は柔軟性の方が適切に發揮されたようだった。

だがしばらくの後、ふとカティスが思い至る。

「いや、待てよ。ジュリアスには今回の公演の手配が俺だとは伝えてない。あいつはどこでそれを知ったんだ？」

「そうだったんですか？」

リュミエールは数度瞬き、フォークを置いて首を傾げ、斜め上の宙を見ながらしばらく思索し。

「そういえば。ラドフォード代議士は『あいつのアソシエイトにも、先程そこで偶然会った時に言付けておいたが。』と仰っていて。どうやらリハーサルにいらっしゃる前の道すがらで、オスカーと会ったらしいですね。」

「オスカーと？」

「聞いていないですか？ 貴方がこちらに着いてから、オスカーとは会ったのでしょうか？」

リュミエールが不思議そうな顔を見せた。

聞いてはいない。いや、意図的にオスカーが隠したのではなく、オスカーがあのような真つ只中で、単純にわざわざ自分に口を開いて伝えるという発想に至らなかっただけだろうことは容易く想像が付くが。

「オスカーは変わりなかったですか？ ……今日のディナーも一緒にできるかと、少し期待していた

んですけれど。」

ふわりとリュミエールが、ほんの僅かに垣間見える躊躇いを交えながら微笑い、その表情に何故かカティスの背筋がぞわりと逆立った。

オスカーに変わりが無いもあるも、あつてありすぎるほどだったが、ディナーの誘いに対して凄まじい形相が返ってきたとは、その対象を目の前にして流石に言いかねた。リュミエールのこの表情とオスカーのそれとの落差はあまりに激しすぎ、ますます訳がわからなくなってくる。

「今日は仕事に没頭していて、それどころじゃなさそうだったな。申し訳ない。」  
「…そうですか。」

カティスが無難な通り一遍の返事を返すと、リュミエールは少し残念そうな表情をその端正な顔に浮かべ、だがそれはすぐに心配げなそれにと取って代わった。

「もしかしたら、オスカーに負担を掛けてしまったでしょうか。合奏アンサンブルに時間を割いていただいたせいで。」

「アンサンブル？」

あまりの驚愕に声が引つ繰り返りそうになるのを何とか取り繕い、辛うじてことさら平静を装ってカティスが訊ね返した。オスカーが以前、ヴァイオリンを習っていたとは聞いていたが、今のカティスにはあまりにも意外すぎる話の流れだった。

「ええ、昨日の昼過ぎから。当初の申し出はオスカーからだったんですけど、約束の曲の後、私が随分と引き留めてしまつて。……それもオスカーは貴方に話しませんでしたか？」

「ああ、いや。」

何分にもオスカーの様子があれで、肯定も否定もできずに曖昧にカティスが返事をする。ここに至つてようやくオスカーの空白の2日間が、おそらく丸々そのために充てられたであろうことをカティ



スは薄らと察したが、リュミエールにそれを悟らせれば無駄に氣を使わせることになるのは明白だった。

「負担ってことはないだろう。お前が氣にしなくてもいいことだ、心配するな。」

「…はい。」

カティスにそう言われてもなお、どこかそぞろとオスカーを氣に掛け続ける様子のリュミエールへ、カティスは話題を変えようとした。煮物椀が空になる前に焼物が出されてくる。

「オスカーとのアンサンブルは楽しめたか？ どうだった、奴の腕前は？」

焼物に手を付けながらカティスがそう言うと、リュミエールは軽く目を見開き、それから少し首を傾げ、柔らかに再び微笑って。

「とても。とても、魅力的でした。また、と望んでしまうくらいに。……とても惹き付けられる、不思議な雰囲気のある方ですね。」

その微笑は、あまりに綺麗すぎて空恐ろしいほどで。

そして何故か、オスカーのあの睨め殺さんばかりの表情を、その上に重ねてカティスへと思い起こさせ。

「リュミエール。お前まさか、オスカーに本氣になったりしていないよな？」

思わずカティスは聞いてしまっていた。そうしてから、しまった、と思った。迂闊に聞いて、肯定でもされればどうすればいいのかと。

だがリュミエールは、その言葉を耳にすると、カティスを見詰めたまましばし沈黙して、ややあつてから重ねて数度瞬きをし、

「それは、恋愛のような感情で、という意味でしょうか。」

芯から意外そうに、再度首を傾げてカティスに訊ねた。

「そうだが。ああ、いや、違うならいいんだ。」

「思ってもみませんでした。ものすごくびっくりしました、とても。」

「悪かった。いや、ならいい。安心したよ。」

「安心？」

それだけで大いに含みのあるカティスの言葉に、リュミエールが不思議そうに問う。

「いや、オスカーはな。弁護士としてなら相当優秀で、仕事はできるし、だからこそお前との契約手続きに寄越したんだが、」

カティスは盛大な安堵のあまり、多少行儀悪く焼物にフォークを刺して大きく口にした。リュミエールもカティスの話を興味深そうに聞きながら料理を食べ進めている。

「付き合う相手としては、あれだ。たとえお前が女性でもまあ、到底賛成はできないからな。」

「そうですか？ とても素敵な方だとは思いましたが。私にも何かと氣遣ってください。」

「やっぱり。美人と見れば節操なくいい顔を振り撒いてやがる、あいつは。」

「そうだったんですか。氣付きませんでした。」

カティスが苦々しさを隠しもせず愚痴れば、リュミエールが楽しげに小さく声を立てて笑った。

「女性への氣遣いは、そりやあ逸品だ。だが付き合いは誰とも長続きしなくてな。何しろあの容姿とそれこそ八方振り撒く氣遣いのせいとで、際限なくいくらでも佳い女性が寄ってくるし、オスカーは一度落としてしまえばとっと次の対象に興味が移るタイプでな。」

揚物はもともと少なめにと頼んでいたが、数種盛られたそれと吸物とが、新しく用意された茶と一緒に出されてくる。

「わかる氣はします。オスカーも魅力的なら、オスカーの目に適いかなそうな女性の方も、とても魅力的でしょうから。仕方ないという氣もしますね。」

そのオスカーの様子を思い浮かべるように、リュミエールは目を細めながら微笑つて相槌を打っている。よければお手で、と勧められ、塩を摘んで揚物に振る手付きが整つていて美しい。

「随分と理解があるんだな。そうなった場合、付き合っている側の相手がいそうですかとオスカーをすんなり離すわけもなし。別れ方は、どうやったって毎回女性を泣かすことになる。」

かくいうカティスも、成り行きで何度か女性側の嘆願に巻き込まれそうになったことがある。

「だが相手側がそれをやってしまうと、オスカーはもう完全に冷め切るからな。俺への嘆願が相手側の意図した効果を發揮したことは、一度もないんだが。」

「私が知らない世界なので、とても興味深いです。女性の方にはお気の毒ですけれど。」

カティスの愚痴に、リュミエールは女性側への配慮を見せながら答えた。

「究極はあれだ、『もう好きじゃなくなった。』だと。流石に滅多と使うことはないらしいが、それと言われてしまえば、相手側には何一つ反論のしようがない。こればかりはな。」

「すごい言い方ですけど、それがきつと、正直な本心なんでしょうね。誠実といえば誠実、なんでしょう。オスカーなりの。」

「アバンチュールだなんて本人は言うが、実態は単なる取っ替え引っ替えだ。…こんな話をして、折角の料理が不味くならないか？」

「長老の指導者たちから、音に色気がないって言われていますから。」

リュミエールはカティスへ、苦笑混じりの綺麗な微笑みを浮かべて応える。

「オスカーの音色は、凄みがあるほどの色艶でしたし。そういう恋愛の遍歴がああ音に繋がっているのだなと。とても参考になります。」

「こんなので良ければ、まだまだ山ほど話の種はあるが。いくら音楽のためでも、あんなのを参考にするのはどうかと思いはするがな。」

食事が八寸へと進む中、カティスとリュミエールは声を合わせて笑った。

翌日の本番の日。

何日かの連泊で馴染みになった淡い朝の陽の光の中、リュミエールは目覚めて。

「……………」

身体が重い。

きちんと寝れてはいた。昨日の朝とは違って。何なら昨晚、カティスと別れてホテルに帰り、シャワーを浴びて寝支度を整えると、むしろ気を失うようにして眠りに就いた。何も意識に上らないほど、深く。

重い身体を再び横たえ、枕に俯せる。

『お前が望むなら、いつでも。』

胸を強く締め付けるのは、オスカーのその言葉で。

自信に満ちて強く笑う、あの笑顔で。自分を誘い、導く、あの音色で。

頬に添えられた暖かい手と、真っ直ぐに自分に向けられる、あの氷青色の視線で。そして。

『もう好きじゃなくなった。』

何一つ始まってすらいなかったのに、笑って自分に向けられる、その言葉で。

「……思ってもみませんでした。」

枕に俯せたまま、昨晚と同じ言葉を、もう一度呟いた。

いつの間にか。

こんなに、これほど身体中が痛んで仕方ないほどに、あの人を慕っていたなんて。

夕方が近付く頃合い、カティスはL&Cのニューヨーク事務所に顔を出した。

先に会場入りした評議員から連絡を受け取っていた。Dress Rehearsal<sup>デレハサール</sup>は順調だと。実に素晴らしい、今晚の公演の成功は間違いないと。

ただカティスには、何かしらそれ以外のものが感じられていて、その予感<sup>予感</sup>は事務所内で、打って変わって整然と本と書類の片付けを進めていたオスカーを見るに至って、確信に近いもの<sup>もの</sup>に変わった。

書庫<sup>ライブラリ</sup>に本を全て戻し終え、必要最小限に纏めた書類とノートPCとをブリーフケースに収め、ブリーフケースごと借り物の棚へと仕舞い、借りていたワイドモニターを返却する。

「本番前に楽屋に入ってリュミエールに挨拶するが、お前はどようする。」

「行く。」

カティスからそう訊ねられるのを当然と考えていたように短く答えるオスカーは、標的<sup>ターゲット</sup>が手に入らずに苛立つ女<sup>レディキラー</sup>たらしと見做すには、あまりに真剣すぎて。

カティスの方を振り返り返りもせず事務所から移動を始めるその長身の緋色の姿の背中を、カティスは複雑な思いで追った。

タクシーに乗り、カーネギーホールまで移動する。道中は二人ともずっと無言だった。ホール裏手の関係者エントランスの受付でカティスが記名して手続きをし、2つ受け取ったうちのオスカーの分の関係者パスを渡す。

「ゲネプロは終わっているがピアニストはまだ舞台上で練習していて、そろそろ設営が始まるタイミングで帰ってくるそうだ。」

「いい。」

そう言うとおスカーはカティスを楽屋廊下のその場に残し、ホールの廊下へと続く関係者用出入口を抜けていった。

あと1時間も経てば人で溢れるホールの廊下も、今は薄い照明のみが照らす静寂に支配されている。オスカーは真つ直ぐ廊下を進むとホワイエまで出て、ホールに続く中央右手の扉を押し開けた。

一寸先をも見通しづらい前室をごく静かに抜けて出た、1階席後方の座席はほぼ暗闇で、そこだけ明るく照らされている舞台上の光景だけが在り在りと目に飛び込んでくる。プログラムの最初の曲はピアノ独奏の組曲で、舞台の上から他の余分な椅子や譜面台は既に綺麗に片付けられ、ピアノとピアノの前の椅子のみが残されており、燕尾服を着てその椅子に掛ける長い髪のパアニストは、組曲の最後の曲、『キークの大門』をその手で奏でていた。

変ロ長調、ピアノシモ p p の和音が静かに綴られた後に、フォルティシモ f f の完全八度の音階がめくるめく下降と上昇の展開を響かせる中、厚く重なる和音に乗る主題がホールの隅々を揺るがす。

オスカーの心までも。

(リュミエール。)

スポットライトに明るく照らされるその姿を、しばらくじつと見詰めてから、オスカーは中央最後部から数列前方の手近な座席に掛けた。前の座席の背凭れの上で両腕を組み、顔を埋めて寄り掛かる。力強い和音と幾重にも折り重なるトリルが、だんだん強く緩やかに allargandoとともに終曲に至り、残響は長くホールの中に響いた。

最後の音が消え去った後も長く、長く顔を俯かせていたパアニストが、目を閉じたまま顔を上げ、ゆつくりと目を開いて舞台の天井を見上げた。スポットライトの下、その深海色の瞳の色が頭になる。

遙か遠くのこの場所からでもはっきりと判る、その色の深さ。

目元に一筋残る髪を、この手で掻き上げてやりたい、とおスカーが思った時。

ピアニストの指が、天を見上げたまま音を綴り始めた。押し秘める心から耐え切れず零れ出るような、微かな ピアニシモ pp の囁き。

『月の光』……。』

オスカーが見詰め続ける中、高く細く綴り始めた囁き声はゆっくりと低く沈んでゆき、低く沈んだ音は震えて高く小さく刻まれてゆく。揺れ動く音色はほんの時折だけ激しさを垣間見せつつも、すぐに息を潜め、自らの心の中へと再び小さく高く消えようとして。

舞台袖で、楽屋で、その音を耳にした誰もが、手を止め。そしてホールに唯一人あるオスカーも、微動だにすらできず。

最後の音を綴ったピアニストは、その深海色の瞳で、ただ天を見詰め続けている。

(駄目だ。)

オスカーは席から おもむろ 徐に立ち上がり、前席の背凭れを掴んでリュミエールの姿を見据えながら、それだけを強く思った。理由もわからず。ただ何かが、リュミエールのこれまでの音と決定的に違っていた。

「オスカー、こっちか？」

背後の扉が唐突に開く気配がし、声が掛けられる。声の主の方へ反射的に振り向こうとするより早く、オスカーの視線は、ホールの気配にこちらを向いた舞台上のリュミエールの、その軽く見開かれた瞳が確かに自分の姿を捉えたのを見た。

その表情は、オスカーの目の前のように。どうしようもなく手の届かない、遙かな遠くのように。

その唇が、オスカー、と確かに綴ってから。

リュミエールは少し首を傾げて、微笑った。哀しく。

何もかもを、全て終わらせようとするかのように。

オスカーがその名を呼ぼうとした瞬間、舞台袖の上手<sup>かみて</sup>からピアニストへ声が掛けられた。開場時刻が間もないために舞台からの引き上げを呼び掛ける声に、リュミエールは上手<sup>かみて</sup>の方を向いて軽く頷く。立ち上がり、ふともう一度オスカーへと視線を投げ掛け、互いの視線が確かに合ったと互いを感じた後で、リュミエールは少し微笑って、僅かに俯き、静かに瞼を閉じた。それはどこか、祈りを捧げる姿に似ていて。

そうして身を翻し、その後ろ姿は二度と振り向かず<sup>しもて</sup>に下手の舞台袖の先へと消えた。オスカーが即座に踵を返し、ホール出入口の扉へと向かう。

「オスカー、」

「来んな。」

カティスとすれ違いざま、それだけを言い残し、オスカーは楽屋へと歩を急いだ。



何があつた、とオスカーは思う。

一昨日の夜の、ホテルのロビーへと戻つてゆくその暖かく綺麗な後ろ姿を見送つたあの時まで、何もかもが全て順調なはずだった。

頬に触れたオスカーの手へ、天上の音を綴り続けるその両手を重ね、心の底から嬉しそうに、恐ろしいほどに綺麗にこちらへ微笑い掛ける、その姿。

だから受け入れてきた。この胸の痛みも、息の止まるような苦しさも。

なのにあの存在に、一体何があつたというのか。

楽屋の前まで早足に駆け付け、軽くノックをして返事を待たずに楽屋の扉を開く。

「リュミエール。」

その姿は燕尾服の上着を脱いで、小振りのピアノの前の椅子の端に、美しく背筋を伸ばして座つていて。

開いた扉の方を向き、オスカーの姿を視界に入れると、驚いたように息を詰め。僅かに見開かれた深海色の瞳は、逸らすこともできないように、自身の方へと歩み寄るオスカーの姿を見詰めたまま。

「リュミエール、」

その前へとごく自然に膝を付き、片手でリュミエールの片手を取り、もう片手をゆつくりとリュミ

エールの頬に添えて、重ねて呼び掛けたオスカーへ。

「……オスカー。」

何故来たのかを問うように、小さく困ったように微笑って、ようやく絞り出すように、それだけを呟いた。

揺らめく深海色の瞳は、それでもどうしようもないほどに綺麗だと思えて。

「どうした。何があった。」

問い掛けながら目元を覆う髪へ手を伸ばせば、リュミエールは静かに目を伏せ、その手からの全てを受け取ろうとするように目を閉じた。僅かの躊躇いの後、オスカーの指が髪を梳き、顚顚へと潜らせ、後頭部へ流すと、リュミエールの端正な唇が僅かに震え、しばらく息を詰めた後で、ごく小さい吐息を零す。

オスカーが再び頬に手を添えて、目を開いたリュミエールへ視線だけの無言で再度問えば、リュミエールは薄く微笑って緩やかに首を左右に振った。

「そんなことを仰るのは、貴方だけです。素晴らしい音色だと、今日も皆様から仰っていただいています。何も問題はないですよ。どうぞ立ち上がってください、貴方のスーツが汚れてしまいます。」

「見誤っているつもりはない。お前の心が傷付いたままお前が音を奏でるのを見過ごしたら、俺は俺を許せない。」

確信を抱いていたオスカーがそう言えば、リュミエールは隠しようもなく瞳の色を哀しみに染め、体を震わせる。それが何故なのかを、無理に聞き出すつもりはオスカーになくとも。

「リュミエール。」

再び伏せられようとする深海色の瞳を留めるように、オスカーはリュミエールの顔を僅かに覗き込んだ。

「俺は、お前の音色が聴きたい。お前は言ってくれた。誰よりも俺へ、音を届けたい、と。」

オスカーが囁くように言葉を続ければ、揺れる青い視線が躊躇いがちにオスカーを見返して。

『皆』じゃない。俺のためにお前が奏でてくれる音色が聴きたい。そのために俺がお前にできることなら、何でもしてやりたい。今も、これから。」

視線が絡んだままのリュミエールから目を逸らさず、指の甲でその頬を撫で、落ち掛かった髪を再び梳いて流す。

「お前が望むなら、またいつか。一緒に奏でて、導くよ。いつだって、お前の願う通りに。」

自分の偽りない真実の思いが、その存在の内の心の奥底まで真っ直ぐに届くことを願って、リュミエールへと笑い掛けながら。

それが今のリュミエールの心に適<sup>かな</sup>う言葉なのかの確証はオスカーにはなかったが、もう一度その頬に手を寄せれば、リュミエールはようやくあの心からの微笑の片鱗を浮かべて、ごく控え目に嬉しうに、そのしなやかな片手を、そっとオスカーの手に重ねて。

「優しいんですね。貴方は、本当に。」

「お前だけだ。」

思わず本心が零れた。これほどに心を捧げたのは、この存在にだけだった。

そんな真実を悟らせて困惑させるつもりはない、どうか聞き流してくれとオスカーが内心で願っていたら、リュミエールは楽しそうに少しだけ声を上げて笑って。

「何か今、俺にできることはあるか？」

ようやくオスカーも笑顔を浮かべて問うと、小首を傾げたリュミエールが、目を閉じ、しばし思案して、それから目を開いて、その綺麗な深海色の瞳で。

「じゃあ、ハグしてください。貴方の強さを、私にください。それだけで。」

それから自らの言葉を、無理を強いてはいないかと心配するように、小さく困ったように微笑った。オスカーの脳裏は、再び強く、眩暈のするほどに痺れながら。

「お安い御用だ。」

立ち上がり、リュミエールの手に軽く手を添えて立ち上がらせると、その細い体を両腕で緩く抱き留めた。

オスカーの腕の中に収まったリュミエールが、オスカーの首筋にゆっくり顔を凭れ掛けて、小さく長く息を吐く。その背に軽く手を添え、オスカーは一度だけ、髪に手を潜らせ、艶やかなそれを下までゆっくりと梳き通した。

伏せられた瞼、オスカーの首筋を微かに撫<sup>くすぐ</sup>る睫毛、その下で揺<sup>たゆ</sup>蕩う深海色の瞳は、ただひたすらに、どこまでも綺麗で。

胸が痛かった。

今この瞬間、この手の中にある存在の、何もかも全てを衝動的に奪ってしまいたかった。

そしてそれをせず、この腕の中にある存在を自分のこの手で護り愛おしむことができることが、今この瞬間の、そして永遠の、自分の胸をどこまでも熱くさせる、あらゆる衝動を超える何よりもの幸福だった。

身を離して、客席へと戻るオスカーを見送り、リュミエールは楽屋に一人残された。

分け与えられた強さと暖かさは、今も自分の中に残っている。そしてきつと、これからずっと、あの人と遠く離れても。

オスカーはやはりとても優しく、そして自分はこんなにも心惹かれて。

まだ胸は痛むけれども、先程まで自分が囚われていた感情は、もう消えていた。この想いを終わら

せる必要などなかったから。

オスカーがどう思おうと、何一つ始まる前から全てが終わっていたとしても、自分がオスカーを慕うことにはほんの少しも変わりがなかったから。

初めて知った恋は、それほどまでに自分勝手に、何にも誰にも、自分自身にすらも縛られることなく。

今、リュミエールは、誰のためでもなく、初めて自分のためだけに、想いを抱いていた。

あの人へ、音を届けたいと思う。心から。

それはこれまで自分が真剣に願っていたと思っていた、『皆へ音を届ける』よりも遙かに強く、遙かに次元を超える強さの思いで。『皆に』と言いながら、自分はこれまで誰一人にすら、何一つをも伝えられていなかったのではとさえ思う。

今晚このホールに集う、2790の聴衆の人生の一つ一つに、同じように恋い、愛し、これほどの衝撃があつたことすらも、これまで気付かずに。

今なら、オスカーへと。そして一人ひとりへと。

きっと何かを伝えられる。この身を尽くして。

ピアノストに声が掛かり、リュミエールは舞台のスポットライトの下へと向かうために、燕尾服に身に纏い、楽屋を出て歩いていった。

その胸に抱く、初めての恋心とともに。

オスカーが楽屋廊下から繋がる関係者用出入口を通り抜けてホールの廊下に出れば、そこはもう行き交う人々の熱気と期待感に溢れる、光に満ちた場に様変わりしていた。階を移動し、舞台の上手側、2階に相当するバルコニーボックス席の1番の扉を開く。

扉の向こうのホールの中、1階から5階まで広がる観客席の人波と熱気とは、廊下のそれからさらにも増して。

舞台の上手の最もステージ寄り、7人を収容するこの2階相当のボックス席一区画は本日は関係者席として使われており、オスカーは手持ちのチケットに記載のある最前列2番へと座るために席の間を縫って前方へと移動を始め、その途中で1階席の通路を歩くその人物の、金髪と緑、ピンクのメッシュの否が応にも目立つ姿を目にした。すれ違う観客の歓声と呼び声とに、時折ハイファイブで応えたりなどしている。

「オリヴィエ。あいつ、帰ってきていたのか。」

そういえばニューヨークにオスカーが到着する予定の日の都合を聞いた際に、その日は不在にしていると当人から聞いただけで、その後のオスカーの滞在期間中の予定までは聞いていなかった。何しろ当初はオスカー自身が、契約が終わったその日に即座にロサンゼルスへ帰る可能性すらあったのだから。

この数日で、オスカーの世界はあまりにも何もかもが様変わりしていた。あまりにも眩<sup>まはゆ</sup>く、眩暈のするほどに。

オスカーはボックス席の最前列まで移動し、指定の2番の席に座った。この席はピアニストが座って向く上手側のほぼ真正面で、きっとその表情はよく見えるだろうと思えた。

先に隣の1番の席に着席しており、腕を組んで洪面を頭<sup>かぶ</sup>に隠しもしないカティスが、舞台の上のまだ無人のピアノから視線を外さないまま、低い声でオスカーに呟く。

「これでピアニストに悪影響が出てるようなら、てめえを殺す。」

「舐めんな。」

オスカーは落ち着いた声でそれだけを答えた。カティスが横を向いてオスカーの方を見れば、オス

カーはもはや、何もかものを全てを洗い流して風いのような静かな表情をしていた。

「それはどっちの話だ。お前か、リュミエールか。」

「両方だ。当然だろう。」

たとえ自分が向かわずとも、リュミエールはきつと最後まで遣り通した。そして絶賛を受け、何でもなかったような顔でパリに帰り、その後も『幻のピアニスト』として演奏活動が続け。

だからオスカーがリュミエールの下へと向かったのは、どこまでもオスカーの身勝手だった。何かは判らないが、あの時のあのままで演奏させていたら、リュミエールに生涯消えない傷を永遠に残させることになる、それがオスカーには到底許せなかっただけだった。

もう会わないとも、会って手に入れるとも決めかねた理由が、今になってようやく判る。

欲しいというなら、オスカーはこれまでに何度も思ってきたし、実際に何でも手に入れてきた。要らなくなったものは手放してきた。

リュミエールは、そのどちらでもなかった。

その存在の幸せをただ願ひ、そのためにオスカーができることなら何でもしてやりたかった。その暖かい微笑を護り通すためなら、何でも。

これまで全てを自分の望みで決めてきたオスカーが、初めて誰かのためにと心から願った、唯一の、そしておそらく、生涯で無二の存在だった。たとえこの後で、もはやその存在から望まれることなく、永遠に遠く離れることになっても。

客席の照明が消え、下手の舞台袖から舞台上のスポットライトの中に燕尾服姿のピアニストが歩み出てきた。長い髪を靡かせ、美しい所作で礼をする姿は、この大舞台を圧倒して余りあるほどに綺麗で。迎える観客の盛大な拍手に感嘆と嘆息が入り混じるのを、オスカーは自分のことのように、それ以上に誇らしくさえ思う。

礼を終えてピアノの椅子に着席する直前、リュミエールはふと、その深海色の目線の先にオスカーを見出し、抑え切れない微笑をその顔から溢れさせた。オスカーは幸せな痛みに締め付けられる胸を抱え、笑顔でリュミエールに応える。

オスカーは今、確かに、恋をしていた。

以下はその後に出版されたライブレコーディングのアルバムの、ライナーノートに記載された文章である。

《……私が偶然にリュミエールと出会ったのは、このアルバムに収録されたカーネギーホールの演奏会の1年ほど前、パリでのことだった。：（中略）：

カフェのテラス席でしばらくやさぐれていて、ふと、同じカフェの少し離れたテラス席に、すごく綺麗な子がいるな、こつちを気に掛けてるな、と気付いた。だけどその時の私は、そう気付いても自分を取り繕うことさえ面倒なほどに投げ遣りになっていて。

わざとらしいくらいに目を逸らして、それからぼんやり紅茶を飲んでたら、次の瞬間、全身がぞわつと一気に逆立った。眩暈のするような<sup>きらめ</sup>燦かしいピアノの音色が自分の傍らを通り抜けていったからだと気付いたのは、ようやくその後でだった。自分がそうありたいいつも思っていたような、明るく甘美で華麗な音色。

：（中略）：やがて曲が終わって、辺りのあちらこちらで沸き起こった拍手の中、テラス席に戻ってきた子に、ちよつと照れくさかったけど笑い掛けたら。

「良かった。貴方にはそんな華やかな笑顔が、きつと似合うと思って。」



そう応えられてしまい、今度は逆にちよつと泣いてしまつて、その子を慌てさせた。それがリュミエールだった。

…(中略)…カーネギーホールの公演に出演すると聞いて、必ず聴きに行くつと約束した。『幻のピアノリスト』として知る人ぞ知る存在だった友人が、ようやくメジャーデビューを迎えると聞いて喜んだし、その公演が、こうやってライブレコーディングのアルバムとして出版されるのもとても嬉しいと思つた。きつと必ず、ずつとこの先いつまでも語り継がれるような伝説の演奏会になるつて信じられたから。そして縁あつて、こうやってリュミエールのメジャーレーベルデビューのアルバムのライナーノートを書き連ねる役を得たのも、とても光栄で。

このアルバムを聴いた人には、必ずわかると思う。

リュミエールの情愛豊かで、高い技巧性に裏付けられ、めくるめく色彩に溢れるピアノの音色は、それを耳にした誰しもの心を動かし、きつと世界をも変えていく。……」

…(中略)…

《…：1組目のピアノ独奏の組曲『展覧会の絵』において、リュミエールの出色とすべきはやはり最後の2曲、『鶏の足の上に建つ小屋(バーバヤガー)』と、『アタツカでそれに続けて演奏される『キーウの大門』だろう。

イ短調、おどろおどろしい曲想を持つ『バーバヤガー』は、いかな奏者の手においても陰惨で重く、しばしば嫌悪感をさえ抱かせるが、リュミエールの手に掛かるそれは、私たちの胸を騒がせる迫力を失わないまま、驚くほど美しく、ともするとその闇の美しさへ引き込まれてしまいそうなほどの誘引力を湛えて止まない。

『ギークの大門』に至っては言うに及ばず、あの著名で感動的なメロディがリュミエールの抜きん出た技巧と、それだけに留まらない彼の想いの深さによって切に胸に迫り、壮大な曲想で綴られるリュミエールの音の世界に誰しもが身を委ね、その手によって赦しをも得たように感じるのだった。……

《……2組目の曲はストラヴィンスキー『七重奏曲』。これは私にはかなり難解で、解説には力不足だから、この後の曲目の解説に詳しくは譲り、このスペースには本アルバム出版の際に際してリュミエールから直接語られた言葉を、そのまま書き記すことで替えることにする。

「ストラヴィンスキー七十歳の曲にして、それまでの彼の作曲スタイルを一変させ、人々を大いに驚かせた作品です。……（中略）……1951年にシェーンベルクが亡くなった後、ストラヴィンスキーは突如としてシェーンベルクの特徴的な作曲スタイルであつた十二音技法での作曲を試みるようになり、また。 齡七十にして友人を失つた時、彼の胸中に去来したのは深い哀悼だったのか、友の志を後代に繋ごうとする新たな決意だったのか。いずれにせよ、考えるだけで胸が痛み、その曲に載せられた様々な意志と願いとに、思いを馳せざるを得ません。

オクターブを構成する十二の音を、調性に囚われず全て取り入れようとする作曲法、それが十二音技法です。十二の音を等しく愛する私には——平均律と常に向き合うピアニストにはありがちな事だと思ひますけれど（笑い）、——とても魅力的な技法です。私と聴衆の皆との出会いが、十二の音に彩られ、七十歳のその先まで続くように。七十歳に至つても常に前進を忘れず、新たな音楽との出会いがあるように。アメリカ合衆国でのデビューの光榮に浴し、私のそのような願いを皆の下に届けたいと思ひました。……（中略）……

《……最後の曲目、バルトークの『ピアノ協奏曲第2番』が熱狂的な拍手で幕を迎えた後、幾度かのカーテンコールを挟んで、アンコールを熱く期待する聴衆を見渡し、リュミエールは直接聴衆へと語り掛けた。肉声でありながら極めて澄んで通るその声は、舞台から最も遠い5階席の最深部の聴衆までもがはつきりと聴き取れたという。

残念ながら都合上、このアルバムでは収録を割愛されたその慈愛に満ちた言葉を、代わりに文章としてこのライナーノートに記しておく。

「皆様、本日は本当にありがとうございました。そして重ねての賛辞に、深く感謝します。

ご期待に<sup>あずか</sup>与り、これから1曲披露させていただければと思いますが（ここで聴衆の歓声と拍手）、少し長くなってしまいかもしれません（聴衆の再度の歓声と拍手）。

なので、もし、あなたの帰りを待っている誰かがいらっしゃるのなら。是非、そちらを優先していただきたいと思います。

大事な人との、大事なひととき。出会ったことそのものが奇跡である、その人との限られた時間を、どうか一瞬たりとも、無駄にしないでください。

大丈夫ですか？ …じゃあ、できるだけ急いで演奏しますね（聴衆の笑い声）。どうぞ一緒に、さらなる音楽の世界へと駆け出しましょう。もしスピード違反で捕まったらごめんなさい（一段大きな聴衆の笑いと拍手）。」

そうして心からの微笑みを聴衆へと向け、実に楽しげに椅子に掛け、リュミエールが奏で始めたその曲は、モーツアルトの『きらきら星変奏曲』！

本アルバムの最終収録曲でもあるそれは、実に異色の、かつ世に類を見ない素晴らしい体験だった。誰もが知るあの素朴なメロディの、全ての一音一音がその輪郭を際立たせ、少しずつ、煌めく数々の変奏曲へとより輝きを増してゆき、抑えることができない喜びとともに次々と羽ばたいてゆく。微笑

みに満ちたリュミエールの視線は、ずっと聴衆の一人ひとりの全てへと注がれ続け、あるいは時々オーケストラを振り返り、指揮者を見上げ、誰しもの胸へ幸福と高揚をもたらして。

曲の半ば、胸に迫るハ短調の第8変奏を抜けて再び長調に転じると、リュミエールはその華麗な音色で大いに、高揚を抑え難い様子のオーケストラのメンバーを煽り始めた。

「Bois！」  
木管

リュミエールが高らかに呼び掛ければ、木管楽器4パートとホルンが即座に音色に合流する。続けて「Cuivres！」と呼べば、トランペットとトロンボーン、テューバが応じ。

速度を緩めた第11変奏、指揮者が熟知り顔に棒を振って唇の前に指を立て、オーケストラを静ませると、意を得たり、といった風にくちくちと悪戯げに微笑ったリュミエールは、指揮者に笑み応え、極めて厚みのある和音でAdagioの穏やかな曲想を綴りながら——この辺りからはモーツアルトの簡素なオリジナル版でなく、リュミエールの手に成る壮麗な編曲版であった——、とても美しい、その綺麗な微笑みを聴衆に向けつつ、演奏を続けたままゆっくりと立ち上がっていった。その場に居合わせた誰の目にも、もはやその意図は明らかだった。

最終の第12変奏。弦五部と打楽器をも加えた全てのオーケストラが音色を合わせ、指揮者は聴衆へと向けて大きく指揮棒を振り、聴衆はさながら一斉にワルツを踊るが如く三拍子の手拍子を打ち、その中心には涙の出るような感動的な音色を立奏で綴り続けるピアニスト・リュミエールがいた。

手拍子は終曲に伴って、そのまま割れんばかりの拍手となっていくまでもリュミエールを称え続けた。

なお末筆に、その後重ねて繰り返されたカーテンコールの途中、ふと聴衆へ向けて送られたリュミエールの投げキスで、幾人かの紳士（！）淑女が失神した様は、伝説のヴィルトウオーソ・ピアニスト、フランツ・リストの再来を彷彿とさせたことを記して、ライナーノートの筆を置くことにする。

私の大切な友人へ、心からの友情と愛情を込めて。

オリヴィエ（俳優／モデル／デザイナー）≡

聴衆の熱狂的な拍手と歓声とに応えて幾度も惜しみなく繰り返されたカーテンコールが、ようやく本当に終回を告げたと見るや否や、オスカーはボックス席の扉から飛び出て全速力で駆け出した。

廊下を走り、関係者用出入口を抜け、楽屋の扉をノックもせず勢い込んで開く。

「リュミエール！」

長い髪のピアニストは高揚の名残りに頬を火照らせながら、ようやく燕尾服の上着を脱いで楽屋の長鏡台の上に置いたばかりで、驚きに振り返り深海色の瞳を軽く見開くその姿の、腰に両腕を回してオスカーが高く身体を抱き上げた。驚いたようにリュミエールが慌ててオスカーの両肩に手を置いてバランスを取る。思わずやつてしまった。抑え切れなかった。

「良かったな、大成功だ！ 流石だな！」

驚かせすぎてもと思い、その身体をすぐに下ろす。目の前にある頬に、一転して慎重な手付きでそつと片手を伸ばし、一度髪を梳いてから再びその頬に手を添えた。

「素晴らしい音色だった。感動したよ。本当に、心から。」

熱に潤む深海色の瞳を覗き込むようにして、オスカーが囁く。

自分のためにと言ってくれたその音色が、今日を限りに最後だと。自身のあるべき姿を強くしなやかに取り戻したリュミエールが、もはやこの先オスカーの手を必要としなくなり、オスカーの下を離

れてゆく、少くないその可能性に胸を締め付けられながら。

リュミエールは嬉しそうに、頬に触れるオスカーの片手を両手で微かに包み込み、綺麗に、この世界の貴石全てを詰め込んだような綺麗な微笑みをオスカーに向けた。

「貴方のお陰です。オスカー。」

「俺は何もしていない。全てはお前が、お前自身の力で成したことだ。」

「いいえ。」

リュミエールが目を伏せ、緩やかに首を振った。艶やかな髪が、リュミエールの頬に添えたオスカーの手の上を撫でる。

「貴方がいなければ、今日の私の音色は在り得ませんでした。」

そう言うと、リュミエールはゆっくりと目を閉じ、僅かに顔を俯かせて、首を傾け、その両手で包み込んだオスカーの片手に、ごく微かに唇を寄せた。

オスカーの手に感じる吐息とともに、目を閉じたままのリュミエールが囁く。

「貴方に出会い、奏でて、導かれて。自分ではどうしようもないほど、貴方に惹かれて、…貴方に、恋をして。」

貴方を忘れようとして、でも心の中から、貴方を失うことはできなくて。」

祈るように、懺悔するように、両手で包んだオスカーの掌へ顔を寄せ、リュミエールが言葉を続ける。目を薄く開き、小さく数度瞬いたリュミエールの両の睫毛がオスカーの指先を掠めた。

「貴方に力付けられて、貴方の強さを分け与えられて。」

一夜だけ、ただこの一夜だけ、貴方への想いを音に綴ることを赦してほしいと、…ただ、それだけを願って。」

言葉もなく立ち尽くすオスカーの気配に、リュミエールがゆっくりと顔を上げ、心の底から申し訳

なさげに微笑う。

「ごめんなさい。本当に。貴方の望まないことを聞かせてしまつて。

でも、…ごめんなさい。どうしても、」

そういうと再び俯き、目を閉じて、オスカーの掌に、その唇を再び微かに寄せて。

「どうしても、貴方に感謝を伝えなかった。」

オスカーの手に触れるリュミエールの両手の指先に、不意に力が籠もり、オスカーの掌にリュミエールが顔を埋め、声が震え揺れる。

「忘れてください。貴方の望まない、こんな私は忘れてください。楽しかったことだけ、貴方の記憶に、どうか留めておいてください。私も忘れるよう一生懸命努力します、貴方に忘れてもらえるように。」

ただ、本当に、…心から。貴方への、感謝を。それだけは。」

リュミエールがオスカーの掌から静かに顔を離してゆき、視線を上げた。

オスカーと視線を合わせ、その氷青色の瞳の色を、永遠に、目に焼き付けるようにして。

「心から。」

本当に、ありがとうございました。」

そう言つて微笑い、瞬いた深海色の瞳から、涙が零れた。

目を閉じ、これで本当に最後となった言葉を告げる。

「さよな」

瞬間、リュミエールは身体中が軋むほどの強さで抱き締められた。後頭部を大きな掌に包まれ、力強い腕に背を囲い込まれ、熱い身体に強く強く抱き寄せられて、リュミエールの涙の欠片がオスカーのシャツの襟元へ吸い込まれてゆく。

「好きだ。リュミエール。」

リュミエールの耳元を襲い、魂ごと奪い去っていくかのような、熱い吐息と荒れ狂う感情を伴う言葉。

「好きだ。これほど心を捧げたのは、お前だけだ。この想いがお前を歪めてしまうのが恐かった、だから言わなかった。自分の想いに囚われすぎて、お前の想いに気付けなかった。傷付けるつもりはなかった、本当にすまなかった。でももう、離すことはできない。絶対に、何があろうとも。たとえこの星が尽きようとも、この想いは永遠に。リュミエール、」

どれほど言葉を連ねても、到底言い足りなくて、ただひたすらにもどかしくて。どう言えば伝わるのかと、千の言葉を探して。

そうしてふと、思い至った。こういう事なのかと。

かちりとオスカーの心に嵌った、その言葉。

「愛してる。」

腕の中の、無二の存在に。その耳元で、低く低く、熱く囁いた。心の底から。その綺麗な心の、奥底まで届けと。

「……………」

腕の中、熱く火照る身体が一度大きく震えた気がし、抗う術もなく強く抱き寄せられオスカーの首元に寄せるその唇で、は、と、小さく息を吐いた気がした。

ふとその身体から、力が失われてゆき、するりとオスカーの腕から滑り落ちかけて、オスカーは慌ててすぐ近くの椅子へその身体を寄せ座らせる。

オスカーに与えられた猶予はそれきりで、それが全てで、それで最後だった。



楽屋の扉が盛大に叩き開かれ、火照り切った顔で朦朧として椅子に座るピアニストと傍らに立つオスカーとが扉の方を振り返って見遣る中、大興奮の複数の評議員と指揮者と、それまで在った室内の二人の雰囲気をつたひ独り悟つて遠い目をしたカティスと、その後から後からオーケストラ団員とその他の関係者とが一斉に楽屋の中へ押し寄せてくる。次々にピアニストを取り囲み、口々にその演奏を称え、肩を叩き、歓声を上げ、握手を求め、感極まつてハグしかけては他の関係者に力づくで止められる。

もはや事態の收拾が付かなくなりかけたところで、氣を利かせたのか評議員の一人が半ば無理矢理に解散を告げ、ピアニストの荷物を代わりに持つて人波を掻き分け、ブーイングがあちこちから数限りなく沸き起こる中、ピアニストに付き添い楽屋廊下を通り抜け、関係者エントランスから出てすぐのタクシーの中へとピアニストを乗り込ませ、ホテルへの帰路へと送り出した。

未だ止まぬ強い高揚感と大いなる落胆と、次に繰り越したまたの機会への期待感とを盛大に引き摺りながら、関係者の人波が時折再度歓声を上げつつ三々五々と少しずつ散つてゆく中、楽屋廊下の半ばに無言で独り立ち尽くしたままのオスカーの肩を、背後から歩み寄つたカティスがいささか大袈裟に数回叩いてから、その肩を強く掴んで前後に揺らした。

「言つておくが、そのまま街中を歩くんじゃないやねえぞ。タクシーにも乗るな。三、四人は殺してきたような面しやがつて。問答無用で一発で捕まんぞ。」

バーバヤガー（妖）も裸足で逃げ出す凶悪顔で——もともと裸足だそうだが——押し黙つたままのオスカーの、肩に載せた腕に体重を思い切り寄せ掛けて、カティスは盛大に溜息を吐いた。

「……ったく。大事なクライアントにあつという間に手え出しやがつて。」

「まだ何一つ出してない。冤罪だ。」

「出したも同然だろ、あんな顔させてんじゃない。とつくの昔に有罪（ギルティ）だつたの。」

最後に目にした、リュミエールの姿をオスカーは思い出す。

促され送り出されながら、オスカーの姿を求め、人波の中にその緋色の姿を探し当てて視線を投げ掛け、幾度も振り返る深海色の瞳が切なさを湛え、後ろ髪を引かれた様子で。

「連絡先の交換は？」

「……していない。」

「そこだけは真つ当だったようだな。」

クライアントに対する礼節上、手続きの上で必要な連絡は全て本来の担当弁護士であるカティスを通していたし、その枠の外での巡り合わせについては何もかもが想定外で。

もう一度溜息を吐き、オスカーの肩から手を離れたカティスが、わざとらしく自身のスマートフォンをスーツのポケットから取り出す。

どれだけオスカーが不本意であろうと、オスカーが今、リュミエールとの細い糸を繋ぎ直すには、カティスが互いの連絡先を仲介するより外ほかにない。

「その顔で睨にらむなっつってんだろ。」

オスカーの『わかっているんだろ？』という睨め殺さんばかりの無言の視線に、横目で返して文句を言い、目線を手元に落としてカティスがスマートフォンを操作する。

「お前の携帯電話番号をリュミエールに知らせる、その後どうするかは全てリュミエール次第だ。それでいいな。」

「……助かる。」

辛うじてオスカーが礼を告げた。自分の連絡先さえ先方に渡れば、きっとリュミエールから連絡があると信じている。

カティスは顔を上げ、心底苦々しげに言葉を続けた。

「ただし明日の朝に、だ。リュミエールを休ませて、一晚ゆっくり考えさせろ。よくよく考えるのはお前の方もだ、オスカー。」

今晩中にリュミエールにもそれは伝えておくし、俺は今晚のうちに思い付く限りの貴様への罵詈雑言をリュミエールに送っておく。」

一瞬本当にこの場で手に掛けてやろうかとも思ったが、カティスなりにリュミエールを心配してのことだとはありありと判るが故に、オスカーは無言でその条件を飲んだ。

「あいつを不幸にしたら許さんからな。」

カティスの言葉に、一体どこの親父の台詞だ、とオスカーは思う。

「舐めんな。何度言わせる。」

あの存在から望まれるのであれば、この身の全てを尽くして、あらゆる不可能を可能にしても必ず幸せにすると。そしてその存在がこれから先、世界中で至福の音色を綴り、人々へと幸福を届けようと願う行いのを、誰よりも側で見守り、いつ何時であろうとも力付けると。そのことに何の躊躇いも過不足も、オスカーにはあろうはずもなかった。

「ああ、そうだ。ひとつだけ答え合わせを教えておいてやる。ディナーの時、お前の女癖の悪さは散々リュミエールに話した。」

リュミエールには謝るが、てめえは単なる自業自得だ。」

…まず最初に自分に殺されるべきはカティスで間違いない、と、オスカーはその時に固く確信した。

朝の身支度を整えてチェックアウトの準備を全て終え、ベッドの端に一応は腰掛けるものの、気もそぞろに落ち着かずリュミエールがそれを待っていれば、さほど間を措かず待望の連絡項目がカティスからリュミエールのスマートフォンへ送られてきた。慌てて縫もれそうになる手で、すぐに記載され

た番号へ通話を入れる。

どうしよう、その姿を目にしたら、人で溢れかえるロビーの真つ只中でも思わず飛び付いてしまいうるようになるかもしれない、などと独りで頬の熱さを感じつつ、気が逸りながら通話の応答にリュミエールが心臓を跳ねさせれば、切望した低い声は静かに、チェックアウトはもうできるか、ロビーの外まで来れるか、と問う。

すぐに部屋を出て階下に降り、フロントでチェックアウトの手続きをしてスーツケースのキャリーを引きながらホテルの扉の外へと出れば、車寄せのエントランスキャノピーの下、シボレーの運転席のドアのすぐ横で無表情で仁王立ちするオスカーがいて、リュミエールは昨日のカティスからの幾つかのメッセージの内にあつた「殺人犯みてえな」という言葉を少しだけ理解した気がした。今日はスーツでない、軽めのシャツ仕立てだというのに、その立ち姿だけでちよつとだけマフィアっぽいなど思ってしまった。リュミエールに歩み寄つてスーツケースをさり気なく取り上げ、トランクへと仕舞うオスカーは、リュミエールからの熱烈なハグの一回分を失したことを知らない。

助手席のドアをオスカーがごく自然に開けてリュミエールを迎え入れ、ドアを閉じたオスカーが回り込んで運転席へと座る。

「マンハッタンで行きたいところはあるか。」

「いえ、特には。」

「じゃあ、空港の方に向かっていくのでいいか。JFK?」

「はい。」

車を発進させる加速度にと無意識に備えたリュミエールは、その前、ふ、と、横合いから柔らかに片手を取られた感触に、オスカーの方を向いた。

リュミエールの片手を緩やかにその片手で取ったまま、あの氷青色の瞳が、僅かに細められ切なげ

に揺らいで自分の方を見ていて、リュミエールはどきりと大きく胸を跳ねさせた。その瞳が、まさかそんな表情で自分に向けられるとは思ってもいなかった。いつだって自信に満ちていて、誰の手も必要としないかのように思えた、あのオスカーが。

ほんの微かにオスカーが指先に力を込め、リュミエールの指先を囲った。一瞬躊躇つてからリュミエールも同じように少しだけ力を入れてその指先に応えたら、オスカーはようやく薄い笑みをリュミエールへと投げ掛け、手を離して車を発進させた。

「カティスの奴が昨晚の間に、またとんでもないことをお前に話していないだろうな。」

慣れたスムーズな操作で運転しながら、オスカーがリュミエールへ探りを入れる。根も葉もないこと、あることないこと、と言えないのが辛い。自業自得の意味が身に染みる。

リュミエールは助手席で小さく笑い、オスカーの方へと少し首を傾げて微笑み掛けた。

「随分と心配していただいたみたいです。貴方のことも、ですよ。オスカー。」

あれだけ昨晚自分に悪態を吐いていたあの金髪野郎のどこがだ、と反射的にオスカーが思う。

「ディナーの時の話題の迂闊を詫びられてしまつて。これまでとは全く様子が違う、信じてやつてくれと。」

……本気の恋、…には、きっと不器用だから。至らないところもあるかもしれないが、よろしく頼むと。」

「……………」

オスカーから目を逸らし俯いて、目元を赤く染める綺麗な表情を堪らなく愛おしく思いながら、自分の知らないところでカティスに勝手に兄貴顔されているのが心底複雑だ、とオスカーは思った。親父だの兄貴だのと忙しいことだ、あいつも。

リュミエールの許可を得て、ジョン・F・ケネディ国際空港から20分ほどの距離にあるフォートテ

イルデンビーチに向かう。

「オスカー」

駐車場で車から降り、すぐにリュミエールと手を繋いで大西洋を望む砂浜の方へと歩き出したオスカーへ、リュミエールはやや慌てながら呼び掛けた。リュミエールの手を軽く引つ張るようにして背中を見せていたオスカーが、リュミエールを振り返る。

「……離したくない。」

繋ぐ手にふと力が籠もり、あの細めた氷青色の瞳で、オスカーがリュミエールに告げた。

「…お前が同じように、願ってくれるのなら。」

「……………」

リュミエールがオスカーを見上げ返した。

あまりに慣れていなさすぎて、恥ずかしいどころの話ではなかったけれど、彼と同じように自分も願っているのか、そうでないのかと問われれば。

言葉に表しては返せず、赤らむ目元を伏せて、ただ繋がれた手を僅かに握り返して応えれば、オスカーは軽く唇と気配とだけで笑って、繋いだ手を離さず、ようやくリュミエールと歩調を合わせて左右に並ぶ形で再び歩き始めた。オスカーがそつと指先を滑らせ、指を絡め合わせて組めば、リュミエールの手が躊躇いがちに応じる。

ビーチはニューヨーク市内とは思えないほど閑静で、大西洋に向かって大きく開けており、海水浴シーズンも過ぎたために程よく距離を置いて人々が散策し、思い思いに自然を楽しんでいる。

活気に溢れたマンハッタンの高層ビル街が嫌いなわけではなかったが、久しぶりの長閑な空気と高く遙かに広がる空とはやはり格別で、リュミエールは見渡す限りの空を見上げ、寄せては返す波の音に緩やかに心を解いていった。

歩みを止め、手は繋いだまま、どちらからともなくオスカーと目を見合わせる。

「考えてくれたか？」

繋いだ手が少しだけ握り締められ、僅かな緊張を隠し切れないオスカーの声がリュミエールに問うた。

「俺の気持ちは変わらない。好きだ、リュミエール。」

誰よりも近くに、お前の傍にいたい。その微笑みを一番に向けられるのは俺でありたいし、その微笑みを護るのはいつだって俺でありたい。

お前の音色を一番に受け取って。お前を導いて。どこまでも高みへと。

……お前に恋を教えるのは、俺でありたい。絶対に、他の誰にも譲らない。」

氷青色の瞳に縫い留められたまま、オスカーの言葉を全て受け取ると、リュミエールは痺れる思考に目を閉じた。

カティスに促されて、一晩考えた。どこまでも考え尽くした。

ロサンゼルスとパリの遠距離。そもそも同性で。立場だって全く違う、弁護士とピアニスト。オスカーはきつとこれからも、数多くの魅力的な女性に囲まれ続けて。カティスはあ言ったが、自分だけは例外、などとリュミエールがいつまでも自惚れ続けていられるほど、綺麗事では済まないことなど痛いほどわかっている。この先の困難など、ないところを見出す方が難しかった。

まずは友人から。ゆっくり時間を掛けてからでも。そんな建前だっていくらでも用意できた。けれども。

オスカーに心を捧げられて、痛んで軋み、歓喜に震えて涙が零れそうになるこの心を、偽ることはどうしてもできなかった。

「……嬉しいです。とても。」

目を開き、潤んだ深海色の瞳でオスカーを見上げ、繋いだ手に力を込める。

「好きです。オスカー。」

すぐに遠く離れて、これから先、貴方にとっても大変な思いをさせるかもしれないけれど。もし、許してもらえるのなら。

貴方の特別に、してください。私を。」

眩暈を覚えたかのようなオスカーが大きく息を吐き、リュミエールを両腕で抱き締めた。オスカーの腕の中、リュミエールが恋人として初めてその身で受け取る身体の暖かさと心の切なさは、意識が飛びそうになるほど気持ちがいい。

オスカーが愛情を頭に、ようやく隠す必要もなく、その手でリュミエールの髪を撫でて梳き、強く抱き締め、リュミエールの頭に頬を擦り寄せ、リュミエールの頬を指先で撫で、目元の髪を梳き流し、目を見合わせて、背を抱き寄せ、額を寄せ合わせ、リュミエールの頬に手を添えて。

それから、躊躇った。

それが何なのか、ようやく今日この時になって、リュミエールは初めて理解することができた。求める思い。

それはオスカーだけでなく、自分も。

「……いい？」

目を細め、微かな声でオスカーが問うた。やつぱり、とても優しい、とリュミエールは思った。少し緊張して、答える囁き声が掠れる。

「…教えてください。貴方に、教えてほしい。」

目を閉じれば、言葉よりももっと優しい、触れるだけのキスが唇に重ねられて。互いの暖かさがゆっくりと交わった頃に唇が離れ、感極まったようなその腕の中にもう一度強く埋



められた。

「これで、お前の特別で。俺の特別だ。」

火照って再び脱力しかける腕の中の身体に、限らない愛おしさを覚えながら、オスカーの視界にJFK空港から飛び立つ航空機の姿が見えた。

大丈夫。何があっても。

こうやって二人、同じ時に、同じ星の上に在るのだから。

実はニューヨークからパリへの航空便は、びつくりするほど午前発の便がなく、こたつと尽くが夕方以降の出発便だった。

「18時30分発のエールフランスです。」

「やっぱり。」

いくら時差が6時間、フライトが7時間半の13時間半を要するとしても、7時発の20時半着、とか、1便か2便くらいあってもいいだろうに。そんなにシャルル・ド・ゴール空港の職員は夜間働きたくないのか。24時間営業なのに。フランス人か。多分フランス人多め。

気付いていたオスカーは出発までのその貴重な一日をどうしようかと前日から考えていたが、リュミエールの希望がなければ摩天楼の砂漠はとつとと抜け、自然が好きそうなりユミエールのためにと考えて、——それからこの次、二人ともが移動してニューヨークで会える機会がどれだけ先になるかが、見当も付かないであろうことを考えて——ロングアイランドの、自分が生まれ育った地元の周辺を紹介しながらゆつくりしたいと思った。マンハッタンの中心地よりは緑も豊かだ。

車で再び移動して連れて行ったリュミエールは、オスカーが想像した以上に喜び、オスカーの卒業した高校ハイスクールなども目を細めて興味深そうに、オスカーの思い出話を聴きながら嬉しそうに眺めていた。

他意は本当に、全くなかったのだが、昼時が近付いて、ふと。

「良かったら、俺の実家に寄ってくれないか？ 今日とは両親とも家にいると思う。いやもちろん、友人として紹介するが。もしお前に抵抗がなければ、きちんと恋人として紹介して……ああうん、じゃあ、友人として。いいか？ 良かった。俺もこっちに來ている間に、一応親の顔を見ておきたいし。」

(※前日のコンサートは土曜夜19時開始で、この日は日曜日。)

そういう段取りになるはずだったのだが、玄関を開けたオスカーの母は、オスカーの顔を見て、リユミエールの顔を見るなり。

「こんにちは、まーなんて綺麗な子。お名前は？ リユミエールさん？ 初めまして、よろしくね。あなたのいい人？ オスカー。」

「……………今日から。」

見た目で男性だと判るにも拘らず、母親の心底恐ろしい洞察力に、オスカーは咄嗟に嘘を吐くこともできず。

「今日から？ 突然親に挨拶なんて、驚かせたんじゃやないの？ ごめんなさいねえ気が利かない子で。女の子たちにどうでもいい気遣いは振り撒く癖に、肝心のところで駄目だったりするのよねえ。あ、そう、フランスにお住まいなの？ 今日の便で？ 帰る前にここに？ まーすぐく嬉しいわ、それで会いに来てくださったのね。直接お会いできて良かったわあ、ゆつくりしていつてね。それにしてもオスカー、中学校エレメンタリーの時も高校ハイスクールの時も付き合ってる人を誰一人親に紹介しないで、プロムの相手すら家では話題にしなかったし、その後だって当然のように誰一人会わせに來なかったあなたが、まーほんとに、心底惚れる人がようやくできたのねえ。もうほんとにねえリユミエールさん、この子のそういう話ってお耳に入ってるかしら？ あ、それはもう知ってるってお顔ね。本当にねえ、この子ったからそういう方面ではもう本当にどうしようもない子で、けどあなたっていう方かたができたから。これか

らはきつと素行を改めると思うから、どうか見捨てないでやってちょうだいね。ほらあれ、見てやってごらんない、あなたに見放されたら生きていけないっていう顔よ、あれは。本当にどうぞよろしくねえ。」

リュミエールは顔を真っ赤にしてあわあわしながら、こちらこそどうぞよろしくお願いいたします、と言ひ、なぜオスカーの母がそれほどまで慣れているのかとリュミエールが後から不思議に思ったレベルで、ごく自然に *Bisous* を交わしていた。左右の頬を交互にくつつけて口でキス音を作るあれ。

心底驚かされたことに対し、オスカーは後で、リュミエールからほんのちよつぴりだけ恨み言を言われた。

フランスの夏時間は10月の最終日曜日の未明に元に戻り、アメリカ合衆国のそれは11月の第1日曜日未明に戻るため、普段9時間のパリとロサンゼルスの時差は、その間の1週間だけ8時間に縮む。スマートフォンの世界時計のアプリを眺め、2つの時計が指し示す時間を、リュミエールが小さく微笑って見下ろす。

どことなく少しだけ距離が縮まったような、リュミエールの心を少しだけ浮き立たせるそれは。

「……………」

リュミエールの朝活、オスカーの夜活には微妙に逆効果だった。普段リュミエールの朝6時、オスカーの21時に通話の待ち合わせをしても、この期間だけはリュミエールの朝6時、オスカーの22時になってしまう。ちなみに普段のオスカーの朝6時はリュミエールの昼15時相当で、実質的にオス

カーの朝活の時間帯に通話等はできない。  
何となく釈然としない思いを抱えるリュミエールだった。

S  
o  
n  
a  
r  
e

(  
1.5  
)

新月の無明の闇夜、室内の灯りは無骨な小型の洋燈の一基のみ。

薔薇の取り囲む離れの邸から、余人は遠く下げられて。

じくじくとして夜に纏い揺蕩う、濃く重い湿度は、任を果てて去る者への惜別の涙に等しく。

いつ何時であろうと艶やかに、その背を皓々と明るく彩ってきた長い髪は、この時にあつて薄暗いベッドの上で、無造作に散り、その表面を覆い溢れ。至上の美貌に浮かべる柔らかな微笑は、暖かな深海色の瞳とともに、今は固く、蒼白の面おもての内に閉ざされている。

俯うつぶせて深く敷布に沈んだまま、もはや僅かの身動きすらできない一糸纏わぬ身体は、その滑らかな肌の幾筋もの傷から血を流し、あるいは目に見えない呵責に塗れて。あらゆる種類の痛みに飽和し切つてから、優に数刻は経過して久しかったが、それでも針で刺されたような小さな刺激にじわりとした悪寒を感じたのは、実際に注射針をその身に刺し入れられたからなのだと気付き、身体を跳ね起こした。

……跳ね起こそうとした、その動きは一寸も動かないほどに固く、片腕を掴んだままの鋼のような腕と、裸の背を強く押さえ付ける片膝とに遮られて。

するりと上腕の紐を解かれ、それが単なるいつもの幾度となく繰り返されたただの拘束ではなく、駆血帯の代わりだったのだと否応なしに気付かされ、心の底から震え上がった。もう一度、力の限りに身を持ち上げて手を振り払えば、もはや捕縛する気の失せたらしい大きな掌から白い手首が解き放

たれ、シリンジの薬液の、疾く<sup>と</sup>に空<sup>か</sup>に成り果てた注射器が低く宙を舞い、床に落ちて軽々しい音を立てた。手首の接種痕から赤黒い静脈血が数滴、辺りに飛び散り、薄暗く照らされたシーツの上に、闇夜にも目を惹く濃紅の染みを描く。

体内に投与された薬物は絶対に再び回収できないのだと、常にその覚悟をもつてくれぐれも万全の確認の下に行うようにと、そう繰り返し教えられてきて、

いや、否、そうではない。それは「今」の記憶で。

……「今」、とは？

「一体……」

こういう機会にはとうの昔に珍しくもなくなった、掠れ切った声で、未だ嘗て一度も発したことなかった疑問を口走った。落ち掛かる瞼の、つい先程までの泥のような気怠さも忘れ、見開いた深海色の瞳で幾重の睫毛の奥から視線を投げ掛ければ、昏い光を湛える氷青色の瞳の視線と交差する。

目に見える形での凌辱ならば、どんな類のものだろうと、いちいち説明などを求めはしない。これまでの全てで、いつだって、ずっと、何であろうと、そうだった。

目に見えないその何を投与されたのかと、だから今回は、冷え切った身体<sup>ミ</sup>の芯から青褪めて問う。「バルビツール酸系とインドール核アミドの合剤、だったかな。最終的に神経抑制薬と神経賦活薬とを混合するとは、王立研究院にも恐れ入るものだ。」

まあ俺も、こんな程度で済ませるつもりかと何度も相当に糾弾したがな、と、氷青色の瞳を無邪気な子供のように、心から楽しげに笑みに染めて彼が言う。

その構造式には、もちろん聞き覚えがあつて。

「つまり、」

「自白剤。」



白い身体が行動に出るより何瞬も早く、筋張った片手が、鋭い闇の翳を引いた槍の穂先のようにその口の中へと無造作に突っ込まれ、そのまま再びベッドの上へと顔を押し付けられ組み伏せられた。無骨な指が口内の舌を掴み、喉の奥を押し潰して、幾度も繰り返し苦しいほどに噎せ返る。

舌を噛み切ったくらいで死ねはしないと、せいぜい派手に出血する程度だと、これも雑談のように物の合間に教えられて。いや、違う。今は「今」ではなく。

そうする間にも体内を巡った薬効は過たず發揮され、見る間に心拍数が跳ね上がり、酷い眩暈がし、一瞬にして汗が吹き出し、身体がひとりでに震え。そして何よりも、脳内が耐え難いほどに加熱され、向精神薬の紛れもない作用をまざまざと認識させられる。

「…っ、や……いや、はな……てっ……!!」

やめて。やめて、他にどれだけ、何を傷付けられても構わないから。どうか、どうかそれだけは。中途半端に塞がれた口の、彼の掌の下、身を振り、くぐもった声で力の限りに叫べば。

「あんまり悦い声で鳴くな、また抱き潰したくなるだろう。」

彼は喉の奥で声を立てて笑い、拘束していた口内からその片手を抜いて、代わりに深々と唇と舌とを絡め合わせてきた。

その感触は認識することができない。何故なら自分はつい「この間」、触れるだけのキスをようやく、ようやくそれだけを知ったばかりで。だからこんな、何もかもを暴き立てるような深いキスの感触など知る訳がない。それなのに。

感触は認識できないのに、その生々しさだけは意識の全てを塗り潰すかのようで。

「…お前が言ったんじゃないか。殺してくれと。只人になるのだからと。」

どうせ殺されるのなら、その前の自白のひとつやふたつ、大したことないだろう？」

唇を離し、相手の意識に塗り込めるように小さく呟きつつ、その指先が未だ血の滲む乳頭を片手で

捻り上げた。そこも繰り返し、彼の用意したアクセサリーを幾度も突き立てられた場所。違う。真実の告白、それは死ぬよりも辛いこと。

薄れて己の制御下から失われつつある自我が、言葉もなくそう叫ぶが、そんな程度のことなど、彼は百も承知なのだろう。

再び唇が深く、深く重ねられ。

「…今まで散々、俺からあらゆる手段で、その身体の隅々まで傷付けられておいて、今更。なあ？」  
長々と犯されたキスがようやく離れ、濡れた唇でそう囁かれる頃には、薬効で開き切った瞳孔は黒々と、深淵の宇宙の色をしていて、緩く伏せた深海色の瞳は既に逆らう意志を持たず、目の前の、緋色の髪と氷青色の瞳の持ち主の表面を、緩やかに彷徨い。

吐息は途切れ途切れに、小さく呼吸と吸気とを繰り返している。

「とりあえず座れよ。ゆっくり話そうじゃないか、折角の最後の機会なんだから。水の守護聖殿。…じきに『元』になるか。それとも『故』か？」

「……………」

ベッドの上で起き上がり、軽い笑い混じりの炎の守護聖の言葉でそう言われて促されれば、細い身体は後を追って、ごく緩慢に身を起こし、炎の守護聖に向かい合って、ゆるりと顔を伏せたまま。肩口から落ち掛かるとろりと長い髪は、僅かに揺れる身体の動きに合わせて流れ落ち、揺らめき、一時も留まることのない水の流れのように。

「…ったく。」

炎の守護聖は呆れたように呟くと、細い顎を捉えて上向かせ、淡く色付く唇へ、再び深く口付けた。  
「……何度犯そうが、どれだけ手酷く痛め付けようが、相も変わらず、最初からずっと。どこまでも、ただひたすらに綺麗だな。……切りがない。」

唇を離し、顎に手を添えたまま、氷青色の瞳が深海色の瞳の奥を覗き込む。

「なあ、どんな想いだった？」

対の力の性質、だなんて、何も知らない傍からは言われ続けながら。一番嫌悪する俺に、無理矢理組み敷かれて、犯されて。叫び声を、喘ぎ声を上げさせられて。時には血を流して。何回も。ずっと、これまで幾度も。」

水の守護聖の端正な唇は、薄らと開かれたまま、未だ何の言葉をも綴らず。

緩やかに視線は合い続け、その姿はとうの昔に薬物の影響下に深く置かれているというのに、答えろと言うまでは答えない、それがこの、しなやかに強く美しい人の魂を象徴しているようで、その有り様が酷く好ましいと。炎の守護聖はそう思った。

「……嬉しいよ。ようやく、お前のその口で。嫌いだと、ずっと嫌いだったと、心の底から憎んでいると。ようやくそう言ってもらえるんだからな。」

深海色の瞳は、炎の守護聖の言葉に揺蕩うように、黒く深く開いた瞳孔と、緩く見上げる臉を縁取る幾重もの睫毛の翳の奥から、オスカーを見詰め続け。

今日これまで、一度も薬物など用いたことなどなかった。いつだってその深海色の瞳は正気で、むしろあえてどこまでも正気を保たせたまま、幾度もオスカーに凌辱され、支配され、屈服させられ、血を流して、叫ばされ。正気の瞳は、決して心折れることなく氷青色の瞳を睨め返して。

それでもその端麗な唇は、これまでの気の遠くなるような年月、何の感情をも、ただの一言すらも綴らずに。

「そんなに嫌だったか？ たとえ俺のような屑が相手でも、お優しい水の守護聖様は、誰かを相手に呪詛の言葉を吐くのが、そんなに。」

炎の守護聖は、片手を伸ばしてサイドテーブルの上の琥珀色の液体を湛えたクリスタルグラスを手

に取ると、水の佳人の力なく揺れる肩を引き寄せ、頬に手を回して、その唇にもう一度、触れるだけのキスをした。

「……リュミエール。」

額を合わせ、髪を擦り寄せて、万感の想いを込め、その存在に呼び掛ける。

「随分、待ったよ。だから、聞かせてくれ。お前の本心を。」

望まぬ関係を強制された幾星霜もの永い永い年月の、その手で殺されることでしか結末付けられないまでに至った、果てのない憎しみを。

「……そんなに。待ち望んでいたのですか。……嬉しいです。私も、とても。」

腕の中で、楽しげにくつくつと喉を鳴らし、小さく笑う快い音律。

「……なら、お望み通りに。」

自分の腕の中に凭れ、恋人の耳打ちのように囁く甘い声を聞きながら、炎の守護聖はグラスの中のストレートの酒をゆつくりと長く、口にした。濃い酒精が喉を焼き、これからすぐにも同じように、水の守護聖からの幾万の怨言がようやく自分を責め苛んでくれる、この瞬間を心から祝う。

「愛しています。オスカー。……出会ったその初めから、今まで。ただの一瞬も、絶えることなく。」

がちりと歯がグラスを噛み締める鈍い音が辺りに響き、ゆるりとその顔を見上げたリュミエールが、氣遣わしげにゆつくりと手を伸ばす。

「……貴方なら、本当に噛み砕きかねないし、どれだけ厚いグラスでも、その力強い掌で、握り砕きかねない。……危ないですよ。」

意のままに動かせない拙い手付きと、それ以上に力を失った手とが無様にぶつかり合い、グラスがオスカーの口元から滑り落ち、ベッドの上に転がって、闇夜の昏がりへと溶け込む染みがじわりと広がった。

「……嘘、だ。」

視界の明滅するような絶望とともに、炎の守護聖が呟けば、

「…嘘、なんて。…吐けるものなら、吐きたかったですけれど。私も。」

その腕の中で、緩やかにくすくすと、小さな微笑いが応えて続く。

「……………」

強張った頬の表面を一滴、滴り落ちる雫の、その源<sup>みなもと</sup>の方<sup>ほう</sup>を見上げ、水の守護聖の細い指がその涙の筋を、音色を奏でるように静かに辿った。

「……気付かないと、お思いでしたか。」

夢現とした瞳のまま、滑らかな頬を炎の守護聖の首筋に擦り寄せ、長い髪が炎の守護聖の顎を擦り、胸元へと流れ落ち、薄い灯りを弾いて光を帯びる。

「…第256代の御代に至って、…この上なく、暖かく、穏やかで、安定した治世にあつて。

創造と、…破壊とを司る、その身の内の、炎のサクリアに。ただの一瞬も、気を失うことすら許されず、…苛まれ続ける、貴方のその、耐え難い衝動を。

…ただ、その片手を上げ、振り下ろすだけで、宇宙を<sup>こゝろ</sup>尽く、いとも容易く灰燼と帰すことさえ、可能なのに。…その貴方の力の、…息の詰まるほどに、何処へも行き場のない、…衝動を。

…貴方の対たる、私が気が付かなかったとでも、お思いでしたか。」

宇宙の大移動が果たされ、良かったと、宇宙は救われたと、本当に良かったと、齎<sup>もたら</sup>された平穩に誰も彼もが口にして疑わない中。

その自信に満ちた強さで、暖かくこの上なく安定した宇宙へと使命たる熱さを与え続けながら、その炎のどうしようもなく否定し難いもう一側面である破壊の衝動を、どこにも振り下ろせず、どこへも向けられず、次第に狂気を湛えていく氷青色の瞳の奥底を。

以前のあの昏い世界とは打って変わって、明るく、弾むような歓喜に満ちた宇宙の中、氣遣わしげにその姿へ視線を遣れば、自分に対してだけは苛烈さを増してゆくその氷青色の視線を、睨め殺さんばかりに返されて。

だからその衝動の<sup>いふく</sup>尽く全てが、自分を徹底的に凌辱し屈服させることに全身全霊で向けられたのだと理解したあの日。その破滅的な衝動が、美しいこの宇宙へと揮<sup>ふる</sup>われずに済んだことに、本当に、心の底から安堵して。

そして身体を引き摺り私邸に帰って後、二度と、もう二度と、彼と優しい愛情などを紡ぐ機会が、この生の運命の限りにおいては永遠に絶たれたのだと。そう悟り、ただ一度だけ、身体を力の限りに震わせて泣いた。

彼の行為の発する理由がそうであるのなら、己の成すことは、可能な限り彼に抵抗し、決して身を屈せず、その腕に、瞳に抗って、彼の破壊衝動をその場で、できる限りに全てを徹底的に引き出し切つて。それに全力を尽くすより、いつであろうと、他に何一つ道はなかった。

「……嘘、に、しても。いいですよ。…守護聖など相手に、こんな薬<sup>もの</sup>を使うのは、初めてでしょう、…から。」

只人と作用が違っていても許されるのだと、そう示唆をすれば、

「初めてではない。……自分で使った。」

浅はかな言い逃れは、とうの昔に退路を絶たれていて。

「泣き喚いたよ。……お前を、愛していると。」

膝を付いて、頭を垂れて、この身を投げ出して、…お前に詫びるのだと。」

同じこの部屋。薬の作用が切れるまで決して開かないように自ら細工した、扉は再び開くまでのさやかな時間の間で、己の拳の血に塗れ切った。

「……私は。決して、言うつもりも応えるつもりも、……ありませんでした。」

詠うように言葉を紡ぎ、仄かに明るく、闇夜に灯を燈すように綺麗な深海色の瞳が瞬けば、微笑みを形作る目元から、瞳と同じ色をした涙が溢れた。

濡れた睫毛の縁取る瞬きに合わせ、ひとつ、またひとつと。

「……愛しています、だなんて、生温いことを、……たとえ私が一言でも、……口にしていたなら……」

覚束ない手付きは、今この時にあつて、炎の守護聖の背に、その全身で愛おしむように、精一杯に回されて。

「……貴方は、大事に、この上なく大事に、私を愛して、愛し抜いて……、

……その行き場を失くした炎で、……とつくの昔に、貴方自身を、……焼き尽くしたでしょうから……」

数限りなく降り落ちてくる炎の守護聖の涙の中、ともに涙に濡れた深海色の瞳が微笑みを湛える。

炎の守護聖の両腕が、力の限りに水の守護聖の身体を抱き締め、その背が砕けんばかりに軋み音を立てた。

「……な、……こんなつ……！……これほどに愛して、愛されて、ただそれだけで良かったのに……っ……」

嗚咽を隠すこともなく、白い首筋に顔を埋めて。

「それすら許さぬ、こんな運命をその内に抱える、こんな宇宙などに……！……何の、存在する意味など……！！」

激しい慟哭とともに、身体に刻み込まれるようにして叫ぶ、その言葉を綴る唇に、そつと手を伸ばし。

「この間、初めてその存在から教えてもらった、触れるだけの優しいキスを捧げた。

「……私は、愛しましたよ。この宇宙を。」

その内に、…こんな愚かな関係しか築けなかった、…私たちの、存在と。

…：それでも、この果てしない時間と空間の中、貴方に出会えた、奇跡のような、…この、運命を。貴方ごと、何もかもを、愛しました。…全て。」

炎の守護聖の鳴咽は、もはや留めようもなく、いつまでも響き続けて。

「…だから、お願い、です。…殺してください。」

任を果て、…貴方の手の届かない世界で、…のうのと生きている私がいて。…：それで貴方が、正気でいられるなんて、思っていないませんから。少しも。

…だから、貴方の、その手で。殺してください。私を。」

炎の守護聖は徐<sup>おもむろ</sup>に、片腕で強く強く水の守護聖の体を抱き寄せ、もう片手で、ベッドサイドの大剣を鞘から抜いた。

「……判った。」

その言葉は、今はもはや静かに、どこまでも風いで。

左手側に水の守護聖の身体を収め、右手は剣の刃を直接手にし、その掌を傷付けた刃に血が滴る。一直線に重なり合う左胸と左胸の、リュミエールのその背後に、剣の切っ先が当てられて。

水の守護聖は、薬効が少しずつ切れて明晰になりつつある思考の片隅で、その睫毛に涙の欠片を残したまま、ふと、微笑った。

こんな時に至ってさえも。

互いに、相手だけは生き延びるようにと。相手のその一瞬の隙を、互いに見計らっている。

剣が貫いた感触は、自分のものだったのか、相手のものだったのか——



「……………」

リュミエールは目覚めて。

ベッドから天を見上げたまま、嗚咽を止められなかった。

大丈夫。ここはパリ。今は穏やかな秋で。

あの人はロサンゼルスにいて。弁護士をされていて。

本当に良かった、と、心の底から安堵した。

あんな苛烈な運命をあの人に背負わせることがなくて、本当に良かったと。

目覚めた瞬間に、あれほど鮮明に自分たちの存在をずたずたに切り刻んだ事の詳細は、その大半が雲消霧散し、もはやいかなる事情がそこにあったのかを辿り直すことすら困難ではあったが。

宇宙をも巻き込むあの果てのない悲嘆と絶望とは、今この時も、息の詰まるような生々しさに胸に迫り続けて。

自分があの人の、対の半身であるのなら、それはとても嬉しいと思うけれども。

それがあの人にあんな過酷な運命を背負わせるのなら、自分などこの世にいらなくても良いと。ただあの人がこの世界で、自分の存在など意識にも上せず、たとえ彼一人でも、ただ幸せに生きてくれればそれで良いと。

心の底からそう願った。

ベッドの上で、涙の止まらないままのリュミエールの真横、WhatsAppのビデオ通話の着信音が鳴り続けている。

いつもであれば同じ朝6時、自分は既に目覚めてピアノの前で、9時間の時差の夜21時のロサンゼルスで、眠る前の時間帯のオスカーと顔を合わせ、話をするのが常で。

リュミエールは手を伸ばして着信の拒否ボタンを押し、すぐにオスカーへテキストチャットを送った。

『オスカー、』

『どうした』

応えは間を空けず、すぐに戻ってくる。

『ごめんなさい。ちよつと、恐い夢を見て。まだベッドにいて。』

『通話したい』

『多分、酷い顔をしてて。声も。ごめんなさい』

『リュミエール』

アルファベットの文字列で綴られるメッセージは、リュミエールの脳裏で、過たずあの低い声で再生される。

『愛してる。会いたい。』

短く端的な口調であつても、それはどこまでも、決して強要ではなく。

リュミエールはしばらく逡巡し、ベッドに横向きに横たわった姿勢のまま、ビデオ通話の準備画面でせいぜい可能な限り顔色を整えてから、通話のボタンを押す。

待つほどの時間もなくオスカーの顔が画面に映し出されて、それだけでリュミエールは再び、整えた意味もあつという間に意味を成さなくなる嗚咽に塗れた。

「リュミエール」

「……よ、かつた。…貴方に、何事もなくて。……本当に…。」

手と腕で顔を覆い、次から次へと溢れる涙を必死で拭う。

この人に、あんな苛烈な業を負わせずに済んで、本当に良かったと。

「……俺もベッドで横になるから。ちよつと待ってて。」

リュミエールは無言で頷き、必死で涙を抑えようとすれば、

「好きなだけ泣いて。本当は、今すぐ飛んでいって抱き締めたいんだが。せめて、俺の前でだけは、好きなだけ。」

そう言われて、ますます涙が止まらなくなる。

しばらく嗚咽を小さく上げて泣き続け、ようやくにして目を開いて画面に目を向ければ、同じく画面の向こうで肘を立ててベッドに横たわり、こちらを心配げに、だが優しく覗き込む氷青色の瞳がある。

「可哀想に。そこまでお前を泣かせた俺は、どこの不届き者の俺だ？」

そう言つてこちらに片手が伸びたかと思うと、向こうのスマートフォンがオスカーの身体の方へと引き寄せられる。

「…どちらかといえば。私が、貴方を、泣かせた側だった気がします。」

「嬉し涙なら、いつでも流す準備はできているが。そうでなければ想像するのも恐ろしいな。相手がお前だからこそ。」

夜の灯りを広い身体が遮ってやや薄暗い、向こう側のフロントカメラに軽くキスが降った気配がした。

「今すぐ抱き締めてやりたいよ。リュミエール。」

リュミエールは涙に濡れたまま、微笑って、オスカーと同じようにスマートフォンを手に取り、胸元に引き寄せる。

「今は、私も。貴方に抱き締められるよりは、貴方を抱き締めた、気分です。」

「それは困った。どっちを優先させればいい？」

リュミエールはようやく、その時になってようやく、心からの微笑みをオスカーに返すことができた。

「ちよつとリュミエール、痛い痛い痛い。痛いんだけど。」

呼び掛けられ、無意識に綴り続けた鍵盤からふと、力が抜け、音圧が柔らかなそれに戻る。

「……すみません、オリヴィエ。セイランも。」

話しながら綴り続ける曲の、意識的にメロディを暖かく柔らかなものと切り替えて。

「まあ、確かに胸を引き裂かんばかりに痛かったけど。聴き応えとしてはむしろ、そちらの方が十二分にありますよね。」

「にしてもやりすぎでしょ。音色で人を殺しそうになるって、ほんとどういうことよ。怖いよね、もう。」

「ごめんなさい。」

会話を重ねつつ、演奏を続けながらももう一度謝罪し、軽く息を吐いて意識をこちらの世界へ戻した。

ここのところ、気が付けばあの出来事を考えていて。

「どうしたの？ リュミエール。随分とまあ、何ていうか、」

「……業が深いな、と。そう思つて。」

「あなたが『業』だとかを、言う日が来るなんてね。ずっと天使みたいに、いつまでも純白のまま奏で続けるのかと思つてたら。」

濃紺のショートヘアを揺らし、楽しげにセイランが目を細めてリュミエールを見遣る。

「僕には今のあなたのほうが、とても興味深いから、その変化は心から歓迎するけれど。長生きもしてみるのがですね。」

一番年下（の癖して）（なのに）（といつても1歳差だけだけ（れ）ど）、と言わんばかりの視線が、リュミエールとオリヴィエの二人からセイランへと注がれる。

今日のここは、スペインのバルセロナ。この三人が一同に会する機会など本当に滅多となく、それもセイランが多少の無理をしてトゥールーズからわざわざ足を伸ばしてきてくれたことであつたら、本当に珍しいことだった。

「で、何のことよ？ 業つて。」

「――、」

あの出来事。

あれほどに彼に残酷な運命を背負わせ、己は彼に酷く傷付けられ、それ以上に彼に負わせた運命に對して深く、間違いなく自分はそのことの方により深く、傷付いていたというのに。

二人でともに、余人の立ち入られないほどに二人だけの世界でともに傷付くこと、ともに死を——死を？——選んだこと。最近、気付けばまるで極上の甘美な夢のように、抗い難い誘引力をもつてその選択に引き寄せられている自分がいて。否定しようのない己のその望みにふと、気付かされ、今のこの現実の中で我に返って戦慄する。ここ最近、幾度もその繰り返しで。

ともすれば、こちらの世界の何も知らないオスカーを、自らが進んで手を差し延べて、幻惑させ、狂わせて、昏く痛く甘い、絶望の宿運へと導いてしまうのではないかと。時にそんな予感すらして、底のない深淵へ堕ちるが如くに背筋が冷え。

「ふうん」

酷く曖昧な記憶と、酷く鮮明なその激しい感情とを自らが消化し切れないまま、芸術に係わるこの二人にはきつと伝わるであろうことを願って、茫漠とした言葉の綴りで伝えれば、セイランがごとくなく腑に落ちた様子で相槌を打つ。

「まあ、映画にだって舞台にだって、人気があるといえはあるストーリーの仕立てではあるわよね。運命に翻弄され、死を共にする悲劇の二人。」

「……こう言うのも、どうかとは思うのですけど。今、現実の世界で、あの人からとても大事にしてもらっている。それが本当に、心からとても嬉しいと思うのに、」

奏で続ける手元とは異なる方の宙へ、目線を伏せて深海色の瞳が憂う。

「なのに、どうしてそんな酷い話に、それほど惹かれてしまうのか、自分でもうまく説明ができなくて。心理学的にはいくらか解説している資料があるんですけど、もうちょっと脳生理学的とか、進化生物学的とかでの理由が知りたくて。そうすれば、業が深い、なんて悩まずに、納得して心の整理が付けられるのかもしれないんですけど。」

「何だっけ、リュミエール。あんたから聞いた気がするけど、痛みを脳が感じるにしても、感覚によ

るものと感情によるものがあるとか。」

「ペインマトリックスですね。痛みの身体的な——つまり痛みという感覚は、視床の外側部を通じて一次体性感覚野へ。情動的な——つまり痛みが不快だと思ふ感情は、視床の内側部を通じて大脳縁系に至ります。」

「あ、やつばヤメヤメ。覚え切れないから。身体への刺激と心の動きが別、つてことだけ思い出せたからオッケー。」

資料が少なく困っているから、もつと情報が欲しいんですけど…と、残念そうに小声でリュミエールは呟く。

「心理学的にだと、禁断の実効果とか、ロミオとジュリエット効果とか？」

「死そのものが、生物としては本来、強力に忌避すべき対象ですからね。禁断<sup>禁忌に惹かれる</sup>の実効果は言い得ているかもしれません。」

顎に片手を当てつつ、どこか愉快そうにセイランがオリヴィエへ応じる。

「ロミオとジュリエットは、どちらかというと原因じゃなくて結果じゃないですか？ 順調すぎるがための恋に、障害を生じさせたくなる。その障害が発生して初めて、ロミオとジュリエット効果が生じる。そして障害があれば燃え上がるという現象が普遍的であるが故に、ロミオとジュリエットという古典が、ウエストサイド物語<sup>West Side Story</sup>としてリバイバルし、度重ねて大いなる人気を博す。尤もあれば、恋物語というより合衆国の分断を描いた側面が大きいらしいけど。」

「流石に理解が早いよね、セイラン。イリュージョ<sup>幻術</sup>ンの構成はいつもあんたが自分で考えてるだけあって。私は兎にも角にも、貰った台本<sup>ほん</sup>にとりあえず一度は乗っからないといけない立場だからさ。」

「そんなベタな筋書き、僕は嫌いですから絶対に実演<sup>や</sup>したりしませんけどね。スポンサーから提案されることならしよっちゅうありはするんですが。驚き<sup>もたら</sup>を齎<sup>もたら</sup>さないイリュージョンなんて、そんな存

在意義のないものを、よりによってこの僕にやらせようなんて。」

『つくづくうんざり』を少し<sup>すが</sup>眇めた目線だけでこれほどまでに雄弁に語れるのは、この<sup>幻</sup>イリュージョ<sup>奇</sup>ニスト<sup>術</sup>を<sup>師</sup>描いて他にいないでしょうね、と、期せずしてリュミエールとオリヴィエとの内心が一致する。

「そもそもロミオとジュリエットにしたって、下地として既に先行して存在していた話が9か月に亘る物語だったのを、シェイクスピアが5日間という超短期間の恋物語に短縮したからこそ、衝撃と感動とをもって迎えられたわけですし。」

「問題なく順調に進んでいるものに、わざわざ障害を持ち込んで喜ぶほど、自分が捻くれているつもりはなかったんですけど……」

苦笑しながら、念のためリュミエールが二人を相手に言及する。

「もしそれが本当なら、昏い想像などより、そちらの方がよっぽど業が深いなど。そう思います。」再び目を伏せて首を傾け、長い髪が目元へと落ち掛かる。

力強く笑う、緋色の髪あの姿を脳裏に浮かべて。

自分がいることで、あの人を幸せにできるのなら。あの人とともに在ることが許されて、幸せを分け与えてもらえるのなら。そうしたいと、そうでありたいと、心から、ただそれだけを願っていると思っていたのに。

「話を聞いてるとき。あんた、あっち側のオスカーの、超常的？な力に、惹き寄せられてるようにも見えるけど。」

オリヴィエから問い掛けられ、ふと、リュミエールの目線がオリヴィエへと向き、それから虚空を漂って、

「……それは、そうかもしれないです。」



緩やかなピアノの音を背景に、ぽつり、と呟いた。

それが何だったのか、もう思い出せはできないけれど、あのオスカーがその運命を狂わせたほどに強大だった、圧倒的な何かの力。

確かに、他を圧して余りあるあの強さを恐れながら、同時にどうしようもなく惹き付けられる自分がいて。

「まあ、誰もが等しく強大な力に惹かれるからこそ、世界に数多の神話が生まれたわけだけだし。創造と破壊。何だかシヴァ神みたいね。」

「炎、ですか。哪吒みたいでもあるね。」

「哪吒？」

「Neha。ナタ、もしくは、ナーザ。火を放ちながら空を飛ぶ乗り物に乗り、火を放つ槍を持つ神で、物語の中で様々な神や魔王と戦う。若者の反抗の象徴みたいなところがあって人気があるから、中国では今でもいろんなコンテンツでしょっちゅう主人公に採り上げられてるね。ロミオとジュリエットはともかく、哪吒はいつか僕の舞台に組み込んでもいいかも。」

「その時は、オスカーと二人で是非、見に行きますね。」

昏い世界に誘引される自分の、未だ心は少しざわつくけれども、大切な友人の新たな舞台は純粋に楽しみで、リュミエールは微笑いながら希望を述べた。

セイランが演じる哪吒の前に、『貴方もあの役のモチーフだそうですね』と伝えたら、オスカーは一体どんな顔をするだろうか。

「にしても、人は変わればとことんまで変わるものですね。」

「？ 私のことですか？」

セイランの視線で自分の事だと了解したリュミエールが返事を返すが、それは納得を伴う返答では

なく。

以前にセイランと会った時の自分と、今の自分とで、何かが変わった自覚なんて何一つ、

「僕たち二人を前にして、あなたが一切躊躇うことなく、そこまで惚<sup>ろ</sup>気けるようになるなんて。本当にね。」

「惚<sup>ろ</sup>気け……」

リュミエールの視線が、それまで向けられていたセイランと無言で同意を示すオリヴィエの方から大きく逸れ、Largo<sup>♪</sup>緩やかに綴られていた曲のテンポがAllegroまで急加速する。

「あの、ええと、すみません。そんなつもりはなくて。本当に、その。」

「自覚がない方がよっぽど重症でしょうよ……」

呆れたようにオリヴィエが呟く。

「全く、あんな男と、リュミエールがねえ。聞いた時は本当に、しばらく寝込んだね。」

「あなたの幼馴染でしたっけ？ オリヴィエ。僕はまだ顔を合わせたことはないけれど。」

「幼馴染ってほど早くじゃないけどね。高校<sup>ハイスクール</sup>から。まあ、親友と言ってやってもいい程度には今でも付き合っているし、友人としては気のいいやつで申し分ないんだけどさ。ねえ。高校<sup>ハイスクール</sup>からあの素行を目にしてきた身としては、ねえ。しかもあの女たらしが、ここまで激変するところを目<sup>\*</sup>の当たりにさせられると、ねえ。」

「ねえ。だそうだよ。」

オリヴィエとセイラン二人の視線が集中し、顔を火照らせたリュミエールが視線の遣りどころなく、深々と足元の方まで俯く。

「……いえ、でも。もし私が変わったというのなら、変えてもらったのは、オスカーのお陰ですし。」  
「うわー。」

「そうと言っているのなら、今のあなたは以前よりずっと魅力的だよ。少し悔しい気もするけど、そこはオスカーさんとやらに感謝しておきましょうか。」

「うわー。セイラン、あんたもノリで何言ってるのよ。」

「ああああ」

自分で言い始めておきながら、白い砂浜に勢い余って打ち上げられた魚のようにぱくぱくもごもごと意味不明の音を呟きつつ、曲の最後をAlliegroのままに駆け抜けけると、リュミエールは一息吐き、ふと、右手の後方を振り返って、宙を見遣った。

オリヴィエもセイランも、リュミエールの綺麗な深海色の瞳の視線の先が向かう、その方角の意味をもう知っている。

ロサンゼルス。

「……でも、そうですね。」

リュミエールが、どこか自分の心に納得を得たように、柔らかな声音で続けた。

「人知を超えた、強大な力など持たなくても。悲劇的な運命など背負わなくても。」

この世界のオスカーは、ただあの人のあるがままで、充分に。魅力的だと思います。とても。」

目を細め、何の面映おもはゆさもなく、心から嬉しそうにそう話すリュミエールに、

「ちよっと、最終的な話のオチがそれ!？」

「どう足掻いても、今回はもう話の主導権を握るのは無理だと思うよ、オリヴィエ。店々がシエスタの休憩時間に入る前に、そろそろ昼食を摂りに行って、リュミエールの話の続きを聞かせてもらいましょうか。いろいろと。」

セイランの清々しいほどに楽しげな、滅多と見ないそんな表情と声とが、我に返って赤面するリュミエールと呆れるオリヴィエとを、一旦の休憩の支出度へと向かわせた。

今回リュミエールが使っていて、他の二人が集合したそのスタジオはアシャンプラ地区の中程に位置しており、オリヴィエが「美味しくてヘルシーなところを知ってるから」と、少し距離のある目的地のランブラス通り沿いのレストランへと向かつて、カタルーニャ広場の方角へと三人で歩き出す。

「セイランは今日、こっちで泊まるんだよね？」

「次の公演が明後日だからね。明日には戻るけど。」

「今日はずっと三人で一緒にいられますね。とても嬉しいです。」

「リュミエール、あんた、リハーサルとかは？」

「ごく内輪の会なんです。親……知人の集まりで。」

「ちらり、とオリヴィエとセイランとが目を見合わせる。」

半ば話を打ち切るようにもして、先に進むリュミエールの背中を少し離れた後ろから並んで見遣りつつ、二人が小声で会話を交わす。

「リュミエール、時々ああいう時があるよね。この夏のカーネギーホールでの公演で絶賛された後も、未だに『幻のピアニスト』で、あんまり大々的には表に出てないらしいし。」

「本人は『そのうち』と言ってたから、いずれはもっと活動するつもりなんだろうけど。」

「セイラン、あんたが猫みたいに懐いてみせれば、リュミエールもその辺り、ぽつぽつ話すと思うんだけど。どう？」

「そう易々<sup>やすやす</sup>とひとの言うことに従わないから、どうせ猫呼ばわりなんでしょう。僕は別に、今、あの人に話させようとは思わないから。開けっ広げ<sup>あひら</sup>なんて何も面白くないじゃない。」

歩いてその背を追いながら、目線の先のその背中であ揺れる、長い髪の流れを見遣り、セイランが言葉が続ける。

「あれだけ優しい人なのに、言うに言えないことがあつてもどかしげにしている様子も、それはそれで風情があるものだし。」

「相手への純粹な思い遣りから出てる意見じゃない辺り、あんたらしくていいけどね。」

オリヴィエも諦めた様子で、セイランの横から離れてリュミエールに歩み寄り、先程の話題の続きを交わし始めた。その様子をセイランは一人、ゆつくりと歩きながら二人の後ろに続く。

「……じゃあ結局、夢の中のその二人がどうなったのか、判らないままなんだ。」

「そうなんです。正直なところ、その後のことがとても気になっていて。」

オリヴィエの方へと首を傾げ、再び少しだけ翳を帯びるリュミエールの横顔をセイランは後ろから眺める。

「……でも。貴方たちに話せたお陰で、少し気が楽になりました。本当に、ありがとうございます。」  
 そう言つてオリヴィエに笑い掛け、やや後ろも少し振り返り、謝意を伴つてセイランにも投げ掛けられる深海色の瞳へ、セイランが目線だけで笑んで応え、深い青色は暖かく解れ、再び前を向き、オリヴィエとの会話を再開する。

そうして、カタルーニャ広場を回り込む外周の道に差し掛かり。

ふと、セイランの周囲の世界から全ての音が失われた。

気配にゆつくりと振り返つた、セイランのその目線の先では、噴水が音もなく水流を高く吹き上げ、紗のように広がり薄く波打つて池へと落ちてゆく。

その噴水の縁の前、青々とした芝生の上で、寄り添つて立ち、こちらを見て笑い掛ける二人の姿。噴水の紗の如くにうつすらと宙に透け、一人は武装で剣を腰にし、一人は胸に堅琴を抱え。

青銀の長い長い髪と、慈愛を帯びる微笑みに彩られた面おもての、端麗な唇がセイランの名を、心から嬉

しそうに紡ぐ。無音の世界の中で。

セイランが初めて目にする、緋色の髪を持ち主の方へと目を遣れば、氷青色の瞳の色は強い意志を湛えながらも、どこか柔らかく穏やかに、この世界とその中に在るセイランと、先をゆく二人の後ろ姿と、背後からその腰に腕を回して抱き寄せた己の恋人とを、愛おしげに見詰めて。

肩越しに背後を振り返って目を見合わせた長い髪の恋人を、もう一度強く片手で引き寄せ、その耳元に口を寄せて緋色の姿が何事かを囁けば、青銀の長い髪の姿がふわりと顔を綻ばせ、また何事かを囁き返し、どこか擦ったげに、幸福を湛えた微笑みを浮かべ。

そうして、ゆっくりと目を閉じ、身体を傾けて、唇は笑みを形作ったまま、背後の恋人の胸の中へと、穏やかに身を預けて――

「セイラン！」

そこだけ音を取り戻した、セイランの歩む道の先、オリヴィエの呼び掛けの声が聞こえてくる。

一組の恋人たちは、再びセイランへと暖かい笑みを向け、しばしの邂逅の礼を、その二対の色合いの異なる青い瞳とともに浮かべた。

その姿を見納めたセイランは、彼らしい皮肉げな微笑みで、二人の笑みへと応じ。

前を振り返り、一步を歩き出す。

視線の先には、徐々に音を取り戻しつつある世界で、多くの人々の歩みが行き交う中、こちらを振り返ってセイランの歩みを待つ、二人の愛しい友人の姿があつて。

セイランは、もう一度だけ噴水の方へと振り返り、二人の恋人たちの姿を再び目にした。

寄り添い、強くも優しく抱き寄せて、柔らかにその腕へ身を預け。どちらかが静かに目を閉じて、肩越しに口付けを交わす、一瞬の、そして永遠の、芸術のようなその姿を。

「セイラン」

再びの呼び掛けは、リュミエールの柔らかなテノールの響きをもって、セイランへと届き。

「……イリュージョニストが、イリュージョン幻想を見せられるというのも、」

あの恋人たちの、得も言われぬ尊さに。

海のように何もかもを受け入れる、その暖かさに。

「それはそれで、なかなか乙なものですね。」

ほんの少しでいいから、触れてみたいと、心の底からそう願って――

セイランは二人の友人の下へと走り出し、その背後の真中へと駆け寄って、両腕を大きく二人の肩口へと回して身を寄せた。

触れ合う腕から、胸元から、二人の暖かさが伝わってくる。

「セイラン？」

普段とは様子の異なるセイランに、少し驚いた気配でリュミエールが名を呼んで問う。

セイランの鼓膜を柔らかく叩く、慈愛に満ちたその言葉の響きを、心の奥底で噛み締めた。

「……イリュージョンのいいところって、そういうところでもあるよね。」

目を閉じ、少し潤んだ瞳を誤魔化して、歩みの向く先を二人へと預ける。

「いいところ？」

オリヴィエの間に、

「現実が、もっと愛おしくなる。」

短く、セイランはそれだけを応え。

目を閉じたままだったが、リュミエールが表情だけで柔和に微笑った気配がセイランには判った。  
「あんたにしちや、随分と殊勝なことを。」

オリヴィエの、詠うような言葉の字面とは裏腹に、その情愛深い声音と、柔らかくセイランの頭を撫でる穏やかな手付き。

掛け替えない生と幸福とが、揺るぎない暖かさをもって、確かに今、ここにあって。

噴水の辺、寄り添うふたつの姿は、戯れ合つて道を辿る三人の後ろ姿を、いつまでも見送り続け。

深まる秋を忘れさせる、地中海氣候の暖かな風が三人の周りを柔らかく包み、通り抜けていった。



S  
o  
n  
a  
r  
e  
 $\binom{2}{2}$

## 1

「リュミエールのファミリーネーム姓を聞いた、だと？」

「…何か文句があるのか。」

オスカーの反論に対して、カティスからの即座の返事はなかったが、ありありと洗面を作ったその様子からして、オスカーに言うべきことが何もないという訳では全くなさそうだった。デイベートの訓練も実践も山のように積んできた男が、長々と押し黙ったまま、何をどう言うべきか脳裏で整理し組み立てているらしい様子は、話の内容がこと仕事ではなく、クライアントからやや踏み込んだ立ち位置の知人と己の同僚という、カティスとそれぞれの相手との関係性、そして当の二者間の関係性とのバランスを推し量っているように見える。

「……無理矢理聞き出したのか？」

「カティス、貴様は俺がそんなことをする奴だと思っているのか。締めるぞ。聞いたらすんなり教えてくれた。」

『BLANCブラン、と言います。白、の男性名詞ですね。フランスではありふれた姓なので、あまりインパクトはないみたいです。』  
『リュミエール・ブランリュミエール・ブラン。ありがとう。』

口の中で、大事に転がしてみる。

オスカーにとつてはインパクトなどどうでも良く、大切な恋人の大切な名前だった。

「わざと綺麗事だけで済ませようとしてんじゃねえ、Fワード野郎。どうせその名前で検索してみた  
だろ。」

「……………悪いか。」

『当たり前だろう。』と言いたところだったが、流石にそこまで開き直り切るには、オスカーとい  
えども躊躇われるものがあつた。

「何か情報が出てきたか？」

「いや。人名としては、全く。」

Lumière<sup>光</sup>Blanc<sup>白</sup>もあまりに一般名詞すぎ、Lumièreが<sup>フーリストネーム</sup>名として使われる例が稀なためでもある

のか、引用符付きで検索しても、検索結果で相当のページ数を捲<sup>めく</sup>つてみても、本名でのリュミエール  
を想起させるような情報は皆無だった。無理に人名と結び付けようとすれば、映画の父とされる  
Lumière兄弟の話題か、先日のカーネギーホール公演の後、一般にもかなり検索結果で見掛けるよう  
になったピアニストとしてのリュミエールについての記事に、一般名詞のBlancがたまたま載つた  
けのものしか存在しない。主要なSNSでもユーザー名として該当するものがないか当たってみたが、  
ヒットしたものは一切なかった。

それでひとつ、オスカーは当たりを付けて、その後でリュミエール本人に確認してみた。リュミエ  
ールは音楽学校に通つたことがない。もし通つていれば、現在のリュミエールの途方もない実力から  
して、在学中から既に奨励賞であつたり主席学生公演であつたりと、何らかの形で世間に名が出るこ  
とは確実だったからだつた。

ただこれについては、オスカーの予想は正解であつたものの、リュミエールからの返事としてはやや濁された。

『本当なら、もちろんきちんと音楽学校に通つて習いたかつたんですけれど、ちよつと事情がありまして。』

オスカーへの思い遣りと愛惜と、信頼と、それであつても易々と伝えられないもどかしさを十二分に湛えた声音で、ビデオ通話越しのその深海色の瞳に心底申し訳なさげな気色を浮かべながらそれだけを返答されれば、オスカーも流石にその場でのそれ以上の追及は控えた。

『縁に恵まれて、私には勿体ないくらいの素晴らしい指導者複数人にそれぞれ個人的に指導していただいているので、それは本当に心から、皆様へ感謝しています。』

「お前もそろそろだいたい察しているだろう。」

カティスから充分な信頼を得ているのはオスカー自身も理解しているが、それとこれとは別、といった風に、苦々しげにカティスから念を押される。

「あいつの家庭事情は相当に複雑だ。家庭環境、生育歴、家族構成、その他それらに類する話は、たとえ話の相手があいつ本人でも、くれぐれも慎重に取り扱え。」

「……お前は把握しているのか。」

「ほぼ完全にな。それはあいつの父親の代からの付き合いが故だ。他意もなければ悪意もない。」

「…判っている。」

返答をわかつていて問うオスカーも、そしてあえて否定をしないカティスも、ともに理解している。オスカーが知らないリュミエールの情報をカティスが知っている、それをオスカーが心底気に食わないと考えていることくらいは。ただオスカーであっても、オスカーだからこそ、それに表立つて文句を付けることはなかった。担当弁護士としての守秘義務。弁護士にとって神聖とも言えるその線引き

は、弁護士という職業に誇りをもつて応<sup>あた</sup>つてゐるオスカーだからこそ、不満には思つても否定しようとは思わないラインだった。

「にしても、」

リュミエールを取り巻いてゐるらしいそれらの事情について、内心うつすらと氣になつて仕方がなかった今日のオスカーへ、わざわざオスカーの個室<sup>オライス</sup>に入つてきてまでしてピンポイントでカティスが絡んできたのは、一体どういう理由で。先日の公演前のような非常時は別として、今日のような氣を緩めている平常時にいったんカティスに目を付けられてしまえば、流石に百戦錬磨の論客であるカティスを相手にして、オスカーですら一片の隠し立てのしようもなく、洗<sup>あ</sup>い<sup>ざ</sup>い<sup>ざ</sup>い<sup>ざ</sup>思うところを吐かされる。

「何故だ？」

「さあな。」

リュミエール絡みで何かがあつた時の、オスカーの殺人犯風の氣配は、それが顔に出ていない時でもカティスには極めてわかりやすかつたが、それをオスカー本人へわざわざばらす氣などカティスには更々なかつた。

何事かのカティスへの呪いの言葉を吐きながら、昼休憩へと出ていくオスカーの背中を見送り、「…恋仲になつたからこそ、リュミエールはお前に言えないことがあるんだよ。」

カティスは呟いた。

単なる弁護士の立場であれば、オスカーにはサブ担当として普通に伝えることができる部分もあっただろうが、と。

恋人のことで思い悩む秋の夜には、当の恋人の至上の美貌と暖かく溢れる優しさが一入身<sup>ひとしお</sup>に沁み  
る。

「すごく楽しみです。嬉しいです。毎日、あと何日かを数えて心待ちにしています。こんなに、とても幸せで、恐いくらいで。ありがとうございます。」

普段は控え目な微笑を優しく浮かべることの多い人が、この話題の時には言葉に違わぬ心からの晴れ晴れしい笑顔を、抑え切れないといった風に満面に溢れさせ、爛漫に声を弾ませて。グラランドピアノの譜面台に置いたスマートフォンの、画面の向こう側で視線を合わせるオスカーにも、この上なく真っ直ぐに、その暖かな喜びが伝染する。

ヘッドセットを着け、オスカーと話しながら、長い髪を演奏に連れて靡かせるピアノの指先の、迷いないトリルは次第に速度と音量とを上げていったかと思うと、唐突に最高音から最低音までの、その両手で勢い良く奏でられたグリッサンドへと収束した。

リュミエールに再び逢うため、オスカーがパリに訪れる、そう約束した日程まであと2週間だった。

夏の終わりのニューヨークで、想いを通い合わせたその日の内にはもう、否応のない暫しの別れ。

17時過ぎ、JFK空港で身を離す前に、もう一度だけ、目を閉じて唇を触れ合わせ。緩く抱き留め、不意に激情に駆られて、力の限りに強く強く抱き締め上げて。指を絡め合わせ、潤む深海色の瞳と切なげな氷青色の瞳とが見詰め合い、互いに変わらぬ愛情を誓って。

幾度も幾度も振り返るリュミエールと、痛む胸を抱えてそれを見送り、自らも帰路に就いたオスカー。9時間後、一方が午前8時のパリに到着すれば、同時刻の一方は早くに着いて就寝前のロサンゼルス、午後11時。容赦ない9時間の時差。

互いの体調を気遣って1日分のインターバルの、その合間にも、想い想われるメッセージの行き来

は絶えることなく。

話し合いを基に示し合わせて、パリのリュミエールの朝6時、ロサンゼルスのおスカアの夜21時、都合の付く日はいつでも1時間程度、リアルタイムのビデオ通話をする事になり、おスカアはひとまず一安心した。距離も時間も遥かに遠く離れた今、定時で顔を合わせ、直接言葉を交わすのが、縁を繋ぎ留める何より最善の方法と思ったので。

初日、再びおスカアと画面越しであつても再会を果たして、声を交わしたリュミエールは、心の底から嬉しそうに。

だが2日目の終わり頃には、その姿はおスカアの目に、どこか薄らと力ない、ようにも見えて。

3日目の初め、目に見えて明らかに肩を落とすリュミエールの、だがなかなかその事情に口を開こうとしない姿を、「愛しているから」で説き伏せたおスカアに語られたのは。

「……ごめんなさい。本当に……」

心底申し訳なさにぽつりぽつりと語り始めたリュミエールのあまりの気落ちに、『やつぱり白紙に』といった類の話かと思つたおスカアは一度、黄泉の世界へと叩き墮とされたが如くに身体の芯から青褪めたが。

「……どうしても、落ち着かなくて……」

手が鍵盤を叩いていないと、と。リュミエール曰く。

聞けば、パリのその自宅にいる日には、目覚めてから軽く身支度を整えた後、朝から夜まで防音の練習室の中、おおよそ空いている時間のほぼ全て、ひたすらピアノを演奏し続けるのがこれまでの常だったのだという。次の演奏会の準備と称しては楽譜を繰ってピアノを奏で、休憩と称しては楽譜も見ずに次から次へと、心の赴くままにひたすら曲を掻き鳴らし。

「貴方とは、毎日本当に逢いたいと、話したいと、こんなに想っているのに。なのに、こんな風に気

を散らしてしまう私が、心底、申し訳なくて。」

オスカーは即座に承諾した。貴重な逢瀬の時間を他に譲るつもりはない、だが同時に、恋人の意に染まない事を無理に続けさせるつもりも更々なかった。

ヘッドセットの、それも集音の単一指向性のかかなり強い、つまり口元からの声を拾いやすく、周囲の音が極力入りにくい型番を即座にチェックして——何分にも近年の弁護士<sup>チャット</sup>の業務にウエブミーティングは欠かせなくなっていたから、L & C 法律事務所<sup>ニューヨーク</sup>の、N.Y.・L.A. 両事務所全体チャンネルに呼び掛ければ、使用例<sup>サンフランシスコ</sup>の収集には事欠かなかった——本当はオスカー自身で買って贈りたかったのだが、即日にも態勢を整えたかったので仕方なしに、リュミエールに型番を伝えて準備してもらい。

オスカーと顔を合わせて会話を交わす。そしてその間、ピアノも弾き続ける。リュミエールになら造作もない、むしろそれが息をするようにリュミエールの普通ですらあることを、オスカーはよく承知していた。

「ありがとうございます。我儘<sup>わがまま</sup>を容れてくださって。

……どう、感謝を伝えればいいのか。」

暖かい気配を取り戻した恋人の画面越しの柔らかな微笑と謝意、それから会話の背景音<sup>バックグラウンド</sup>で、程よい音量で届いてくる天上の音色。それだけで、オスカーにとっては充分すぎる返礼だった。

とはいえ、いくら炎の情熱のオスカー（自称兼他称）といえども、画面を隔ててでは、できる事もしたい事もしてやりたい事も、その実現は極めて限られざるを得ない。

ただそこに在る、それだけで奇跡のような愛しい恋人ではあるが、それでもやはり、一切の隔てるものなく見詰め合って触れ合える暖かい生身の存在に勝るものなど、この世界中の天上天下のどこを



探してもありはしない。

1週間、その先の繁忙と業務量とを見計らい、さらに続く1週間、リュミエールと自分と航空機と宿泊先ホテルのスケジュールを調整し。

対人相手が主というより、どこまでも対人相手の仕事でしかない弁護士の業務は、そもその二人の出会いの発端がカティスのそれであつたように、しばしばスケジュールなど有つて無きが如しの事態が生じるが、こればかりは何を差し置いてでも必ず実行するとオスカーは心に決めたし、口ではなんだかんだとオスカーに茶々を入れるカティスも、おそらく間違いなく、その日程頃のオスカーに何かの急な支障が生じてても、全力でサポートし予定通り送り出してくれるであろうことは想像に難く<sup>かた</sup>なかった。

ニューヨークで別れてから2週間後、決まつたのは、そこから1か月後のオスカーのパリへの2泊3日の訪問。

多少の無理が透けて見えるオスカーを察し、一度は申し訳なさげな雰囲気を漂わせながらも、抑え切れない喜びに大輪の開花のように顔を綻ばせた恋人は、それから毎日、徐々に減つてゆく残りの日数を指折り数えては——実際に指は、折るのではなくピアノを奏で続けながら、ごく普通に暗算で数えているのだが——、毎日、感謝の言葉とともにオスカーへと微笑い掛ける。

残り、2週間。

リュミエールのスケジュールには、演奏家らしく突発的なあれこれというのがほぼないために、予定の作成はオスカーを中心として検討すれば問題なかった。とはいえリュミエールにも予定は途切れることなく入つており、先週にはスペインで小規模の演奏会が——どうやらオリヴィエと、オスカーは知らない相手だが二人の共通の知人との三人で会つていたそうだが——、それから来週には、近場と聞いているが別のチャリティコンサートが入っている。他の用件も併せて入っていると云つて、リ

ユミエールは今日この後にも移動を開始し、10日ほどはパリを離れる予定になっていた。自宅以外のところへいる時には、定時の逢瀬は都度ごと話し合い、変わらず実施したりスキップしたりする。

リュミエールが次にパリに帰ってくる時には、オスカーの来訪日はもう目前になっている頃だった。「でも、本当にいいのですか？」

威厳高い王を称えるが如き、重厚な歩みの荘厳な行進曲を低音で奏でつつ、幾度目かになった確認をリュミエールがオスカーに問う。聴き覚えはあるが何の曲だっただろうか、と頭の片隅で検索しながら、オスカーはリュミエールにいつもの返事を返した。

「お前とどこへ行こうか、何を見ようか、考えるのが楽しいんだ。3日分の予定は俺に任せてほしい。」  
「わかりました。ありがとうございます。」

スケジュールの立案を委ねられることなく、自分が大切に想われていることの方へと明らかに喜びを湛え、オスカーに微笑むリュミエールが、でも、と呟く。

「でも？」

「ごめんなさい。貴方が折角予定を組んでくれるのだから、と、言おうかどうか迷っていたんですけど、」

首を傾げ、睫毛の翳の差す瞳の笑みが深くなる。

「予定などなくても。貴方と、ずっと、ゆっくりしたい気持ちもあります。特に何も、豪華なお持て成しも、目新しいものもありませんけれど、私の自宅にいらつしやいませんか？」

貴方と落ち着いて、ゆっくり話がしたいです。ホテルも、わざわざ取らなくても、私の家で泊まっていたければ。決して広くはないんですけれど、是非。」

深海色の瞳は心から嬉しげに、その真っ直ぐな純真な色合いで、オスカーの氷青色の瞳と視線を合わせ。

オスカーは押し黙った。小曲が移り変わって、転がる鳥の鳴声のようなメロディを奏でているリュミエールに、念のため確認してみる。

「……寝る場所はどうする？ ベッドは一つしかないだろう？」

「パリはどこも狭くて、練習室を確保するだけで手一杯で、客間はないんですけれど。ごめんなさい。私がソファで寝ますから、貴方には私のベッドを使ってもらいたいです。貴方の方が体格が良いですから。」

やっぱり。

「……リュミエール。」

「はい」

「……リュミエール。」

「はい？ オスカー。」

また次の小曲へと移り変わり、凄まじく速いパッセージをいとも容易く、オスカーへと微笑い掛けたまま軽々と弾き鳴らしつつ、リュミエールがオスカーの不自然に繰り返す呼び掛けに応える。

オスカーは息を吐いた。極めて速いテンポで上昇と下降とを繰り返す背景の曲そのままに、リュミエールに心の早鐘を打たされている気分だ。

「言えなかったことを言ってくれて、俺も嬉しい。お前の方にも、はっきりと言わないと伝わらないようだから言っておく。お前の家に行って二人きりになったら、ゆっくり話を交わす隙などなくなるし、お前にソファも使わせてやれないし、寝かせてもやれなくなる。この上なく豪華な最高の持て成しも、目の眩むような目新しさも、全部お前の身体で嫌というほど払ってもらうことになる。」

だん、とパッセージの終曲、リュミエールが和音を外した。恐ろしく珍しい。

オスカーからゆるりと視線を外して顔を伏せ、みるみる間に顔中を朱色に染め、そのままゆるゆる

と鍵盤を小さく、極めてゆっくりと叩き始めたリュミエールのそのメロディに、オスカーはようやく思い出した。先程からリュミエールが演奏している組曲は『動物の謝肉祭』。このすぐ後の演奏会の曲目だろうか。

「リュミエール」

「……ハイ。」

「リュミエール」

「……ハイ。ゴメンナサイ……」

一音一音を遅々とした歩みで奏で進めるその小曲は、同じメロディのより早いテンポで広く知られた原曲の『天国と地獄』ではなくて、その名も『亀』。演奏会が室内楽ならピアノは伴奏のみのはずだが、おそらく無意識にであろう、主旋律を同時に奏でている。

「リュミエール。くれぐれも言っておくが、俺だけではなくて、他の人間も家には入れるな。絶対だ。」  
「え。そんな極端な心配をなさらない」

「リュミエール。」

「……ハイ。ゴメンナサイ。」

「俺の泊まりはホテルにする。いいな？」

「ハイ。アリガトウゴザイマス。」

真っ赤になった顔の火照りは一向に引く気配もなく、顔を上げての一瞬の反論の後は再び俯いたまま、時折顔を瞬かせて長い睫毛を揺らし、どこもなく応えるリュミエールに、恋多きパリでよくぞ今まで何の毒牙にも掛からずその存在が清らかで居続けられたものだ、と、オスカーにはいつそ逆に背筋の凍る思いすらした。

なぜリュミエールがそれほど、こういう話に対して無防備なのか、オスカーはリュミエールと恋仲

になってからの日々の逢瀬ビデオ通話の中で、一度その理由らしきものを聞いたことがある。

「いわゆる、ア・ロマンティック、ア・セクシャル恋愛感情を抱かない、性的欲求を持たないかなと思っていたんです。自分自身のことを。」

聞いてすぐは、正直なところオスカーでも内心相当に面食らった。が、気を取り直して、かつて微かに一度二度ほだけ聞いたことがあるような気がするその単語を改めて検索し直し、出てきた意味合いとリュミエールの存在とを結び付けて、どことなく深々と納得する。

「性自認は？」

「それは男性ですね。自分のことを男性だと考えて、違和感や嫌悪感を覚えたことは特にはないです。性表現も男性のつもりなんです。昔からあまり男の子らしくはない服を着せられては周囲に喜ばれたり、髪だけは切らないでほしいというんな方からたびたび望まれたりで、それに反発を覚えることも特にはないので、比較的中性寄りではあるのかもしれませんが。髪の手入れが少し面倒だなと思う時はあるんですが、」

「切らないでくれ。俺からも頼む。」

続きの言葉を言わずに即座に割り込んで、オスカーが発言した。その件に関してだけは、かつてからのリュミエールの周囲とやたらに全面的に同意するオスカーだった。何となくオリヴィエもその中に入っていそうな気がする。

「わかりました。貴方のご趣味にかな適ったようで、嬉しいです。」  
と、リュミエールは小さく笑っている。

「それで、恋愛指向と性的指向が」

「なかった、ということですね。本当に、ただの一度も、誰に対しても、これまで恋ができたことは

ありませんでしたから。……貴方に出会うまでは。」

視線を合わせたまま、少し恥ずかしげに、そしてどこか申し訳なさげにすらして、淡く色付いた微笑みを浮かべるリュミエールに心を驚掴まれつつ、オスカーが確認を進める。

「……ホモ・ロマンティックだった？」

「何となく、それも違うような気がします。貴方だけしか好きになれたことがないので、何とも言い切れはしないんですけれども、」

小首を傾げ、真面目に言葉を探したリュミエールは、何かに思い当たったようにふと、オスカーに微笑み掛けて。

「モノ・ロマンティックと言っていいのかもしれませんが、恋ができない。」

そうして我に返り、珍しく演奏をすら止めて首と指とを振りながら、慌てて言葉が続けるその姿。

「ごめんなさい、忘れてください。そんなものを貴方に押し付けるつもりは全くなくて、」

「絶対に忘れない。嬉しいよ。愛している、永遠に。ずっとそのままです。」

リュミエールに痛いほどの胸苦しさを覚える時、オスカーの言葉はことさらゆつくりとした、ごく低音の響きを帯びる。

ただそれでも、流石にそれ以外のそれ以上を、改めてその場で訊くのは躊躇われた。性的指向、の方はどうなのか、と。

恋愛指向と性的指向は別物だ。リュミエールがオスカーに恋愛感情を抱いているからといって、性的な発露が同様にあるのかどうかは定かではない。

オスカーが回想から立ち戻り、現実の時の流れに思考を戻せば、緩やかな亀の歩みの音の綴りは、

まだ一步一步と続いていて。

ゆっくりと。少しずつ前へと。

「……あの。オスカー。本当に、ごめんなさい。それと、」

まだ朱に染まつた顔を俯かせたまま、リュミエールが再び幾度か瞬き、

「何だ？」

応えたオスカーの氷青色の視線へ、ゆっくりと顔を上げて、深海色の視線を合わせた。

「……いつか、必ず、貴方の想いに応えたいと。そう、思っていて。」

緩やかなリタルダンドの後、甘い分散和音で曲が閉じる。

「まだよく、わからなくて。でも、少しずつ。……何となく。」

……貴方に触れたいと、……触れてほしいと。思う時があつて。」

演奏を終え、リュミエールの空いた手の指が、譜面台の上のスマートフォンフロントカメラへ近付き。

オスカーの映る画面の縁を、ゆっくりと滑った。ようだった。まるでその指で直接己の頬をなぞられたように、オスカーの肌がぞわりと逆立つ。

「……リュミエール。」

「あの、ええと。そろそろ出発の準備をしますね。行ってきます。」

おやすみなさい、オスカー。よい夢を。……愛しています。」

真っ赤な微笑を浮かべたままのリュミエールが、あたふたと慌てたように矢継ぎ早に言葉を重ね、オスカーの返事も待たずに通話が閉じられた。

「……………」

終話画面を前にしばらく沈黙して、深々と、オスカーは溜息を吐く。

それはもちろん、リュミエールの想いと、知らせてくれた言葉と思い遣りとが、この上なく嬉しいのは当然だが。

成就を予想させる言葉を贈られて、リュミエールからは滅多と言わない「愛しています」の言葉まで聴かされて。向こうはこれから昼に向かう中、意識を切り替える必要性に駆られてそうしているだろうが、こっちはこれから夜を迎えるところで、そういう状況下で独り大人しく「おやすみ」するのが、どれほどまでに困難か。

やっぱリュミエールは判ってない。まだまだ、全然。と思うし。

いつか必ず。リュミエール本人から許しを得た暁には、その身体に、嫌というほど直接教え込んでやる。とも。

オスカーはそう、固く思った。



## 2

弁護士になつてからの年数はそう長くもないが、もう慣れている程度には航空機での出張も回数を重ねた。季節も悪くなく嵩張<sup>かさば</sup>る物もないので、2泊3日程度の荷物なら身の回り品としてバッグへ纏めてしまえる。ただし今回は、それとは別に規定サイズぎりぎりの特注のスーツケースを機内持ち込み品として持つてきてはいるが。

いずれにせよ、帰りはともかくとして、行きの行程で預け手荷物が出てくるまで悠長に待つ気などは更々なかった。いざフランスに着いたのなら1分1秒たりとも惜しい、無駄にするつもりなどない。シャルル・ド・ゴール国際空港の第2ターミナル2E、バゲージクレームを素通りし、搭乗者出口を抜けてランデブーエリアに出れば、辺りを見渡して探すまでもなく、そこだけ異様とも言えるほどの輝きを放つ一角があった。

「オスカー!!」

長い髪を摩<sup>な</sup>かせてこちらへ向かい駆け出してくる、胸が潰れるほどに恋い焦がれた、愛しいその姿。オスカーは一瞬だけ、頭の片隅でリュミエールと自分との合流予想地点、その周囲の人波の量、他の通行者の移動ルートを計算し、移動の速度を微調整して僅かに早めた。しばらく動けなくなことは目に見えていたので、立ち止まって差し支えない場所に。

そうしておいてから、何もかも全てを頭の中から振り払い、片手を広げ、全身の全力でその存在を

抱き留める。

腕の中に収めた存在は、紛れもない温かさを伴って。強く響く鼓動の音すら聴こえてきそうなほどに。

「…リュミエール。」

身体中の全てから押し寄せて意識の<sup>ていど</sup>尽くを塗り潰す愛しさのまま、その耳元で低い声で囁けば、自分の背に回された片手が強く服を握り締める震えが伝わった。国際空港といえどひつたくりが頻発するので、片手を手荷物から離せないままでいるもどかしさが悔しくて仕方がないが、リュミエールも流石に在住者で心得ているのだろう、オスカーの手荷物の取手を一緒に握り締め、二人の指先が絡む。

ちら、とオスカーは抱き合うリュミエールの肩越し、鋭く周囲を一瞥した。息を吞むかの如くに相対に周囲から注目されている。

それはそうだろうな、と、抱き締めた身体を僅かに離して、見詰め合ったリュミエールの、その頬に手を添えて思う。

深海色の瞳が、潤んで、真っ直ぐにこちらを見詰めて。想いの深さ故の、その全身から溢れ出る、<sup>かんば</sup>馨しいまでの美しさと妖艶さと。

オスカーが出てくるまでの何分か、あるいは何十分かを、明らかに人待ち顔で、おそろくはそわそわと、切なげに、これほどの美貌と色香とを無意識に辺り構わず振り撒きながら待っていれば、それだけの時間で周囲の耳目を集めに集め切るのは自明の理だった。

オスカーといえばこれもまた似たようなもので、ただリュミエールとは自覚のあるなしが決定的に違う。リュミエールとの再会を前に、己が強い気配を発し続け、背後にぞろぞろと「あわよくば近付きに」を期待する多数の意識を引き連れてきているのはよく判っていた。

それら全てを確認し切ると、愛しい姿の頬に添えた片手を、そのまま後頭部へ滑らせ、引き寄せて、睫毛が触れ合うようにして目を閉じ、想いの丈の全てを籠めて、唇を重ねた。

未だ触れるだけ、だが深々と、長く。溶け合うように長く。

己の背後に回された手は、震え、浅く服を掴んでいた指は離れてより遠くの、深い位置へと彷徨い、無意識にか、僅かな隙間をも埋めるように、オスカーの背を引き寄せて。

音のない複数の悲鳴と叫喚とが周囲の至るところから湧き上がる気配を、オスカーは確かに耳にした。

後頭部を支えていた手で髪を梳き、再び項うなじに潜くぐらせ、何度か角度を変えて、幾度もの口付けの末、最後に一瞬だけ仰け反らせた首筋に唇を落とした。息を吞むような、溜息を吐くような、ほんの息のリズムエールの呼吸の乱れを、その一瞬で心ゆくまで堪能して、オスカーが身を離す。

「逢いたかった。リズムエール。」

ちらりと垣間見えさせた一瞬の深々とした欲望を打ち消すように、ことさら清廉めいた爽やかな笑顔を作ってみせ、オスカーは改めて最愛の恋人の、今日の姿をまじまじと眺めた。

眺めざるを得なかった。

「あの……、やつぱり、変ですか？」

「いや。とても良く似合っている。」

「良かった、」

心配げなそれまでの表情から、明らかにほっとした様子でリズムエールが微笑を見せた。

「先日会った、オリヴィエに。……オスカーが、絶対喜ぶから。絶対。と言って、……ちよつとだけ強引に、渡されて……」

ふわふわのファー生地の高ネックのトップス、秋向けといえど秋向けだが、その癖両肩が大きく

開いていて白い素肌が見え、袖は長いのに丈は比較的短く。ボトムスは上半分がスリム、下半分が末広がりの一見品の良いフレアパンツだが、もう片足は膝上までしかないアシンメトリーで、共布ともぬののレイヤーズが幾重にもその片足を覆いつつ、動きに連れて時々ちらりと素足が覗き見える。ピアスホールのない耳には、両耳ともの中程に、2連のイヤークラフ。

何よりも、髪型が。左右の耳上から浅く寄せられ、後頭部でそのまま緩い三つ編みを描いているハーフアップの長い髪に、細くシンプルながらも燦きらめかしいラインストーンが長く編み込まれていて。オスカーは再度、今度は緩くリュミエールを抱き寄せ、重なるその首筋に顔を埋めて、ひっそり長々と溜息を吐き、脱力した。

「あの、オスカー？ …やっぱり可笑しければ、パリに着いてから自宅に寄って着替えても、」

「そのままでもいい。そのままがいい。」

世にまたとない最高の綺麗と可愛いとが、こんなにも辛い。オスカーにとつて。

「オリヴィエは、オスカーが何か言うならオスカーに脱がせてもらえと。意味がよくわか…」

「そのままでもいい。」

尚更。鬼か、あいつは。

リュミエールは自家用車を持っていない。

パリ市内は狭く駐車場が少なく渋滞が多く、土地も駐車場代も高く、経済面や実用性を考えてのこのという意味合いも当然あるのだが、

「近年の欧州は、脱炭素の取り組みが盛んで。アーティファクトカーボンプリントアウトの移動方法やコンサートの開催方法、それから私生活でも、炭素排出量が注視される時代になっています。もちろん私は、まだそこまで表立って活動することは少ないんですけれども。」

生まれも育ちも都会っ子で当然のように民主党支持、合衆国の企業法務でもカーボンニュートラルの取り組みをもちや知らぬ存ぜぬで通せない昨今ではあったが、オスカーはどちらかというとこの手の話に頭を抱えたくなる側の人間だった。知るか、と言えるものなら言ってしまいたい、という。恋人がそれで今後苦勞することになるといふのなら、尚更。

とはいえ車は逆にパリ市内では動きづらい、というのは事実であつたので、C D G空港からの移動もパリ市内の移動も、今回は公共交通機関の利用を前提にしてある。鉄道<sup>R E R</sup>は、特にC D G空港とパリとを結ぶB線は治安が決して良くはないので、少し時間は掛かるがパリ市内までは空港バス<sup>エクスプレスバス</sup>を使つて移動する。

多少の時間を要そうが、別に問題ではないのだ。市内の観光に時間を割きはするが、それが目的ではないのだから。

愛しい恋人が、もはや隣にいる。

バスの車内の座席で二人並んで座り、荷物を預けてようやく自由を得た両の手を使つて、恋人の肩に手を回し、身を寄せ、空いている側の手でリュミエールの両手を包む。広くはない車内でかつ見通しが良いのでリュミエールが躊躇<sup>ためら</sup>うかとも思ったが、リュミエールは逆らわず引き寄せられ、ずつと長く、オスカーの首筋に顔を埋めたまま、目を伏せ、閉じ、時折瞬いて、睫毛がオスカーの首筋を擦<sup>くす</sup>り、自らの両手を包むオスカーの手を不意に握り返す。小さく繰り返す息を時々詰めては、細く長く震える吐息を密やかに吐く。

それは恋の喜びというよりも、何処<sup>どこ</sup>か酷く傷付いている、といつそ表現した方がしっくり来る姿で。人生で初めて、かつ極めて唐突に恋を覚えさせられ、すぐさまその身を遠く独り放り出されるとこゝうなるのかと。

可哀想なことをした、と偽りでなく胸を痛めてオスカーは思うが、世に無二の存在のこのリュミエ

ールがそれほどまでに自分に心を傾ける、そのことに、否定し難く満たされる支配欲とどこまでも深く果てしない甘さとが、同時に相俟<sup>あいま</sup>つてオスカーの胸苦しさを倍增させる。

道中、一度だけ

「……本当に。良かった。…貴方が、無事で…。」

そう呟きながら、両目から一粒ずつだけの涙を零し、その時だけオスカーの手から離れた片手を、オスカーの左胸の上で、何かを確かめるようにゆっくりと滑<sup>すべ</sup>らせて。

それがあの日見たという夢のことを指しているのは明白だったが、オスカーは何をも追及せず、ただ空いた片手でリュミエールの頭を撫で、涙の筋を拭い、引き寄せ、その額に口付けた。

そのまま約1時間、ほとんど言葉は発さず、息遣いと、その震えと、身体の暖かさと、引き寄せる腕や握り合う手に時折籠もる力と、数度触れたキスと、隔てるものなく見詰め合う瞳と瞳とで、幾万の言葉に劣らぬ無言の会話をずっと続ける。言葉での会話はこれまでも毎日リモートで交わっていたのだから、今、生身で逢えているこの時はこれで良かったし、これが何よりも正しいことだった。

パリ市内、オペラ座の前の停留所に到着する。近場につけておいたオスカーの宿泊ホテルに荷物を預け、もう一度市内の路線バスを利用して、リュミエールの手を引いて歩き、着いた先はトロカデロ庭園。

目の前には、エッフェル塔。

並んで歩き、庭園の噴水側へと歩み寄り、目の前のエッフェル塔を、手を繋いで共に見上げる。ちなみにオスカーだけは、周囲の人波が微かなざわめきとともに、さあ、と二人の道筋を空けるように引いたのを認識している。

「……いつだって、いろんな場所から、幾度でも、目にしているのに。」

この地に落成して130年余りの『鉄の貴婦人』を見上げながら、長い睫毛を瞬かせ、リュミエールが

静かに言葉を紡ぐ。

「今日のこれが、同じエッフェル塔だとは。とても、思えないです。」  
 そうしてようやく、ようやく戻ったその至上の微笑を、オスカーへと向け。

「……貴方が、いてくれるお陰で。」

清艶と。幾重も、花開くように。

リュミエールはオスカーの方を向き、オスカーはリュミエールの方を向いて、両手を繋ぐ。

「……ようこそ、オスカー。……お待ちしておりました。」

「……ただいま。リュミエール。」

そう言うのが、一番正しい気がした。

いつであろうと、己の心の戻るところ。この存在の下へと。

今少し。どうか我に返ってくれるな、と願って。

目を閉じ、愛しいその存在の薄紅色の唇へ、キスを落とした。

連続でシャッターを切るレフカメラの、実に高らかな音が辺りに響く。

「いやー、完・壁☆なシーンだね。ちよつと妬ましくらい。あ、あんたたちの関係に妬いてるって訳じゃないのよ？ 二人揃って雰囲気作ったら人外さ倍増の、その美が羨ましいだけで。」

合衆国にいる時よりはやや大人しい格好をしているが、それでもこれだけ目立つ人間をどうして見落としたのか、と、オスカーは頭を抱えそうになった。直前まで物陰に隠れていただろうことは、おそらく当然だとしても。

「オリヴィエ!？」

リュミエールがば、と慌ててオスカーから両手を離し、頬を色付かせる。どことなく、オスカーにはロスタイムが終わったような気分だった。米国人の魂、オスカーも高校・大学と熱心にプレイしていたアメフトにロスタイムの概念はないが。

「ハア—イ、リュミエール。ちよつと見せて。よし、完璧。このくらいは当然つて？ さつすが私のスタッフ。これなら交渉材料には充分。」

挨拶から後の後半の台詞はリュミエールにでなく、オリヴィエの隣で一眼レフのモニターをオリヴィエに見せているカメラマンらしき人物に向けられている。ミラーレス一眼が既に市場の主流にある昨今の中で、プロの本気の機材。

「おい、なんだ。勝手に撮ったのか。」

「撮ってあげた、んでしょ。あんたたち自身じゃ撮れないんだからさ、当然だけど。心配しなくても大丈夫、すっごいいい画で撮れてるから。ここ、エッフェル塔に近くて画角が難しいし、逆光になるから綺麗に撮るの大変なんだけど？ それをこれ以上ない最良の腕前のカメラマンが」

「そんな事は心配していない。」

「そ—お？ 正直、すっごう欲しいでしょ？ この一枚。」

この季節のパリには珍しい、抜けるような快晴。秋の日に鮮やかに色付く木々。恋人との一生に一度の思い出。最高のカメラマンが手掛けたベストショット。」

カメラマンが持つ一眼レフを綺麗にネイルの入った人差し指で指しながら、パリの街並みに合うシックな装いでありつつもフルメイク完全装備のオリヴィエがわざとらしくポーズを決め、ルージュの乗った艶やかな唇で婉然と微笑んでみせる。

「……………」

沈黙した時点で、とうの昔に見抜かれている程度にはオスカーに形勢不利だった。



「オリヴィエ？」

「うん、すつごく似合ってる。流石は私のコーディネート。着<sup>きこ</sup>熟しもバツチリ、やつぱりそのボトムスはすーって背筋が伸びてないね。ブーツもよく合うのがあって良かった。送ろうかとも思ったけど。」

オリヴィエがリュミエールに歩み寄りつつ、上から下まで妥協のない鋭い視線でがっちりと確認している。

「ヘアセットも綺麗にできたね。偉い偉い。」

艶やかに乱れなく流麗に流れるリュミエールの髪を撫でるオリヴィエを、オスカーが渋い顔で睨む。「慣れてはいませんでした。が、頑張りました。あの、オスカーに感想を伺ったら、言葉では褒めていただいたんですけど、何とも言えないようなすごく微妙な表情をなさってて、」

「ああ、それは滅茶苦茶喜んでるね。心配しなくていいよ、大丈夫。」

「何の用だ。どうしてここにいる。」

堪りかねたオスカーが二人の会話に割り込む。

「撮影。見ればわかるでしょ。」

撮影だろうと撮影でなかうと、いつだつて思う存分まで散々着飾っているとこのに見て判るか。とオスカーは内心で突っ込んだ。

「今日は俳優じゃなくて、モデルの方<sup>ほう</sup>のね。合衆<sup>スディット</sup>国の、そんなに部数は多くないけどファッショ誌。」  
「どうやって俺たちの動向を把握したのかは知らないが、それならそれでとつとその写真のデータを置いて撮影の続きに行つてこい。戻ってくるな。」

「データ欲しがる素直ー。日程はどっちからも聞いてたし、あんたのことだから直行便で、日中のできるだけ早めの便で着く、つて考えたでしょ？ まあロスからの直行だと、早くてもほぼこつちに昼

着のしかないけど。それで到着時間は読めるし。今日の予定は何にしてみた？」

「……パリ市内の観光。」

「ほらね、そう来ると思った。で、最初にエッフェル塔でしょ。こっちもロケーションの予定はしてだし、どうせだからって撮影しながら待ってた、ってワケ。こっちが待ち構えてる、って事さえ事前に知らなければ、あんたの行動パターンなんてだいたい判るわよ。」

「本気で掛かってくる割に適当な当て推量をするな。」

「当たってるんだからいいでしょ。いつだって私は本気だよ、どういう状況であつても常に最高を目指さなくてどうすんの。じゃ、その本題。」

あのね、どう考えても私が着るよりあんたたちが着たほうが絶対映える服が何点かずあるのね。それと今回は、私のブランドの新作の撮影もあつて、そっちも同じく。どうせ市内観光なんでしょ？ 今日パリのあっちこっち観光名所で撮影する予定だから、同意してくれるんなら市内観光の足と、都度ごとリュミエールのこれ以上はない美麗なお着替えとが付いてくるんだけど。そう考えると、むしろお得じゃない？」

「……。お前も漏れなく付いてくるだろう。」

オスカーは別にリュミエールをことさら着飾らせたい訳ではないが、興味がない訳では全くない。この上ない美貌の己の恋人が最高の装いをするというのならいつだって見たいし、むしろ自分が同席していない場でそんな事をしてほしくはない。なおかつリュミエール本人もオスカーもこの領域に通じている訳ではない以上、こんな機会はオリヴィエがいる今回くらいに限られることも予想が付く、それ故の無言の数瞬。

一応の抵抗の発言はしてみせるものの。

「出来立てはやはやカップルの初デートの邪魔なんてしないってば、そんな無粋なこと。撮影の時に

外は好きだけ二人の世界に浸っちゃって。」

「それも、難しい気がしますけれど……」

リュミエールが苦笑しながら話を継ぐ。

「あの。名前が出たりとかは、」

「ないない、『写真右…トップス云々』『写真左…ボトムス云々』とか書いておけばいいから。まあ、ちよつとした話題にはなと思うけど。『誰だ』って。もちろん、ファンが付く方向性のね。」

そう言うときオリヴィエは、リュミエールの方を真つ直ぐ向き、珍しくもやや真面目な気配を軽く纏つてから話を続けた。

「あんたの今の事情はよく判ないけどさ。将来的にはそんな事、気にしなくてよくなって、ピアノストとしてあちこちで広く活動したいっていう希望があるんでしょ？　なら今のうちに、いろんな形で種を蒔いておくのも悪くないと思うんだ。今回のこういう形なら名前は出ないし、どこからか何か聞かれた時でも、あんたが意図したことじゃなくて友人に請われて仕方なく、っていう体裁も取れるんだし。」

リュミエールは数度瞳を瞬かせると、意外そうに、だが心から嬉しそうに、ふわりと柔らかな微笑をその面<sup>おもて</sup>に浮かべた。

「そうですね。…ありがとうございます。」

そこでリュミエールの視線が、オスカーへと流れる。

「ええと、でも、オスカーがいいのなら、で」

綺麗な恋人が、自分を氣遣った発言をしてくれることに、いつだってオスカーの胸は甘くなりつつも。

「良くはないが」

二人きりになる時間は、確実に削られる。

「?? では、」

「はいはい話が面倒になるから、そこでお終い、二人ともOKってことで。じゃあ交渉成立、始めようか。」

「さっきの撮影データは先に寄越せ。」

「??? オスカー、いいのですか？」

「ああ。」

いずれにせよ、リュミエールに友人からの要望をなかった事にさせるのはかなり難しい。何も言わずとも、どう言われようとも、リュミエールはオリヴィエの頼みを最終的には聞くつもりでいたはずだ。オスカーが強いて却下するのでもなければ。

にしても。

オスカーは少しだけリュミエールの傍<sup>かたわ</sup>らから離れ、オリヴィエに近寄って小声で話し掛ける。

「お前がリュミエールの事情と今後とを、そんな風に考えていたとはな。」

今になって初めて気付いたが、オリヴィエが自分と同じようにリュミエールについての詳細を知らない事は、正直なところオスカーにとつて多少なりとも心強い事だった。普段、その辺りの事情をほぼ把握しているカティスのすぐ近くにいるという事にも少なからぬストレスがあつたのだと気付くし、リュミエールのその点をあえて追及せず、リュミエールの今後をすらも考慮に入れて行動しているオリヴィエを、オスカーは多少見直した。自分も揺れたりせず、大切な恋人を信じて、かくあらねばと。

「うん、ちよつとそうかなって思ったから言ったけど、あとはまあ思い付きで適当に。受けてくれる口実にはなるかなって。」

オスカーはすぐさま前言を撤回した。カティスに紹介したことで奴の食えなさ振りをこいつに伝染

させたんじゃないだろうか、と、オスカーは己の過去の所業を振り返らざるを得なかった。

リュミエールとオスカーは着ていたものを一新し、オスカーですら軽く何かのメイク道具で多少表面を整えられたが、オリヴィエはそちらをメイク係のスタッフに任せ、自身は長々とリュミエールのメイクを自ら手掛けて。

出てきたリュミエールは、結いを解いてセットし直した長いストレートの髪、すらりとしたその細身に、さっきの格好とは一線を画した男らしいアンサンブルの装いと、その中の抑え難い甘さとを同居させ。きりと引き締まった目元と眉と、長く潤む睫毛と、物言いたげに薄ら色付けられた唇。

「どう？ リュミエール。」

「どう、というか、」

鏡を見せられ、自らの服装を見下ろし、顔を上げ、待っていたオスカーに向かって微笑い掛けて。

「オスカーが気に入ってくださるかどうか。」

「正直に言ったなら、オリヴィエを無駄に付け上がらせる事になる。後から言う。」

「あんた、そこまで言っておいて、素直に表現しない理由、もはやある…？」

エトワール凱旋門で。

アレクサンドル3世橋で。

パリ市庁舎で。

コンコルド広場で。

「三、今晚、空いてる？」

Bonjour、どはなへ。

もともとオリヴィエが着る予定の服ばかりだっただけあって、モデルとして着用する枚数はオリヴィエとほぼ体格が同じリュミエールの方がオスカーの倍ほど多く、空いた時間、オスカーは遠巻きにオリヴィエとリュミエールの撮影を眺める。

愛しい恋人の様子に気を取られていると、自然にオスカーの纏う気配が甘く緩むのだろう、女性たちからそうやって比較的気安く声を掛けられることはしばしばあり。今回は女性の二人連れで。

「やあ、美しいレディたち。合衆国から？」

「そう。あなたもでしょ？」

手の空いているスタッフとオスカーとが時折交わす雑談はアメリカン・グリン英語で、話し掛けてくる女性たちの言葉も同様であり、大半は異国の地での同国人であることを判っているの声掛けであるようだった。

「パリはどうだい？」

「綺麗で歴史があつて素敵なところだけど、スリやら何やらがとにかく多いのには閉口するわね。」  
彼女らの感想にオスカーも同意する。

パリは決して治安が良いとは言えない。狭い市内に観光名所があちらこちらと犇めき合う中、かなりの数の犯罪もしくは犯罪類似の行為がみられる。押し売り、進路を塞いでの物乞い、アンケートを装ったスリ、複数の少年少女たちの未成年ストリートギャング。ロサンゼルスもかつては酷いものだったが近年やや改善傾向にあるのに引き替え、パリでは、少なくともスリは増加傾向にあるのだとも。オスカーも渡航の事前に、リュミエールから注意を受け取っていた。

『バッグは最低でもフアスナー付きで、体の前でしっかり持てるものを。最初から持たなくて済みそうなら、その方がいいかもしれません。財布はバッグの奥か、服のできるだけ奥の方に。ジャケット

の内ポケット程度だと、たとえボタンを閉めていてもあつという間に開けて持つていかれてしまします。気付かなくても、気付いても。』

その時のリュミエールは、哀しそうに微笑つて言葉が続けて。

『戦地や貧しい国から、もしくは様々な事情があつて、多くの人々がフランスの都市部へやってきますが、そのうちの一部は。フランスが彼らを受け入れる態勢も、彼らがフランスに受け入れられようとする態度も、いずれも充分ではなくて。これはフランスに限らず、欧州諸国全般で、それから合衆国でも中米、南米からの人口の流入が、あるいは属性の断絶が、同じような問題を抱えているのかもしれない。フランス人でも彼らを嫌悪する人々は少なくありません。言葉を覚えようとせず、彼らだけのコミュニティを形成し、地域に馴染もうとせず、子供たちを教育機関に通わせず、犯罪を行わせていると。手続きをしさえすれば、せめて子供たちは皆、無償で教育を受けられるのですけれども。』

それからこうも。

『言葉を超えて、音楽で伝えられる何かが、私にあればと。そんな事を、考えたりもします。』

「ねえ、今日はパリに泊まるんですよ。よかつたら夜、どこかで落ち合つて私たちと飲みに行かない？」  
もちろん女性だけで夜間、外に出ることの治安面も考えてではあるのだろうが、女性二人のうちの一人は随分と積極的にそれ以上の態度で、オスカーの片腕に両手を回し身体を押し付けてくる。腕に当たる豊満な胸の感触は、オスカーなどにとっては慣れたものであつたし、もちろん悪い気分がするものでもないが。

「熊出没注意、を避けようとして、狼に食べられるのがご希望かい？ レディ。」

オスカーは空いた片腕をあえて女性のほうへと寄せ、その耳元で囁き、相手が両腕を解いて応じかけようとしたところでさり気なく身を翻し、背後に回つてその肩を捉えた。捕まらないようにするた

めの最善の手段は逆に捕まえてしまうことだった。この辺りの応じ方と身のこなしとは、長年の経験で積んだものというより他にない。

「申し訳ないが、今日は最愛の恋人と一緒になんだ。夜も彼と過ごす予定でね。」

「彼？」

オスカーが手首を翻し、離れた位置で撮影を続けているリュミエールを示せば、キャア、という歓声とワアオ、という感嘆とが二人の女性から同時に響く。

こちらへ視線を超越すリュミエールに、オスカーは女性の肩から手を離し、ウインクを投げて返した。リュミエールは顔を染めて戸惑い、視線を逸らして撮影の続きに戻る。

「どっちの方？ 片方は、そういえばオリヴィエじゃない？ 俳優でモデルの。」

「お嬢ちゃん、恐い想像をさせないでくれるかな。俺があんな極楽鳥相手にこの情熱を燃え上がらせる訳がないだろう。こっちを向いた清楚な方だ。」

「そうなの？ ちょつと意外かも。あなた、どちらかというと派手好きっぽいし。」

「そうか？ まあ、確かに女性が相手なら、華やかなのも大歓迎だが。」

「あら、バイ？」

「いや、ずっとストレートだったんだが。あいつだけは例外だった。」

「まあ、わからなくもないわね。オリヴィエもだけど、あの人も別の意味でとても綺麗。」

積極的、ではなかった方のもう一方の女性がオスカーの発言に応じて、オスカーは唇の端を引き上げ、彼女と視線を合わせて笑った。深々とした顕示欲。独り占めしたいのはもちろんだが、その一方で思う存分、こういう機会とぞばかりに、極上の恋人のリュミエールを誰彼構わず見せびらかして回ったかった。俺のものと。

目の前であからさまにやればリュミエールを恥ずかしがらせるが、こうして遠巻きにならいくらで



も堂々と自慢し放題だった。

「オリヴィエも素敵だけど、私はあっちの人の方が好みかな。是非<sup>みんな</sup>皆で、と言いたところだけど、夜は恋人同士の時間なのね？」

「今こうやって、オリヴィエにあいつを貸し出しているのも本当は惜しいくらいだな。用事が済めば、すぐに攫ってまた二人きりだ。」

「すつごく残念。もし偶然会ったら、その時はよろしくね。」

物分かりのいい女性たちが「じゃ、今晚、会えるのを楽しみにしてるわー！」と大きく手を上げて去っていくのを、オスカーは惜しめない笑顔で見送った。

「意外でしたね。ご無沙汰しています、ミスタ・ロックウエル。」

背後から唐突に呼び掛けられた声に振り返れば、何故こうも旅先で知り合いに出くわすのかと思わせる顔があった。いや、オリヴィエの場合は待ち構えられていたのだが、こちらはまさに偶然なのだろう。

「ミスター・ノイマン。珍しいな、こんなところで。」

「エルンストで結構です。あなたは弊行の大事な顧客ですから。実家<sup>デューリッヒ</sup>からの帰りに少し立ち寄ったところです。あなたがこんなところにいらっしやるとは思いませんでした。」

そう答えつつ、エルンストは左手の指先で眼鏡のブリッジを軽く持ち上げた。

## 3

相変わらずぴしりと髪を綺麗に撫で付け、シカゴ在住の米国人の癖に何一つ冗談の通じなさそうな真面目くさったこの銀行家は、その見た目から想像もできないシチュエーションでオスカーと懇ろに酒を交わしたことがある。

一年ほど前の初対面の会合の後、話の流れで

『もし差し支えなければ、あなたの今晚の外出とやらに、私も一緒にしてよろしいでしょうか。』  
と言われた時には、三度ばかり己の耳を疑ったものだし、店によってだいぶん雰囲気異なるがどういふところが希望か、と冗談半分に念のため聞いてみて、

『そうですね。私の希望を通していただけるとあらば、可能な限り幅広い種類の異性との出会いが、可能な限り多そうところで、是非、お願いしたく。』

という答が真摯めいて返ってくるに及んだその時には、とうとう天からアルマゲドンが降ってくる日が訪れたのかと思ったほどだった。

「弊行はプライベートバンクですが、当然のことながら信託銀行としての性質も兼ね備えておりまして。」

レーザービームが飛び交う中央のダンスフロアではとても会話など交わせない大音量のトランスを

DJがプレイする中、フロアの隅のバーカウンターで極めて場に似付かわしくない真面目な単語が綴られ、オスカーは最終戦争<sup>この世の終わ</sup>の心配をしなくてよくなったことに安堵しつつ、テキーラの入ったショットグラスを傾けてエルンストの話の続きを聞いていた。

「顧客の資産管理を弊行が取り扱わせていただく以上、相続、被相続、資産分与等が起り得ることを予め想定し、お預り資産を然るべき資産配<sup>アセットアロケーション</sup>分で運用することが必須となります。従いまして、顧客の皆様にはお話しいただける範囲で、縁戚関係、今後のライフプランなどについても伺いするのですが。しばしば、」

エルンストはそこで一度言葉を切り、ジン・リッキーのロンググラスに口を付け、何事かを思案する様子で視線を横に流しつつ、ややゆっくりとしたスピードで3分の1ほどを飲み下してからグラスを下ろした。

「縁戚関係、しかも顧客ご本人様に最も直接的に係わるもの、といえば、その最たるはもちろん婚姻関係に尽きるのですが。しばしば、急にご予定になかったはずの配偶者様をお連れになり、お相手様への資産分配についてご相談に訪れるお客様がいらつしやるのです。しばしば、しかも性急に。そのような場合、往々にして、こう申し上げては何ですが、普段、当のお客様とは全く関わりのなさそうな属性<sup>属性</sup>の配偶者様であることが多く。その後、詳しくご本人様のみにお話を伺いますと」

そういうパターンの際には、こういう場、すなわちナイトクラブ等の夜場で出会ったという割合が極めて高いのだと。

「先を見据え、弊行とお客様とで慎重に練ったはずのポートフォリオを、そうもあつさりと翻すに至る、それほど劇的な出会いの場とは。予定外のライフイベントの発生の場として、一度きちんなどのようなところか確認する必要があると思っていたのですが、残念ながら私自身は一度もそういう場所を体験したことがなく。あなたは逆に、今日のお打ち合わせの後の余談の中で、大変場馴れしてい

らっしゃるような口振りでしたので」

この男にとつてはナイトライフスポットすらも研究の対象なのだと、オスカーはしばらく愉快げに声を上げて笑つたし、エルンストは気を悪くした風もなく、そんなオスカーを視界の脇に描いてフロア内の様子を念入りに観察していた。

「それからすると、俺のような顧客はハイリスクの最たるものだろう。今回は特例まで適用して、口座を作らせておいて良かったのか？」

エルンストが勤めるシカゴのロイヤル・インステイテュート・プライベートバンク&ウェルスマネジメントでは、口座開設のための最低資産が100万ドルから（プライベートバンクとしては控え目な方だった）となっていたが、長年の付き合いのあるニューヨークのL&C法律事務所に今回、ロサンゼルス事務所が新設されたことに伴って、エルンストが銀行側代表として表敬訪問し、新人弁護士のおスカーにも資産基準を満たしていないながら特例として新規口座開設を勧めたのだった。

『何ら問題はありません。あなたなら数年の内には、瞬く間に売れっ子弁護士となつて資産を積み上げ、弊行の優良顧客になつてくださることは間違いありませんから。ええ、これはむしろ、弊行側にこそメリットのある話なのです。』

これまで何千人とお顔合わせをさせていただいた時の実績から言つても、こう見えて、人を見る目はある方（ほう）のようでして、とその時に言つたエルンストは、事務所での打ち合わせとナイトクラブでの今とで微動だに變化しない表情のまま、オスカーの間に応えた。

「いえ、あなたのような方は、却つて極めて安全なことがほとんどですね。…失礼、『却つて』は余計でしたか。

折々に華やかなお付き合いの話を、次々と別の方と親しくなさりながらたつぷり数年間は我々どもに散々聞かせていただいた挙句、ある日、実に堅実なお相手と、事前に弊行にも慶事を予めお知らせ

いただきましてから、周囲の皆様全てに盛大な祝福を受けつつ順当にご結婚なさいます。」

「ほう。そういうものか。」

「先程のお話に挙げさせていただいたような方は、むしろ清教徒ピューリタンのように、普段は浮いた話とは全く縁がなく過ごされていた方がほぼ全てと言つても過言ではなく。それもありまして尚更、そのような方々に意識の激変をもたらす場の特異性が興味深くあるのです。」

「話を聞いていると、エルンスト、大いにお前自身に当てはまるような気もするがな？」

詭うようなオスカーの声音には一切反応せず、エルンストは冷静沈着に返答を寄越した。

「そうでしょうか。確かに私自身が恋愛沙汰と縁遠いのは否めませんが、己のことを聖人君子だと思つたこともないので。」

聖人君子ではないこの銀行家の実態、が見てみたいような見たくないような、微妙な感想を抱かされながら、その後オスカーとエルンストはしばらくの間、酒を飲み交わし、それからお互いにその日の相手となる女性を確保したところで解散となつた。何というか、興味深い人種だつた。世界は広い。

去り際、何とはなしに振り返つて最後にその様子を確認すれば、「ではまず、本日の来店店の動機についてお伺いしてもよろしいでしょうか」など相手の女性に話し掛けているのが耳に入り、その後の展開が大いに気掛かりではあつたが、女性側は意外にもツボに嵌つたようで機嫌良さそうに見えたので、動向を追うのはそこまでにしておいた。その後で何が起ころうとも、もはやオスカーの責任ではない。

「俺のこともオスカーと呼んでくれ、エルンスト。ミスタ、はむず痒い。知らない仲でもないだろう？」

その時以来、久しぶりに偶然にもこのパリで再会した相手へ、オスカーはひとまずそう言葉を続けた。この男の徹頭徹尾の生真面目振りも奇想天外な思考経路も、全てはその探究心に基付くものだと判明している以上、慇懃な話はさつさと省略してしまふに限る。欧州出身で根が典型的な米国人らし

くはないこの男は、しばしば異なる考え方をしようではあったが。

「では、お言葉に甘えて遠慮なく、オスカー。」

「ところで、さっきの彼女らと別れた時に、意外、と言ったよな。彼女らの誘いを断ったことか？」

「ああ、いや。確かにそれなのですが、むしろ。失礼、その少し前から話を伺っていました。」

「少し前？」

回想で途切れた思考を過去に辿る。

「リュ：あいつのことか？」

リュミエールの名を出しそうになり、オスカーは辛うじて発声の直後に気付いて留まり、背後に向けて親指を指した。恋仲になつてからの後で、リュミエール本人の事を知らない第三者と話を交わすのは、考えてみれば初めてのことだった。ピアニスト・リュミエールは、その名こそ最近世に知られ始めているが、未だ顔出しをしていない。

エルンストはそんなオスカーの態度に少しだけ怪訝な顔を見せたものの、オスカーの言葉に頷いて、再び眼鏡のブリッジに指先を当てた。

「ええ、そうですね。立ち聞きのような形になり、大変申し訳ありません。」

「いや、隠し立てすることじゃない。お前も聞いての通り、俺の今の最愛の恋人だが。意外、か？ とびきりの美人は好物だと、お前には言った気もするが。」

「とはいえ、男性であることには間違いないでしょう。あなたも先程、ご自身で仰っていた通り、もともとは女性のみが恋愛対象だったでしょうし、今後その点については変わりないかと思われたものですから。それで、意外、と申し上げました。それこそ以前、お話しさせていただいたような場合などでもお会いしたのかと。」

オスカーは弾かれたように笑い出した。こいつ流に解釈すればそうなるのかと。リュミエールと自

分との関係性に、自分の関係者かつ、リュミエールにとつての全くの他人をこれまで絡めたことがなかったために、個々人の感想を聞くのは極めて新鮮な体験だった。

「いや、ごく真面目な出会いさ。これまでになく真剣だ。」

「左様ですか。とはいえあなたなら、どなたとのお付き合いでも、どのような出会いでも、そのように仰りそうです。」

「まあ、あなたがち否定はできないな。俺はいつだって真面目で真剣だ。だが今度ばかりは、」

「承知いたしました。」

台詞の半ばでエルンストに相槌を打たれた。どうも額面通りには受け取られていない気もする。

「:でしたら。近々、弊行がお手伝い差し上げるような、何がしかのご予定はありますでしょうか？」  
婉曲に問われたその意味するところに、以前のナイトクラブでの会話から思い至り、オスカーは軽く眉を顰めた。それは。

「結婚の予定があるかどうかということか？ いや、流石に。」

これまでの、決してまだ長いとはいえないリュミエールとの付き合いの期間で、流石にそこまでは考えたことがない。

自分はリュミエールのことを、まだ何も知らない。これまで毎日のように言葉を交わしていたが、そういう視点で自分たちの関係性を見るのなら、まだ何も知らないと言って差し支えない程度にはリュミエールのことを知らないのだと、改めてオスカーは気付かされた。リュミエールがそんな将来のことについて、どういう風に考えているのかも。

「なるほど、了解しました。大変失礼いたしました。」

ただエルンストのその返答は、どうにも自分の言葉を違う方向性で解釈している雰囲気在大いに漂わせていて、オスカーは急いで言葉を継ぐ必要性に駆られた。

「おい、別にあいつとの付き合いが遊びだつて訳じゃないぞ。まだ付き合い始めて日が浅いから、そんな事は検討していいだけであつてな、」

オスカーの本来の性的指向とリュミエールの性別のことからしても、かつての会話の『折々に華やかなお付き合いの話』のうちの一つに過ぎないと、『実に堅実なお相手』の方ではあり得ないのだと、エルンストの目にはそう映っているのは明白だった。

「…左様ですか。」

「リュミちゃん、もういいよね？ これ以上は。」

オリヴィエの、憤怒をその内に籠めたすぐ背後での声音に、オスカーは不意を打たれて咄嗟に振り返った。

綺麗に整えた眉を怒りに吊り上げてエルンストの方を睨み付けているオリヴィエと、表情と顔色を失くしたリュミエールとが並んでそこに立っていた。

「リュミエール！」

思わず口から出て、オリヴィエからオスカーへと鋭く痛い視線が投げられる。『名前を呼んでんじゃないわよ』と。なるほど『リュミちゃん』はぼやかしたのかと、オスカーはそこで初めて思い至った。

エルンストはちらりとリュミエールの方を見、口元だけでの何かの、おそらくは驚きに類する眩きを零した。その様子からするに、その一瞬で目の前のリュミエールを『幻のピアニスト』と呼ばれるそれと脳内で照合させたのは間違いないようだった。エルンスト自身がクラシック音楽を嗜むというより——「そんなものは時間の無駄」と、この男ならいかにも切り捨てそうだった——、あくまでもあらゆる話題を把握しておく客商売の基本として、その名を聞き知っていただけなのだろう。

いったんその話については措いておく方が無難と判断したのだろう、眉根に皺を寄せて黙ったまま



エルンストを睨むオリヴィエの方へとエルンストが歩み寄った。

「俳優・モデルのオリヴィエさんですね。初めまして、エルンスト・ノイマンと申します。米国シカゴのロイヤル・インスティテュート・プライベートバンク&ウェルスマネジメントの取締役を務めております。お目に掛かれて光栄です。」

ロサンゼルス of 事務所に訪れた時も銀行を代表してのことだったが、この一年ばかりでさらに役職が上がり、大手都市銀行の傘下に過ぎないとはいえ、エルンストはその若さでは異例の取締役に就任していた。挨拶するエルンストから握手のために差し伸べられた片手を無視し、オリヴィエは腕を組んだまま刺々しい声音を隠しもせずに応える。

「銀行家ね。プライベートバンク、なるほどオスカー、あんたの口座があるって訳。だからって人の事情に、そこまで首を突っ込む？ オスカーの知り合いなら挨拶をつてリュミちゃんと言うから、近寄って来てみれば、」

「ごめんなさい、」

オリヴィエの言葉に続いて、反射的にとしか言いようのない声音でリュミエールが呟いた。オスカーへ視線を遣るその瞳には光の気配が全く無く、思わずオスカーは片手でリュミエールを性急に引き寄せて抱き締める。

「お前は何か悪くない。何をどう聞いた？」

耳元に唇を寄せて低くそう囁くが、どう聞いたも何も、今まで自分とエルンストとが交わしていた会話だ。己の首元に艶やかな髪の毛の流れの頭を強く抱え寄せて囲いつつ、脳内でこれまでの話の流れを振り返る。

「いつからいたんだ。」

顔を上げ、オリヴィエに問うていると明らかに聞き取れるオスカーの声音にすら、腕の中のリュミ

エールの身体が震えたのが判った。

「あんたが後ろ向きに指した親指が刺さるかと思ったわよ。その前に女の子たちに愛想振り撒いてたのも遠くから見たけど。」

答えるオリヴィエの親指云々の表現は極端としても、エルンストとの会話のほぼ最初から最後までを、オスカーのすぐ後ろで二人が聞いていたことになる。つまりエルンスト側から見れば、オスカーの後ろの二人を完全に視界に入れた状態で会話を続けていたということだった。

最初の自分の『最愛の恋人』発言がリュミエールにちゃんと届いていたのならいいのだが。『とびきの美人は大好物』これは微妙か、『男性であることには間違いない』、『女性のみが恋愛対象、今後も変わりない』、『意外』、『以前お話しした場などでお会いして』、

「あんたの笑い方で判ったわよ、オスカー。そういう遊びでの出会いの場所ってことよね。オスカーならそうでしょうし、その手の出会いが悪いって言いたい訳じゃないけど、だからといって私の大事な友人まで赤の他人にそういう風に解釈されるってのは、率直に言って不愉快。」

この場合の『大事な友人』が指し示す範囲に、当然ながらオスカーは入っていない。

「……大変申し訳ありませんでした。念のため確認しておく必要があるかと思いましたが。」

「ぬけぬけと、よく言うね。」

その続き、『どなたとでも、どのような出会いでも』、『いつだって真面目で真剣』、

『結婚の予定があるかどうかということか？ いや、流石に。』

そんな約束をリュミエールが今の時点で、欲しがっていたのではないことくらい判る。だが散々『意外』、『女性だけが対象』、『男性だから』など重ねて聞かされたリュミエールが、どん

な想いでその時のオスカーのその言葉を受け止めたのか。どれだけ後から訂正していても。

「リュミエール、そういうつもりじゃなかった。愛している。お前とのことはきちんと考える。」

リュミエールはオスカーの腕の中で黙って小さく頷いた。その身体は不規則に時折震えている。

「流石にお相手様を目の前にして、直接的に何うのは躊躇われましたので、婉曲にお尋ねしたのです。」

「言ったも同然だろう。そもそもなぜ会話を続けた。」

「私が文句言おうとしたらリュミちゃん袖引いて止めた。だからって私たちをあんた越しに目の前にして、話し続けるそいづもどうかと思うけど。」

「申し訳ありません。制止されなかつたので、そのままお話を続けた方がよいのかと考えたのですが。」

「ごめんなさい、聞こうとした訳ではなくて、」

「お前はもう謝らなくていい、リュミエール。」

オスカーはリュミエールの正面へ向き直り、両腕を使って強くその身体を抱き締めた。

「……では、私はこれで失礼いたします。慶事の際には、是非弊行へもお知らせください。」

「マジ最悪、あんた。二度と顔出すな。」

「オリヴィエさんにも弊行への口座開設をご検討いただきましたのですが、当分は難しそうですね。残念です。是非、またの機会に。」

立ち去るエルンストの背中へ向けて、オリヴィエは邪険に手を振り払い、オスカーは未だ震えの止まらないリュミエールの身体を抱き締め続ける。

「ごめんなさい、大丈夫です。こんな程度のことです。動揺しすぎました、貴方はいつもたくさんの言葉を私にくれているのに。あの方もきちんと話してくださっただけで、他意がないのは判ります。本当にごめんなさい。」

「謝らなくていい、まだ顔色が悪い。こんな程度だとも言つてほしくはない。」

二人の身体の間に手を割り入れて緩やかに身を引こうとするリュミエールをオスカーは強く引き戻し、冷たい頬と冷え切った背中とを擦<sup>さす</sup>つて、その温度が戻るまで身を寄り添<sup>よ</sup>つていた。

「あんなのに限つて、いざ自分が心底惚<sup>ほ</sup>れ込む相手に出会つたりなんかした途端、錯乱しまくつて雨の中そこいら中を走り回つたりとかすんだから。」

吐き捨てるようなオリヴィエのその発言の内容に、オスカーとリュミエールは二人揃<sup>そろ</sup>つてオリヴィエの方へと視線を遣り、それから互いに目を見合わせて、思わず同時に吹き出した。

「あの方が？　ちよつと想像できないですね、」

「もし本当だとしたら、この上なく愉快だな。」

「そうとでも考えないとやつてらんないじゃん、むかつく鉄面皮ー。ただ案外いい線いつてる想像かもつて今、ちよつと思つた。」

とうの昔に人波の中へ消えた背中を追い睨<sup>にら</sup>むように、オリヴィエは目を一度遠くへ眇<sup>す</sup>めてみせると、表情を解いてリュミエールの方を見、華やかに笑い掛けた。

「だいぶん顔色も戻つたね。はい、二人とも予定してた分の撮影は終了、ありがとねお疲れ様ー。元の服に着替えて、リュミエールはヘアセットし直したげる。」

「いえ、自分でもできますけれど、…、……。」

オリヴィエの方を向いてその申し出の台詞を一度は遠慮したリュミエールが、何かに気付いたように言葉を切り、緩やかに視線を流してオスカーへと振り向いた。

その氷青色の瞳と、しばし目を見合わせて。

ふと小さく、悪戯<sup>いたづ</sup>げに微笑み、オリヴィエへと向き直ると、

「そうですね、やつぱりお願いします。できるだけ『とびきりの美人』に、仕上げてくださると嬉し

いです。」

そんなリュミエールの言葉に、オリヴィエは心から喜ばしそうに笑い、任せといて、と請け負っている。

リュミエールの口に上ったオリヴィエへのその要望は、オスカーを苦笑させながらも愛おしさをより募らせ、その胸を温めて安堵させる、美貌の無二の恋人の可愛い旋毛曲げだった。

「これ、是非につて。こっちの代理店の関係者から貰っちゃつて。」

明日の14時30分開演、オペラ座、ガルニエ宮。演目は『アンドレア・シエニエ』。

あんなたちが落ち着いたら今度三人でも飲みたいからよろしくねー、と。

リュミエールのヘアスタイル(と、多少のメイク)を整えると、いかにも仕事のできる風であつという間に撤収したオリヴィエとスタッフとを引き留める隙もなく、二人はその場に残されて。

さらりと渡され反射的に持たされたままの手元の2枚のチケットを、オスカーはしばらく無言で眺め、それからリュミエールに問うた。

「どうする？」

リュミエールはオスカーの手元のチケットを改めて覗き込み、オスカーの顔を見返し、その唇は物言いたげに薄ら開かれるが、目線はオスカーの様子を窺うように、その氷青色の瞳へと視線を投げ掛けて。

「お前の望む通りに言ってくれ、リュミエール。心配しなくても、キャンセルに高額が掛かるような類の予定は入っていない。」

「ごめんなさい、ありがとうございます、見たいです。」

「OK。じゃ、明日の昼はこれで。」

明日の2日目はリュミエールとの話次第で、ヴェルサイユかフォンテーヌブローか、ルーヴル美術館を前倒して長く時間を取るか、何ならデイズニール・ランド・パリであれこれ、などと考えていたが。

最終日の3日目は航空機の予定があるためあまりパリからは離れられず、ルーヴル美術館を除くパリ郊外の3件については次回以降の来欧の機会になりそうだった。多少惜しい気もしたが、大丈夫、ヴェルサイユもフォンテーヌブローもデイズニール・ランドも逃げない。多分。

そしてこの先ずと、リュミエールとの思い出を積み上げていくための逢瀬の機会を、オスカーはいつでも、何度でも重ねていくつもりだった。ずと、何度でも。誰がどんな風に、自分たちのことを評そうとも。

「知っている演目なのか？」

オスカー自身は、ヴァイオリンを中心とした器楽曲以外のことをあまり知らない。

「ええ。音楽史や音楽技法でオペラのことを学ぶこともありますが、それを措<sup>お</sup>いても、何しろフランスが舞台の話ですし。」

少しだけ嬉しそうに見えるリュミエールは、やはり根っからの音楽家だからなのだろう。オスカーへと笑んで答えると、オリヴィエの手で結われた長い髪の毛の動きの珍しい感触を楽しむように、その歩みは小さなステップを踏み、緩く頭を靡かせて髪を揺らし、両手を軽く広げ、目を閉じ天を仰いで。

「フランスの？」

「はい。イタリア・オペラなので、『アンドレア』というイタリア風の名前になっていますが。アンドレ・シェニエ、18世紀末のフランスの詩人です。」

そうして再び目を開いて、歩みを止め、オスカーへと微笑み掛ける。

その瞳の色がふ、と、その時、より深い色を帯びたように、オスカーには見えた。

「フランス革命。その前後の激動の時代を、詩と愛に生きた、恋人同士の物語です。」

パリの夜景を前に、目を伏せ、オスカーの肩に頭を凭れ掛けさせるリュミエール。

両サイドの髪を多めに残し、それ以外の髪は丁寧に纏め上げられて後頭部で一つに結ばれ、そこから再び長い流れを豊かに描いている。ラインストーンの本は少しの髪束と共に結び目を美しく取り巻き、もう一本は一部の髪と絡み合うようにして結び目から長く綺麗めかしく流れ落ち、艶やかな髪の流れをこの上なく引き立てて。

蠱惑的な項<sup>うなじ</sup>を惜しみなく晒しつつ、艶やかな髪の梳き甲斐をも存分に残したその髪型は、見る度 hands 伸ばし、目元から掌を差し入れて応えるように触れ梳き流す誘惑を抑えることができない。今も誘われるままそうすれば、伏せられていた深海色の瞳は揺らめいてオスカーを見上げ、オスカーは髪を梳いた手をそのまま白い首筋に添え、軽く上向かせて、優しく微笑うリュミエールに笑い返してその唇へ小さなキスを落とした。

二人掛けのソファが向いている目の前の窓の外、やや下方向には、夜のパリの落ち着いた街並みと柔らかくそれを照らす光の並び。旧市街で高層のビルではないために、マンハッタンの眼下一面に広がる夜景のような派手さはないが、淡くしつとりとした雰囲気この眺めも悪いものではない。

とはいえ、バーのこの手の窓際席の良さはそこではなく、店内の大部分を背後にすることによって人目を避け（たように思わせ）、それこそ恋愛初心者の美貌のこの恋人を思う存分、気兼ねさせずに甘えさせることができる点にあるのだが。

「リュミエール。」

何か甘い物を、と店にリクエストして提供されたミルクレープの、一欠けをオスカーがフォークに掬い取りリュミエールの口元へ寄せれば、リュミエールはフォークの前でぱちりと瞬いてから、視線を移動させてオスカーを見上げた。

「ええと。はしたなかったりは、しないでしようか。」

「全然？ 恋人同士ならごく普通のことだ。」

「そうなのですか？」

「ああ。」

オスカーは頷いた。刷り込みは最初が肝心だ。

「どなたかが見ていたりとかは、」

「誰も見ていないさ。」

囁いて答える。

オスカーは当然、自分たちがこの場にいる全員の注目を全力で浴びていることを知っているし、リユミエールと自分とが念のためにと確認で緩やかに背後の店内を振り返るその際、全員が全力で目を逸らしていることも知っている。

「な？」

「ですね。でしたら、」

安心したように微笑った恋人は、唇を開いてオスカーの差し出したフォークの先の一切れをそつと咥え、もぐもぐと小さく口を動かした。

「美味しいです。」

「良かった。」

続けてオスカーがアーモンドを一つ指先に摘み、口元へ近付ければ、逆らわずにそれも口にすする。

食べ終わってバジル・ギムレットで喉を潤す、その素直さに愛しさはどこまでも募って、グラスをテーブルへ戻した手にオスカーはすぐ手を重ね、目を見合わせてから再び軽いキスを交わした。

空港での再会時からしばらく、逢いたかった一心で周囲に憚ることなくその身をオスカーに委<sup>まか</sup>せて



いたリュミエールは、オリヴィエたちと合流してから我に返ったように、オスカーの引き寄せる手や寄り添おうとする身体に都度、戸惑いや躊躇いの距離感を見せていたが。エルンストとの昼の出来事が、この点だけは良い方に作用したと言っているのか。あれ以降は再び、頬を撫で髪を梳く手や身体に廻される腕を通してのオスカーの暖かみに、安心したように身を寄せてくる。

「……………」

とはいえ、今のようリュミエールがオスカーの方を伺いながら、何かしらを物言いたげにしつても言い出さない様子は、ディナーの最中からこれまでも何度か繰り返してあつて。

「リュミエール？」

オスカーはその身体を一層引き寄せて、囁くようにして額と額とをこつりと合わせ、間近の瞳を見合わせた。これまで問う度に「いえ、」とはぐらかされたそれを、今日中に聞き出してしまわないことには終われないと思っていたし、アルコールも程よく入ってそろそろ頃合いかと考えたので。

「……あの、」

「ん。」

躊躇い<sup>ため</sup>迷いながらも言葉を紡ぎかけるリュミエールを、促すようにして。

「…あの。貴方は、今日、この後でご予約が入っているのですか？」

「俺の予定？」

リュミエールの問い方からして、二人でのこの後のことを聞いているのではないし、どこか弱気なその声音は、色気のありそうな有難い誘いの類の話でもなさそうだった。

「いや、何も？ お前を家まで送っていくくらいだが。」

「家まで…送っていただいて、その後。……他の方たちと。ですとか。あの、もしご予約があるのなら、私とは早めに終わった方が、」

オスカーは内心で盛大に眉を顰め、リュミエールの唇に一度指を当てて続く言葉を止めさせた。これは慎重にかつ全部、徹底して聞き出さないと相当に危ないパターンだと、脳内が全力で警告を発する。

曰く。昼、オリヴィエたちと合流してから、撮影の合間に時間の空き気味のオスカーが次々と女性たちに声を掛けられていたのは見ていたものの。最後にコンコルド広場で会った二人の女性とは、特に親しそうに、オスカーも溢れるほどの笑顔で。腕を絡められたり、耳元で囁いたり、その肩を抱いたり。別れ際の彼女らのオスカーへの挨拶は「今晚、会えるのを楽しみにしてるわ」と。オスカーからこちらに投げられたウインク：「そういうことに決まったからよろしく」という意味もあり得るのかと思つて。

躊躇<sup>ためら</sup>いがちにぼつぼつと綴られる、要約すればそういう意味合いのリュミエールの話をそこまで引き出してから、オスカーはそれこそ人目も憚らず力の限りにリュミエールの身体を引き寄せて抱き締めた。そうでもないかと、代わりに盛大に顔を片手で覆つて思い切り天を仰いでしまひそうだった。

彼女らと会ってから別れるまで、最後の台詞がそういう挨拶になったことの経緯までをオスカーは逐一説明し、どこか力の抜けた様子のリュミエールを固く抱き締めたまま、オスカーも盛大に脱力して呟いた。

「あの程度は単なる社交辞令と思つて、愛想を撒いた俺も悪いが、それにしても。あの広場の後からこつち、ディナーの間もずっとそんな事を思つていたのか？」

「ごめんなさい、」

「謝らなくてもいい、ただ今後、お前には同じように考えてほしくはない、哀しませたくないんだ。合衆国<sup>ステイツ</sup>にいる時だつてそうだが、ましてやお前と一緒にいられている間に、他の女性との予定を入れようなどと思う訳がない。…どうしてそう考えた？」

「貴方はとても魅力的ですし、貴方と共に過ごしたいと考える方たちの気持ちは、とてもよく判りますから。」

「…俺の気持ちは？ お前とだけ一緒にいたいと思う、俺の。」

「……それは、」

腕の中のリュミエールの身体が身動ぐ気配があり、オスカーは腕の力を緩めて少しだけリュミエールの身を離し、見上げるその瞳と目を合わせた。

言葉を口にするのを躊躇う様子のリュミエールの、頬に手を添え、目線で静かに促す。耐えかねたように、リュミエールの視線がオスカーから逸れ、伏せられた。

「……ごめんなさい。いつもこんなに、大切にしてもらっているのに。」

自分『だけ』に向けられる好意というのが、今でもわからないんです。貴方に想っていたいて、とても嬉しいとは思うのに、納得はできていなくて。なぜ私が、と。

それこそ、私以外とのお約束があると言われた方が、よほど腑に落ちるようなところがあつて。…ごめんなさい。」

オスカーは黙つて、とりあえずもう一度強くリュミエールを抱き締めた。

これは相当に難題だ。本人の納得の問題である以上、オスカーとしては粘り強くこれからも働き掛け続けていくより外にない。リュミエールがそんな風に考えることの原因の一端が、今日のエルンストとの会話も含めて、過去のオスカーの女性遍歴にあることも間違いはなく、己の行いをこういう時ばかりは深々と後悔するものの、どうあっても過去は変えようがない。

「俺が心の全てを捧げているのはお前だけだ、リュミエール。納得はできなくても、理解はして欲しい。」

「…はい。ごめんなさい。」

「謝らなくていい。俺が愛したのはお前だ。そういうお前も含めて愛したし、お前が変わるのならば、俺の手で変えていきたい。お前をもっと幸せにしたい。」

リュミエールは黙って頷き、オスカーの胸に顔を擦り寄せている。涙の気配がしたから、オスカーはそのままリュミエールの頭を撫で、背を擦さすってやった。

「お前は悪くない。話してくれて嬉しいよ。ありがとう。」

リュミエールがその本心をオスカーへ話したことを、後悔しないで済むように。

リュミエールはもはや頷くこともできない様子で、声を抑え、時折身体を震わせていた。

「他に俺に話しておきたいことはないか？ この際だ、何でも言ってくれ。」

しばらくの後、濡れた瞳をようやく上げて申し訳なさそうにオスカーへと微笑い掛けたリュミエールに、オスカーも笑い返して尋ねる。

「他に……」

目を瞬かせてから、宙に視線を流してリュミエールが思案する間、オスカーは追加で注文したマティーニをゆっくり飲んで待っていた。

次は何が来るだろうか、とオスカーが衝撃に備えた、その時、リュミエールの艶やかな唇から語られた流麗な声音は。

「話したいことというか、そういうば。この間のあの件の続き、なんですけれど。」

次、貴方に逢ったら、貴方をこの胸に抱き締めたいと、思っていたんです。……いいですか？」

びしりと、オスカーと店内の空気とを完全に固まらせて。

たっぷり5秒は硬直した後、オスカーはゆっくりとマティーニのグラスから唇を離し、のろのろと手を伸ばしてテーブルの上へグラスを戻した。マティーニのグラスの中のオリーブが転がり落ちるかと思った、と考えながら、不思議そうな顔を見せるリュミエールと視線を交わす。

それは。ここでは。他人の目線があるから。いや、さつき自分が言った、『だれも見えていないさ。』と。オスカーは当然知っている、店内の全員が固唾を飲んで、こちらの成り行きを伺っている。それは。

「……それは、できれば、もう少し今後で。願いたいんだが。」

「…そうですか？」

強張ったオスカーの返事と、残念そうな雰囲気を感じもしないリュミエールの声音に、店内の緊縛が安堵したように、もしくは惜しむように、奇妙に解けていった。

「送っていただいてありがとうございました。居住者の私が旅行者の貴方に送ってもらうというのも、何だかちよつと変な感じがしますけれど。」

「お前が嫌でなければ、住んでいる場所を実際に見ておきたかったからな。そう治安も悪くなさそうで安心したよ。」

狭いパリで、何しろグランドピアノを持ち込む必要があったために、アパルトマンの1階の元は空き事務所だった物件を防音対策で徹底的に改装したものを、さらにその後の伝手で借り受けているのだという。細い通りに面した側の元事務所としての入口は封鎖して、通りに違和感のないように軽いリノベーションが加えられており、居住のための出入口はアパルトマンの共同ドアの奥にある。

リュミエールの住居の目の前のここに至っても、繋いだ手は容易に離すことができず、そのまま言葉もなくしばし目を見合わせて。

「…また、明日も。会ってもらえますか？」

「…もちろんだ。」

別れに際して紡がれるそんな言葉が、オスカーの胸を締め付け、切なさ<sup>と</sup>と愛しさを止め<sup>ど</sup>無<sup>く</sup>湧き

起こさせる。身体を引き寄せ、抱き締め、キスを交わして。

手を伸ばし、髪に留められたピンを一つずつ外していった。リュミエールは逆らわず、されるがままにオスカーの手に任せている。

2本のラインストーンも外し、後頭部で結い上げた紐を解いて、ふわりと髪が流れ落ちる。軽く数度梳けば、型も付かずに艶やかな流れが纏まり整つて。

目を見合わせ、もう一度唇を重ね、抱き締め、項うなじに手を差し入れ。愛しくて、この夜を別れ難がたくて。

「…愛している。」

「…私も。」

ただひたすら、それだけに尽きた。

幕が上がり、観客の目前で繰り広げられるのは、これから訪れる客人たちを饗応すべく着飾った女主人や下男下女が準備に忙しく行き交う、パリ郊外の貴族の邸宅での絢爛豪華な饗宴模様。

「にしても、物語の端緒から不穏だな。しかも愛や恋故でなく、虐げられた平民による革命の気配で、とは。」

「そういう時代を過たず描き出している、とは言えるかと。」

「流石はヴェリズモ・オペラ。バロックや古典派とは訳が違うな。」

コワニー伯爵家の華麗な宴の準備の最中、バリトンによつて滔々と歌い上げられるのは、生まれながらにしてコワニー家の召使いでありながら書物に親しみ篤学で、故にこの虚飾と退廃に満ちた貴族社会を心の底から呪い蔑む、平民ジェラルルの怨嗟の念。

「筋書きは知っていますか？」

「いいや。昨日のうちに粗筋を確認した程度で、結末までは読んでいない。どちらかというと、制作年代頃のイタリア情勢について調べたりはした。」

「貴方らしくていいですね。物語の流れについては、そのくらいの方が楽しめますと思いますよ。」

自分の発言のどの辺りを指しての『貴方らしい』なのかは今一つ定かではなかったが、そういう風にリュミエールが何かしらの形で自分のことを評するのは、オスカーにとつてそこはかとなく心地よ

く、どこか少し<sup>くすくす</sup>樂<sup>たの</sup>つたい気分もした。

宴の準備の進む中、コワニー伯爵の娘、美しきマッドレーナはこの宴席への参加に乗り気でない。宴は退屈で、ドレスは窮屈だと。下女のベルシはそんなマッドレーナを宥め、母親の伯爵夫人は責めて、マッドレーナは洪々ドレスに着替え、髪を飾り立てる。やがて招待客が次々と現れ、聖職者や貴族たちが挨拶を交わす中、詩人とはいえ平民に過ぎず、そんな虚栄を憂えるアンドレア・シエニエは、マッドレーナの瞳の中に生の歓喜を見出す。

その二人こそが、この物語の中心を織り成す、やがて恋人同士となる二人だった。

「とはいえ、マッドレーナはまだ愛を知らず。」

舞台を視界の端に入れながら、リュミエールがゆるりと、深海色の瞳の視線をオスカーへと向け。

「戯れに詩人へ向けて、愛の言葉を<sup>もてあそ</sup>弄<sup>も</sup>び。」

誘われるように、オスカーは薄く笑いながらリュミエールの片手を手に取り、指先で捉えたその形の良い指先へと唇を寄せ。

「詩人はマッドレーナを諷め、虚飾と腐敗に満ちた世を憂い。その中でなお燦然と輝く、真実の愛の尊さを力の限りに詠う。」

著名なテノールのアリア、『ある日青空を眺めて』だった。

「俺には当然敵わないが、主人公がまああまの美丈夫で何よりだ。声もいい。お前の天上の声音には遥か及ばないが。」

リュミエールは取られたままの手に逆らわず、オスカーのそんな低い声に微笑って返した。

詩人シエニエの真情溢れる薫陶を真正面から浴びたマッドレーナは、己を深く恥じ、謝罪の言葉を口にしてその場から走り去る。

「お前は愛を<sup>もてあそ</sup>弄<sup>も</sup>んだりはしなかっただろう？」



指先に唇を付けたままオスカーが囁き、もう一方の手を伸ばして、掌をその艶やかな頬に添えた。「弄ぶことすらできない程に、何も。何も知りませんでしたから。彼女よりもっと酷いことになっていたのかも、しれませんが。貴方に出会えていなければ。」

「お前が愛を知らなかったことを、悪いことだとは思わないが、」

オスカーは掴んだままだったリュミエールの指先を離し、頬に触れていた手をさらに伸ばして首筋へと廻し、軽く力を込めてその身を緩く抱き寄せた。

触れ合い寄り添う身体の、染み渡る暖かさを実感する。

「お前に愛を教え、伝え続けるのは、いつだって俺でありたい。」

宮廷社会の矛盾を声高に批難したシェニエもまた、その場を辞し。

何事もなかったかのように続けられようとしたパーティーへ、貧民の一団が乱入し、召使いのジェラルドもまた、コワニー家と決別して彼らとともに去り、やがて来る革命の未来へと身を投じた。

それでもなお変わらぬ、おそらくは変わることのできなかった優雅な宴の、長らく続いた貴族社会の終焉の気配とともに、第一場の幕は降りた。

「第二場。5年後の場面までの、この幕間に、フランスでは実に様々な出来事がありました。」

リュミエールの揺蕩うような声が、歌劇の流れを補足してオスカーに囁き掛ける。

「三部会の招集とその破綻。フランス革命の始まりを告げるバスティーユ襲撃。国王ルイ16世と王妃マリー・アントワネットの処刑。……二人が断頭台に架けられたのは、当時の『革命広場』。昨日のあの、コンコルド広場、その場所です。」

リュミエールがどこか咎めいた気配で、だがその咎はまるでリュミエール自身に向けられているか

のように、オスカーへと淡い微笑を投げ掛ける。

オスカーがなぜそう感じたのか、オスカー自身にも明確な説明はできなかった。

「共和制が樹立した後も、争いは止まず。」

自由貴族、ブルジョワジー、第三身分<sup>平民</sup>の革命諸派の内部分裂。幾度も繰り返される抗争、加速度的に急進さを増す革命勢力。果ては各地での内戦の上に、旧体制の周辺欧州諸国からの包囲網と、それに抗うフランス革命戦争。その最中<sup>さなか</sup>で沸き起こった、『La Terreur』<sup>恐怖政治</sup>。中心にいたのは、「

第二場、セーヌ河畔のペロネ橋の袂<sup>たもと</sup>。数多の民衆が熱狂的に迎える姿、

「ロベスピエール。」

オスカーが呟けば、呼応するようにリュミエールの言葉が続いた。

「革命裁判と処刑、獄死、内戦、対外戦争で、失われた命は50万人とも100万人とも。人口2700万人の、当時のフランスで。」

……避け得ることは、できなかったのかと。よく、思います。」

目を憂いに細め、悼みの声音で。

舞台の上で民衆に囲まれ歓声を受けるロベスピエールやその他の領袖<sup>りょうしゅう</sup>ら。その中には、革命の立役者となったかつてのコワニー家の召使い、ジェラルルの姿もある。

舞台の隅、革命に共鳴はしたものの穏健派であったシェニエは既に時流の流れから遠く、かつて急進派を批判した言動から、人心を乱す者として身の危険をすら感じざるを得ない立場にあった。親友のルーシェは彼に逃亡を促すが、シェニエは繰り返し彼の元へ届けられ、繰り返しシェニエを励まし力付けた手紙の差し出し人、「希望」を名乗る女性<sup>ゆえ</sup>への愛故に、それを拒む。

「ロベスピエールは弁護士だったそうだな。」

「ご存知でしたか。」

「法科大学院の在学中に初めて聞いた。父親も弁護士で26歳で結婚し、花嫁はその時、既にロベスピエールを身籠っていたと。当時のフランスの敬虔なカトリック社会の中では、婚前交渉など破廉恥の極み。その息子が後年、世界にも名高い恐怖政治の首領となった、と知って、」

舞台を去るロベスピエール、狂信的に彼への崇拜を叫ぶ民衆の姿を目で追いながら、

「…少し、身の引き締まる思いがしたのを覚えている。」

オスカーは薄ら寒そうにそう小声を零し、リュミエールはそんなオスカーを見ながら声を立てずに喉の奥で笑って、その腕に腕を絡め、身を寄せた。

「ちなみに、貴方にご子女ご子息は？」

「いない。……多分。」

素早い断言と男側であるが故の極めて正直な付言は、ひよつとすると昨日の出来事に近しくリュミエールを傷付けるかとも思ったが、オスカーのその回答はリュミエールの氣に入ったようで、絡む腕越しに小さな笑いの氣配が伝わった。

そうして舞台上では、再会を果たしたアンドレア・シェニエと「希望」であったマッドレーナが、彼らを共に取り囲む恐怖と危険、互いの不安と、それでも絶えることのない希望とを交わし合い、永遠の愛を誓っていた。

だがそんな二人の歓喜も、次の瞬間、伯爵家の頃からマッドレーナに恋慕を傾けていたジェラルルによって裂かれようとし、シェニエは親友のルーシェにマッドレーナを託して、杖に仕込んだ剣を抜き、自らはジェラルルと対峙する。

「悪役と思われがちなジェラルルですが、彼の立場は複雑です。遙か以前から叶わぬと知りつつマッドレーナを愛し、革命が起きて後は動乱の最中<sup>さなか</sup>で行方不明となったマッドレーナを探し続け、ようやく見付けた彼女は既にシェニエと愛を誓い合っていて。シェニエと一度は対立するものの、彼はシェ

ニエの剣で傷付けられた後、騒ぎが周囲へ露呈する前に、確かに言っているのです。」

バリトンが力を振り絞り歌う、

『逃げる、シエニエ！ 革命裁判所<sup>フリーキエニエ</sup>検事はお前の名をリストアップした。』

「……1794年6月の当時。革命裁判所の裁判に掛けられるというのは、逃れられぬ死刑宣告と断頭台<sup>ギロチン</sup>での処刑とを、そのまま意味していました。」

『行け、そしてマッダレーナを守ってくれ！』

「愛する相手が同じなら、協力して彼女<sup>マッダレーナ</sup>を守ればいいものを。わざわざ一度は決闘するなど。解せんな。」

オスカーが心底不可解そうに呟けば、リュミエールは微笑いながら、詠うように応えた。

「私も、経験はないですけど。」

一度はその立場になってみれば、何かが判るのかもしれませんがね。」

第三場。アンドレア・シエニエは捕らえられた。

裁判とは名ばかり形ばかりの、一方的な死刑判決は目前に迫っている。

『大々的に詩人を告発し、世間をその名で大いに轟かせれば、あの女はやってきますよ、ここへ。愛する男を救おうとして。あなたに助命を乞おうとして。』

これから裁判が開かれようとする法廷で、密偵はジェラルルに囁く。

『そこをあなたが、奪ってしまえばいいのです。』

その甘言に抗えず、シエニエを革命の敵として告発する数々の文章を綴り署名する自身を、ジェラルルは心の底から呪う。革命を心から信じ、世界と万人への愛を信じた己が、その愛故<sup>ゆえ</sup>に淪落するこの様を。

だがそのジェラルルも、己の危険を顧みず現れたマッダレーナの言葉に改心する、『彼の命を贖<sup>あがな</sup>えるのなら、私の身を捧げます』と。躊躇<sup>ちゅうちゆ</sup>いのない言葉の尊さに。

高らかに歌われるソプラノのそのアリア、『亡くなった母が』の途中、オスカーはリュミエールがその歌声の一節に、目を細め、夢見るように重ねて歌うのを微かに耳にした。

「... Porto sventura a chi bene mi vuole...」

珍しくも、そう。

「愛<sup>あい</sup>を繰<sup>くり</sup>返し歌い上げる印象的な一節ではなく、リュミエールが口にしたそのフレーズが何の台詞なのか、その場のオスカーには判らなかった。

裁判が始まる。

シエニエはそのペン、その詩をもって祖国を讃えた己の生涯を誇り、死を恐れぬことを歌い。

命を賭してシエニエを救うとマッダレーナに約束したジェラルルは、告発の虚偽を明らかにし。

だが最終的に法廷の空気を支配し、勝<sup>まさ</sup>ったのは、血に飢えた数多の民衆の熱狂だった。下された判

決は死刑。

収監され、翌日には断頭台に架けられるシエニエの下へ、マッダレーナはジェラルルとともに、身分を偽り面会のため刑務所へと入ってゆく……

「貴方は、結末をご存知ないと」

リュミエールがオスカーの方を見、囁き掛けた。

「そう、仰いましたね？」

その瞳の色は、昨日のコンコルド広場、オスカーに初めてこのオペラのことを教えた時の、深みを

増した青の色をしていた。

リュミエールはガルニエ宮を出てオペラ広場の方へと向かい、手足を軽く伸ばして空を仰ぐと、フアサードの正面の階段を上って人波を逃れ、背後を振り返って遅れて後から付いてきているオスカーをそこで待った。

「いかがでしたか？」

「納得いかない。」

同じく階段を上りながら、不満をその表情から隠しもせずオスカーは眉を顰めて零す。

「男の運命など本人の選択で、死も已む無しとするのは構わない。が、彼女がああなるというのなら話は別だ。唯々諾々として享受したりなどせず、最後の一瞬まで全身全霊で運命に抗うべきだろう。」

「貴方ならそう仰るのではないかと、何となく思っていました。貴方らしくて素敵です。」

リュミエールはそんなオスカーへ、少し離れた距離から微笑みを投げ掛ける。

「ただ、舞台のシェニエのあの選択は、あれはあれで、彼女の魂を救ったのだと。私は、そうも思いますよ。」

「……救い。」

オスカーの歩みはオペラ座の正面、フアサードの中央、ゆつくりとリュミエールの傍らへ追い付き、二人は目を見合わせ、視線を交わした。

「……お前がシェニエならどうする？ 舞台の筋書きと同じように、彼女が来たことを喜び、受け入れるか？」

「私が、シェニエなら……？」

リュミエールはオスカーの間を受けて、目線を下げ、考え込み、目線を上げて、再び考え込み。そうしてふと、最善の回答に思い至ったように、この上なく美しい笑顔で破顔して。

「そうですね。私のことなど、忘れてほしいと。私など一度も存在しなかったかのように、忘れて、幸せになつてほしいと。ただそれだけを、願うと思います。」

オスカーは絶句した。ただひたすらに、どこまでも言葉を失った。

来るな、でもなく、ましてや来てほしい、でもなく、忘れろと？

オスカーが手を伸ばしその頬に触れようとする、それが動きとなつて顫れる一瞬前、リュミエールは緩やかに身を翻して、ファサード前の階段を一步ずつ下り始めた。

そうして顔を上げ、仰ぎ見ている天は、昨日と打って変わつて雲の垂れ込める、灰色の空。ややもすると雨が降り始めそうな空模様で。

「...Porto sventura a chi bene mi vuole...」

再び、リュミエールのあの歌声が、オスカーの耳に届いて。

「...リュミエール。その台詞は」

一体、とオスカーがリュミエールに訊ねようとした時、オスカーの目線の先、そして階段を下り終わり、前方へと視線を戻したリュミエールの正面には、

「...：感心いたしませんな。そのような言葉、そのような歌詞を、口になさるなど。」

トレンチコートと手袋とを身に纏い、そうリュミエールに語り掛ける大柄な男の姿があつた。

右目の脛から頬に掛かる鉤裂き傷。

リュミエールは自らに投げ寄せられる男の瞳に目線を遣り、オスカーからは見えなかったが、おそらく幾度かの瞬きをして、

「ヴィクトール。」

驚いたような声音が、リュミエールのその声で綴られた。

それから初めてその時に気付いたように、やや身体を強張らせ、相手のその顔と、ちらりと背後のこちらのオスカーの顔とに視線を遣る。

「…なるほど。やはりあの者が、先日の演奏会の後にお話いただいた、当のお相手だと。……で、あれば。」

リュミエール、の方<sup>ほう</sup>、ですね？」

「…はい。」

少しほっとしたように、リュミエールが身体の緊張を解き、しかし申し訳なさに、ヴィクトールへと言葉を継いだ。

「ですが、ヴィクトール。その、」

「失礼。言い方について、ですな。多少は故意に、です。いささか、底意地が悪かったですかね。」  
そうして目を細め、ふと、男はオスカーへと視線を投げ掛けた。

その瞳の奥には遠慮のない、圧力の高い光が煌<sup>きらめ</sup>く。

「…あなたのことを、あまり知らない相手のようなので。」

言われたことの意味を理解した瞬間、オスカーの意識の全てをその男への果てしない敵意が襲い、全身の毛が逆立った。

「ヴィクトール。それは私が、」

「重ねて失礼を。いったん、それは措<sup>お</sup>いておきましょう。本日、俺が用事があるのはあなたに、ですから。」

「私に用事、ですか？ というか、よくここにしていると判りましたね？」

「ほぼ、通りすがりではありますが。『アンドレア・シェニエ』の公演と聞いて、あなたならもしや、



とも思いました。」

「私たちも、たまたまチケットを頂いただけなんですけれど。にしてもこんなところにまで、どうされましたか？ 先日お会いしたばかりだというのに。」

「この間は演奏会後で、あまりゆっくり時間がありませんでしたから。あの後で休みが取れましたので、改めて再度、申し込みに参りました。」

そう言うのと、その男は両手袋を外し、片膝を付いて、リュミエールの前に待<sup>は</sup>った。外した一双手袋を左手に纏め、同じ手には一本のみ包まれた真紅の薔薇を持ち。

「慣習に従って108本用意しても良かったのですが、あなたはそういう、虚礼めいた目立つことが好きでないかとも思いましたから。」

古い戦<sup>いくさ</sup>傷に塗<sup>まみ</sup>れた手がリュミエールの左手を取り、唇を近付けてその指先に口付けた。

首を傾げるリュミエールの表情は、背後のオスカーから見えない位置にあったが、おそらくそれは苦笑している時のリュミエールのそれだった。

「...Fino alla morte insieme?」

ヴィクトールの問に、

「Porto sventura a chi bene mi vuole.」

リュミエールは首を振りながら答える。

「Voulez-vous m'épouser ?」

「Merci, mais j'ai un petit ami.」

フランス語で、同じように。

「Ich liebe dich, willst du mich heiraten?」

「Tut mir leid, du bist nur ein Freund.」

同じ問と答とが、異なる言語で繰り返し重ねられ、オスカーには次に来る言葉がわかったような気がした。

そして思う。やめろ、その台詞を口にするな、と。

「…結婚してくれませんか？」

「ごめんなさい、でもその相手は、私ではないと、思っています。」

リュミエールは重なる二人の手に、空いたもう片手を添え、言葉を続けて語り掛ける。

「ヴィクトール、貴方はきつと本当の愛を知らないのです。貴方も真実の愛に出逢えば、それがそうなのだと、そしてその相手は私ではないのだと、きつと判るはず。」

そうして片手を取られたまま、上半身をゆっくりと背後へ翻しつつ、

「私は、オスカーに出逢って、教えていただいたのです。本当の愛を、あの人に、」

階上のオスカーに深海色のその瞳を向けたリュミエールは、その態勢のまま硬直した。

「…その薄汚い手を離せ、ドイツ軍人野郎。」

自分のどこからそれほど声が、と自分で思うほどに重く低い声が、オスカーの口から滔々と流れる。

昏い顔色、業火を湛えるアイスブルーの瞳、全身から焼き尽くすように湧き上がる憤怒と憎悪の気配。

「オスカ、」

咄嗟にオスカーへ向かって駆け出そうとしたリュミエールの動きは、ヴィクトールに捕らえられたままの片手を強く引かれ、遮られた。

「この手を罵るか。それは聞き捨てならんな。」

「傷のことを言ってるんじゃない、リュミエールに気安く触るその手を離せと言っている。」

オスカーが足を踏み出し、階段を一步一步下ってゆく。

「オスカー、」

リュミエールが焦燥するようにオスカーの名を呼び、再び片手を引かれて、そちらを振り返り己の手を掴んだままのヴィクトールへ目を遣った。ヴィクトールはオスカーに向けたままだった視線を外し、目の前のリュミエールを見上げる。

「……ヴィクトール、離してください。私の、誰よりも大事な人なんです。」  
ヴィクトールはしばらくそのまま、リュミエールの瞳を見詰めると、やがてするりと掌の力を緩めた。

「オスカー、」

身を翻し駆け出して階段を上ってゆく後ろ姿を、靡く長い髪を、ヴィクトールは目で追い続けた。全力で走り駆け上がったリュミエールの足は、オスカーの2段ほど手前で、その重い気配に竦んだように立ち止まる。

「……左手を出せ。リュミエール。」

隠し切れない怯えの気配を纏いながら、半ば言葉に反射しただけのように恐る恐ると差し出されたリュミエールの左手を、オスカーはポケットからハンカチを出し、その手をゆつくりと手に取って緩やかな手付きでリュミエールの指先を丁寧に拭き取った。続けて右手も差し出させて拭き取り、それからハンカチを地面へと投げ捨てる。後でどれだけ清めようが、そのハンカチを金輪際二度と使う気にならないのは明白だった。

数段降りて、階段の半ばにリュミエールと並び、視線は階段下の男を強く睥睨したまま、片腕をリュミエールの腰に回して力の限りに引き寄せる。その手はリュミエールの服を強く掴み上げ、籠もりすぎる力が時折振動となつてリュミエールの身体に伝わり、その震えはリュミエールに伝染してリュ

ミエールの心を芯から冷やさせた。

「よく俺が軍人だと判ったな、米国人。」

「その陰気なコートの下も制服ではないようだが、その癖にベレー帽はそのまま被つてきやがつて。それでなくても気付いたかもしれないがな、それだけ気配を隠す気がないのなら。」

ドイツ連邦軍に制帽は一応あるが、ナチス時代の記憶を嫌つてベレー帽が着用されることが多い。オスカーの言葉にヴィクトールは改めて頭上のベレー帽に手を添え、位置を整えた。

「口上の前に、俺が手袋を持つていないのが心底惜しまれる。」

もし今オスカーの手元に手袋があれば、一瞬の躊躇いもなく即座にその男に投げ付けて決闘を申し込んでいたに違いなかった。

「リュミエールから俺のことは聞いたか？ オスカー・ロックウェル、アメリカ合衆国弁護士だ。貴様は何者だ、名乗れ。」

眼下の男は、血の気の多い若者を冷静に咎めるようにして僅かに目を細めると、顔を真つ直ぐにオスカーへと見上げ、問に応えた。

「ヴィクトール・ヴァント、ドイツ連邦陸軍准将。身分についてはこの話に関係ないとは思うが、一応。」

「將軍閣下か。その若さで随分な出世頭だな。」

「……出世したくてした訳でもない。」

そう呟きながら、男の右手の掌がゆっくり握り締められるのを、オスカーは視界の端に捉えた。

「リュミエールの意向も無視して、随分と勝手な話を並べていたようだが。どれだけリュミエールのことを知っているつもりだ？ いつからの顔見知りか？」

「経緯が偶然でしかないのは否定しないが、少なくともお前よりは知っているはずだ。『リュミエール』

しか知らないお前よりは。」

「ヴィクトール、止めてください！ 私が悪いんです、オスカーにはまだ、」

ヴィクトールの言葉にオスカーが逆上する気配を感じ、リュミエールがヴィクトールへと視線を遣つて懇願する。オスカーはリュミエールの背の服地を掴んで再度力の限りに強く引き寄せ、リュミエールの押し詰まる息ごとその声を止めさせた。

「…その人に手荒な真似をするな。殺すぞ。」

先程から何ら変わりのないごく平穏な口調のまま、一国の軍人とは思われない極めて物騒な言葉がその男の口から漏れ、オスカーは鼻で笑つて、

「悪い、リュミエール。」

ヴィクトールの事は無視してリュミエールと瞳を見合わせ、腕の力を僅かに緩め、それから見せ付けるようにその唇に唇を重ねた。触れ合う箇所越しに伝わるのは、リュミエールの動揺と、その翳で微かに、だが確かに感じる、オスカーを心から恋い乞う気配。

唇を離して再度オスカーが男の方へ視線を遣る、その間を見計らつて、何の感情の揺れも見せることなくヴィクトールが言葉を続ける。

「その人とは、先週のチャリティコンサートで一緒に演奏させてもらった。初めて会ったのは、その少し前のとある行事の時だ。」

「それでプロポーズ？ 今回が再度、というのであれば、その時にもう？ 演奏会後に、と言つたな。

はん、正気の沙汰じゃない。」

「お前の言う通り、俺はその人と会ったばかりで、まだ何も知らない。

演奏会でのことがあつてな。その出来事で、一生を懸けて全て知り、一生を共にしてほしい人だと思つた。だから迷わず求婚した。…何か間違っているか？」

オスカーの全身を支配する憎悪の熱量が増し、身体が震える。一番厄介な類の相手だった。

これほどの率直で真摯な愛情を向けられて、おそらくは意識すらしておらず、それが故にそんな事があつたとオスカーに事情を報告することなど到底思い至らなかつたであらうリュミエールは、まさに本人の言う通り『自分に向けられる好意がわかつていない』としか言いようがない。

追い打ちを掛けるようにヴィクトールの低い言葉は続く。

「逆に俺には判らない。オスカーとやら、お前はその人と生涯を共にしたいとは思わなかつたのか？ 思つたのなら、なぜそれを正式に申し出なかつた？」

「ヴィクトール、止めてください。私はオスカーに今、そんな事など望んでいません。ただ、」  
そこでリュミエールはヴィクトールへの言葉を止め、目線をゆつくりと戻して、オスカーのその表情を僅かに見上げた。

オスカーの顔には、恋敵に向ける激しい憎悪と、恋人に向ける深い愛情が痛み<sup>まみ</sup>に塗れる様が。リュミエールの端麗な顔には、抑え切れない哀しみが、ともに滲んで。

リュミエールは両腕を高く掲げて、オスカーの背にその両腕を回し、首筋に顔を埋めた。

「私はただ、オスカーの傍にいたいだけです。：オスカーを失いたくないんです。恐いんです、貴方を失うのが。」

私なんかのことで、貴方がこんなに傷付くなんて、思わなかつたんです。ごめんなさい。」

静かに悲痛な声で綴られるリュミエールの言葉に、オスカーはゆつくりとその頭に顔を寄せ、背を抱き寄せていた片手をその髪に滑らせ、

「：リュミエール。」

耳元で小さく低く、深く囁いた。

「お前はまだ、愛を知らない。」

愛というものがこんなにも食欲で、時には醜く、時には何かを憎みすらして、時に激しく、どこまでも追い求めるものなのだ。オスカー自身にすら判っていないかった。いつだってスマートに、恋愛の成就であろうが別離であろうがこれまで熟<sup>こゝろ</sup>してきた自分が、これほどまでに心乱され怒りを募らせ悲嘆するのが、愛というもののだとは。

オスカーの想いは過たず正しくリュミエールへと伝わって、リュミエールは黙ったまま、オスカーの腕の中で頷いた。

リュミエールが腕の力を緩め、僅かに身を離し、オスカーの身体に両手を添え、再びオスカーを見上げる。

吸う息を微かに詰まらせて、告解のように言葉を開いた。

「ルイ・リュミエール・ブラン。」

フランスではファーストネームを複数付けることができて。リュミエールは2つ目のファーストネームです。ただ親戚にルイが多くて、ごく親しい家族などからは、リュミエール、で呼ばれて育ってきました。一般世間では、ルイ・ブラン、を名乗っています。」

「……そうか。ありがとう。」

オスカーがそれだけを返せば、リュミエールは泣き笑いのような微笑を浮かべ。

「19世紀の比較的良好に知られたフランスの政治家が、同姓同名で。普通に検索などすると、こちらの情報しか出ないと思います。……ただ、」

リュミエールが緩やかに顔を俯かせ、言い淀んだ言葉の先。ただ、何かの拍子に、リュミエールがオスカーへと知られるのを恐れる、何がしかの情報が出てこないとも限らない、と。

「知られてしまえば、オスカーを失うかもしれないとリュミエールが考えている、何かの。でも貴方が、望むのであれば、」

リュミエールの言葉の続きを、オスカーはその身体を強く引き寄せ、唇を唇で塞いで止めさせた。しばらくの間そのまま、それから何度か角度を変えて口付けを長く重ね、リュミエールの言葉が完全に留まったところで唇を離し、額を擦り寄せ、その深海色の瞳と氷青色の瞳とを見合わせる。

「聞かない。お前を信じる。お前が俺を想い、最善だと思ったことを俺も信じる。いつか話してくれる時が来る、そうお前も思ってくれていることを、俺も知っているから。信じて、待つよ。」

プロポーズも今はしない。それはお前と俺とで決めることだ。誰からの、何の作用でもなく。お前と、俺とで。二人だけで。」

リュミエールはオスカーを見上げたまま息を詰まらせ、目を閉じ、瞼を震わせた。オスカーは両腕を廻して肩を引き寄せ、リュミエールの表情と頭とを腕の中に囲う。リュミエールのその涙を、目の憎さ余りある恋敵の男には絶対に見せたくないかった。

「……ありがとうございます。」

この時に至つて。ようやくオスカーは『謝るな』を、リュミエールに言わずに済むようになったようだった。

「そういう訳だ。二度とリュミエールの前に顔を出すな、ドイツ軍人野郎。」

オスカーが視線を移してヴィクトールを睥睨し、吐き捨てるように告げれば、ヴィクトールは眉根を潜め、低い声で応じる。

「感心せん。その人はこれから、世界中を渡つて人々に幸福を齎すべき人だ。俺と顔を合わせる機会など、そして俺以外にその人を恋慕う者であっても、同じように、お前の望みとは関係なくいつでも訪れ得る。」

お前の都合で、その人の翼をいちいち縛り付けるつもりか？ それがその人を苦しめる。」  
リュミエールは顔を伏せ、オスカーの腕の中に収まったまま首を左右に振る。



だがヴィクトールの言葉はどこまでも正論だと、オスカーですら認めざるを得なかった。  
 「尤も、俺もその人を苦しめるのは本意ではない。今は去るとも、お前の言う通りにな。」

ですがリュミエール、覚えておいてください。俺の左手の手袋は、いつでもあなたのためにある、と。」

その後ろ姿が立ち去り、オスカーは片腕にリュミエールを抱えたまま、憤激に満ちた熱い息を深々と吐き尽くした。リュミエールが顔を上げ、涙の名残りの残る瞳を向けて気遣わしげにオスカーを見遣る。

「…先週のチャリテイコンサート、だったな。」

唐突にオスカーが——その視線はヴィクトールの去った方向、遥か先に遣ったままだったが——リュミエールに問うた。

「ヴィクトールとの合奏<sup>アンサンブル</sup>、ですか？ はい、」

「『動物の謝肉祭』の室内楽版だな？ 何のパートだった？ 奴は。」

「ピアノです。私と二人で、管弦楽のうちの二台編成の。」

オスカーは腕の中の、間近のリュミエールの顔を見下ろした。あの男とこのリュミエールとが一度でも音を重ねたという、もはや消し様のない過去の事実が心底腹立たしかった。

「楽譜を買いに行く。それと弓。」

「弓？」

「ヴァイオリンの本体は特別製のスツケースに入れてきたが、弓は持ってきていない。」

ヴァイオリン本体の全長は約60 cmで、斜めにすればぎりぎり持ち込み荷物にできるものの、全長約70 cmの弓はどうやっても機内持ち込みはできず、気温や湿度の影響が本体ほどではないこともあって、航空機での移動では普通は預け手荷物にするしかない。

「だから弓がない。今から買いに行く。」

「私とこれから合奏していただけるということですよ？ 場所はどうしますか？」

「お前の家だ。」

「家……」

家には誰も入れるな、と。オスカー自身も、と。オスカー自身がそう言つて。

オスカーは目を見合わせたままだったリュミエールの頬の頬に両手を添え、顔を寄せて囁いた。

「手は出さない。お前との特別で大事なことは、他の何にも誰にも左右させない。そう誓えるから、お前の家に行く。」

「…オスカー。」

この話を言い出したオスカー自身からのそういう話であれば、リュミエールの側に否やはない。

「楽譜は何の？ わかる気もしますが、」

『動物の謝肉祭』の『白鳥』。ピアノとヴァイオリン編曲版の。」

オスカーの両手で包まれた中、リュミエールの目が喜びに細められ、小さくオスカーへと囁き返す。

「あれこれと予定を立ててくれていたはずの貴方に、こんな事を言つてはいけないのかもしれないんですが。すごく嬉しいですよ。」

リュミエールは頬に添えられたオスカーの手をするりと抜け、オスカーの首筋に顔を擦り寄せて。

「また、貴方の音に触れられる。」

目を閉じ、甘く呟いた。

その顎にオスカーは手を遣り、軽く上向かせて口付ける。

「…オスカー、」

「……お前の家に行つてから、間違ひがあるといけないからな。しばらく、ここで。」

吐息混じりの。触れているだけとは思えないほどに、熱く、甘く、心と脳髓とを侵食するキスが。長く、繰り返し、角度を変えて、幾度も。

「…オスカー、」

「俺の弓は、お前の家に預けて帰る。……俺だと思ってる。」

低い囁きは言い終わらないうちに、震える唇を再び塞いで。

オスカーの長い指が白い首筋を密やかに辿り、耳朶へと行き着く。

「…ん、」

「…俺に触れられたいと。あの時より、もっと。思ってくれてる？」

「……オス、カ、」

熱い吐息は留まることを知らず、零れ続け、繰り返される口付けとともに、二人を包み続けて。

オペラ座、ガルニエ宮のファサードの正面。数多の彫刻をすら圧する二人の姿は、その日その時のその場の全ての人々の視線を釘付けにし続けた。

